#### ポケットモンスター ブレイカ

作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト http://pdfnovels.net/

#### 注意事項

は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ 囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範 テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。 この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ 小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

ポケットモンスターグレイカ【小説タイトル】

N N 6 コ 2 ト 1 Q

【作者名】

作者

【あらすじ】

【第一部】

たっぽらつに依に行う にによつ にぎしイッシュからやってきましたカントー に!

そんでもって旅に行くことになったぜ!

突然すぎるだって?

お前ら俺を誰だと思っていやがる!

よっしゃ 行くぜぇ!

(第二部)

世間が私を否定した。

だから事私は否定した連中の象徴になる!

このホウエン地方の英雄に私はなる!

T h e fi gh t i s inevitable

(別にあらすじの元ネタだけでは進みません他のもあります)

後キーワードが入りきらないものがあったため

いろいろと略しています。3つ程度。

後、アニメの設定などが混ざっています。

主人公以外の恋愛もたらふくあります。

なんか趣向が偏っています。

エキサイト翻訳だから英文があっているか不安

後、 んだろう。 キャラ紹介で3サイズとか詳しく書いてたりするのってどうな

### この小説について

ジムリーダーが別人出会ったりしたりします。 この小説についてですが一応は原作前の話となっており

さらには原作キャラクター オリジナルキャラの子供がいたりなどもします。 の家族構成が変更があっ たりします。

ポケモンバトルのシーンはかなり考えるのに時間がかかるので。 ポケモンバトルよりもストーリー 重視です。

第一部・第二部・第三部.....と何部かに分かれてお 一部ごとに根本的なストーリー目的が違います。 1)

最終的にはポケモンリーグ優勝という目標はあります。

使うことが時折あります。 キャラクター 設定に書かれているキャラクター の声優の声優ネタを

できれば確認して覚えておいてください。

ものが多いです。 と言うかキャラクター の名前は声優が演じたキャラから取っている

とっていない物もいくつかあります。

あと、読んだら感想をくれるとうれしいです。

ではよろしくお願いします。

# オリジナルキャラクターの名前の由来 (前書き)

えませんが あくまで名前の由来でありキャラクターの性格には全くないとは言

影響はあまりないと思ってください。

# オリジナルキャラクター の名前の由来

#### 【第一部】

マサムネ なんとなくかっこいい感じの名前である。

ミズホー他小説のキャラの名前の流用である。

シモン グレンラガンの主人公の名前

トガミ とある魔術の禁書目録の上条 当麻

カナデ なんとなく

カミカ 声優のかないみか

カナブ カナブン

カイのしん 昔な感じに

ガイト 舞人+凱:2したもの。 (勇者シリーズの檜山さん声

の主人公)

ガオイン 上記の搭乗ロボットの名前を組み合わせたもの。

ユウミ 勇者をもじったもの

カミコ とある科学の超電磁砲の御坂 美琴

シャドウ ソニックシリー ズに登場するライバルキャラ

サユキ 桜+雪

ウルサ 煩い

キイガ 黄色

トラスケ 昔ながらのカッコよさ

ウリカ ポケモンのタマムシジムリーダー のエリカ

エリノ 同上

エカミ 同上

リュボ コンボイ + 龍神丸 (玄田哲章さんが演じた主役ロボ)

アサノブ 平凡さを出したかった

コウイチ 鉄のラインバレルの主人公

#### 【第二部】

トウガ 超重神グラヴィオンのメインパイロットの名前

ナギサ CLANNADの古河 渚

ヤヨイ アイドルマスター XENOGLOSSIAの高槻や

よい

レジ 鉄のラインバレルの森次 玲二

レン 交響詩篇エウレカセブンのレントン・サーストン

クロウ 第2次スーパーロボット大戦 2 破界篇の主人公

ノマル ノーマル

結構ノリノリで書いてます。

## 第一壊 え?旅に出ろって?引っ越してきたばっかよ?

【トラックの中】

《ガダッガタガタッ》

いくらなんでもここはないよなぁ。 旅費けちりやがって.....」

トラックの中にいる少年はぶつくさ言っている。

「これじゃ俺も引っ越しの荷物みたいじゃねえかよ.....」

少年は引っ越しの真っ最中。

親が旅費軽減のため荷物と一緒に乗せたのだ。

《ガタッガタガタッ》

ああっ! しかも乗り心地最悪じゃ ねぇかどちくしょう!」

少年は内心疲れ切っていた.....

【マサラタウン】

「ここがマサラタウンか......イッシュとは違って田舎なところだな」

少年はイッシュ地方からカント 地方に引っ越してきたのだ。

ったね.....」 そうね。 うんうん お袋.....親父が転勤でカント 昔ながらって感じがしていいわねぇ に行くことになってよか

父親がカントーで仕事することになりここに引っ越してきたのだ。

「ふむふむ。 しみだぜぇ」 イッシュで見たことないポケモンたちに出会うのも楽

「そうね。この際だから旅にでも出る?」

いろいろあって俺は15歳。 .....旅ね。 確かに10歳から旅をするって良くあることだけど。 いまさらどうなんかな」

ょ 「そうやって何時もしぶっちゃって。怪我で時期がずれただけなの

「しかし.....

少年は渋る。

「年下の子たちに交じって旅と言うのをなぁ~」

「結構くだらないわよその理由」

やぁ、  $\exists$ コさん。 引っ越してきたんじゃのう」

少年が渋々と悩んでいるところに誰かがやってきた。

`あら、オーキド博士。お久しぶりです」

うむ。 おや、君はマサムネ君か。 大きくなったのぉ」

「え、あ、はい」

少年ことマサムネは大きくなったと言われたがオーキド博士に会っ た覚えはない。

む?その顔は覚えておらんとでも言いたそうな顔じゃな

「いや、そんな。えと.....」

ると困るのじゃが」 うかむ ......わしは別にいいんじゃがな。ミズホのことは忘れてお

「え?ミズホ?あれ、 なんか昔小さいころに一緒に遊んでた記憶が

...\_

ろじゃったかのぉ」 おお、 覚えておっ たかね。 まぁワシは最後に会ったのが3歳のこ

ついてきた子かなついな) (ミズホって言えば確か俺の後をお兄ちゃん、 お兄ちゃんと言って

結婚の約束などをしたことがあったような気がするが. 小さい頃マサムネと一緒によく遊んだ女の子である。

(あれ、これはフラグなのではないか?)

学んでいたが マサムネは事故で入院してた時はポケモンのことについていろいろ

いでにその手のゲームにも手を出していたのだった。

「 オー キド博士。 忘れるわけありませんよ」

「む、そうかそうか。それはよかったわい」

てまだ旅に出てないのかもしれない。 (計算すると今の年齢は10歳のはず.....そして今の話し方からし ふむふむ)

マサムネの脳内ではいろいろな妄想が膨らんでいく..

(10歳の女の子.....10歳.....10歳.....

な、ならいいんじゃが.....」じゅ.....うえっへ!? 大丈夫ですよ!?」ま、マサムネ君?大丈夫かね?」

年下の女の子が大好きなのである。 ちなみにマサムネはロリコンでもペドでもない。 さすがに幼稚園児には興味はない。 マサムネは大変なことになっている。

かったわい」 「む?来週には旅に出る予定でな。 「そ、それでミズホちゃ んはまだこの街にいるんですか?」 今日に引っ越してきてくれてよ

(チャンス!)

「あら?ちょうどいいじゃない。 いっ しょに旅に出れば?」

(ナイス! お袋ナイス!)

親に感謝した。 マサムネはちょうどいいタイミングで旅立つことを提案してきた母

うじゃ」 かな」 「おおっ! そうかそうか、 一人ってのは少し嫌だったけど旅する仲間がいれば別 それはよかったわい。 ミズホも喜びそ

(よし。 後はミズホちゃ んが可愛いことを願うだけだ)

母親ことヨ その時のマサムネの顔はすごかった。 コはその顔を見てやれやれと言う感じの表情になった。

てごめんねミズホちゃん) (まぁ、 旅にださせるいいきっかけになったね。 利用させてもらっ

「えつ? 「あ、そうそう。 お父さんがね。 もう決まってるの?」 あなたのためにってね」 マサムネ、あんたのパートナーはこの子よ」

そう言いながらヨ コはマサムネにボールを渡す。

俺の相棒か.....よしっ出てこい!」

そして中から出てきたのは。 マサムネがボー ルを投げる。

「モグ、リュー!」 モ、モグリュ!」 モグリューかぁ。 うし! よろしくな!」

それにモグリューは少し驚きながら自分の手もだした。 マサムネがモグリュー に手を近づける。

「そうだ。名前をつけてやろう。 よろしくなシモン!」 そうだな.....よし、 シモンにしよ

「モグリュ!」

「モ、モグリュュ.....」「さて、ミズホちゃんに会いに行こうかぁ」

次回に続く

# 第一壊 え?旅に出ろって?引っ越してきたばっかよ? (後書き)

今回のネタだけで突き進むと思うなよ!

と言うかネタだけで突き進むと思うなよ!

面白くない話もあるかもしれませんが.....

挽回は確実にします!

問題はないということで行きます。 技やポケモンの重さなどはアニメ基準で行きますので 4つ以上・重いからかかえたりするのは無理などは

### キャラクター紹介 (第一部版 序盤) (前書き)

序盤時ですので中盤ごろからには対応しておりません。 第一部 (序盤時) でのキャラ紹介です

女性キャラだけ身長と3サイズを書いてあります。

#### キャ ラクター 紹介 (第一部版 序盤)

#### 主人公

マサムネ (15) 妄想CV:緑川光 (仮) 出身:イッシュ

年下好きの少年(もう青年と言うべきか?)

事故により10歳に旅に出られなかったために今の今まで旅に出て

いなかった

熱血タイプで考えると言うことはあまりしない。

が、ポケモンが関係することになると頭の回転が速くなる。

入院中の楽しみがギャルゲー であったためにそういうことには敏感

である。

そういうことにもも頭が回るようになった。

見た目としてはマクロスFのアルトの ような髪型

だが顔は男前であり女には見えない。

身長などは年相応である。

ちなみにポニーテール好きでもある。

相棒

シモン ( モグリュー 妄想CV :柿原徹也

熱血的な性格だが少し臆病なところがある。

マサムネの事を兄貴分のように慕っている。

背中にサングラスのような模様がある。

文字が書けるのでそれにより人間と会話ができる。

ボールから出るとマサムネのそばから離れようとしない。 始めてであったときはなぜか怪我をしていた。 元気な性格だが何かあると恐ろしく好戦的になる。

シャドウ (コイキング 妄想CV :遊佐浩二 (友人の直感

普通のコイキングとは色違い以外にも違いがある。 親父さんからもらった色違いポケモン。

ヒロイン

ミズホ (10) 妄想CV:桑島 法 子 出身:カントー

3歳の頃にマサムネと出会い、 身長144 んでいた。 c m B85 (H) マサムネが事故に会う前までよく遊 W 4 8 H 8 0 化け物である。

をやめた。 10歳になったからマサムネは旅に出ただろうと会いにに行くこと

なお、 ちなみに遊びに行く時はオーキド博士の助手とともに行っていた。 母親も忙しかったので事故の事をミズホには教えていなかった。 ところがある。 かなりの一途でありマサムネ以外の男を男として見ていない

そしてかなりの妄想癖がある。

# **トガミ (ゼニガメ ) 妄想CV:阿部 敦**

不幸だったり幸福だったりするゼニガメ。

シモンの良き親友ポジションキャラである。

トガミもサングラスを所持している。

シモンの協力により文字を書き会話することが可能。

カミコ (ピカチュウ 妄想CV :佐藤 利奈

カナブの勘違いにより弱っていたところをミズホに捕まえられた可

哀そうな子

勝気な性格であり、 特にトガミに対してはすぐに手と言うより電気

が出る。

電気が効かないシモンは普通に話すことができる。

後何やら普通ではないことがあるようだ。

ボーイッシュ少女

カナデ (10) 妄想CV:池澤春菜 出身:ホウエン

1 4 5 c m B 7 0 Â A W 5 6 H 7 6 他の女性キャラと

比べるのはかわいそうである

頭脳派タイプ。

スタイリッシュな男の子というような服装をしている。

かわいい系のものは一切持っていない。

マサムネたちに少し興味を持っている。

空気を読むということをよくするが、 今現在家族はニビシティに住んでいる。 読めてないときが多い。

相棒

カミカ ( クチート 妄想CV かないみか

愛想を良くふりまく元気な性格

だが、怒ると恐ろしいことになる。

歌うことが大好きである(別に相手を眠らせることはできない)

サムライ鎧のむしとりしょうねん

カナブ (10) 妄想CV:白石 涼 子 出身:カントー

外見はイケメンと言えるほどの少年。 虫好きなのは親からの遺伝のようなもの。 モデルは初代アニメのサムライしょうねんであるが 何やらサムライと言うよりは忍者と言うような行動をとる時もある。 鎧以外は別物。

相棒

カイのしん (カイロス 妄想CV 難波 圭

通常のカイロスからは考えられないほど俊敏。カナブが親からもらったポケモン。

#### 似ている少年

ガイト (15) 妄想CV:檜山 修之 出身:シンオウ

過去にマサムネと同じような事故を経験している。 ただし髪型はポニーテールではなくロング好きである。 熱血系男子。いろいろなところがマサムネと似ている。

#### 相棒

ガオイン (リオル 妄想CV ·池澤春菜

勇敢な性格。回転を使った攻撃が得意。

#### ほんわか少女

ユウミ (10) 妄想CV:長谷川明子 出身・シンオウ

身長145cm B 8 8 (G) W 5 3 H 8 1 なにも言うこと

はない

ガイトの従妹である。

ほんわかとしていてガイトの事は呼び捨てで

ガイトの事が大好きである。

## 第二壊 青春かぁ……うん! 青春だぁぁあぁぁぁゎ! (前書き)

進めこの螺旋道を!

感想大募集!

凄くうれしいですけど!お気に入り登録しても感想ないと感謝しないぞ!

## 【オーキド家:玄関前】

「こぉぉぉぉっこにミズホちゃんがいるんすねっ!」 そ、そうじゃが.....何やらおかしいノリになってないかの.....」

る マサムネのスーパー ハイテンションにオーキド博士は少しひいてい

「えぇえ~? 別にそんなことないすよぉ~」

「モ、モグリュ?」

はぁ」 「どうしたよシモン~なにそんな『ほ、 本当に?』 みたいな鳴き声

「モ、モグリュリュ」

いない。 シモンの言葉はマサムネに通じているようだがマサムネは気にして

に見えるの.....」 あって間もないポケモンと意思疎通しておるのにできてないよう

「なにを言ってるんです博士! 早く入りましょう!」

「う、うむ」

そしてマサムネ達は家の中に入った。

あら、 お帰りなさいおじい様」

うむ」

玄関に入るとお姉さんといった感じの人が出てきた。

博士。 この人は?」

む、ああ、ナナミじゃ。 ミズホの母親の妹の娘になるかのぉ」

ああ、 従姉妹なんですね」

あるミズホちゃんの母親って.....) (てか、ミズホちゃんの母親の妹の子供なんだよな……すると姉で

マサムネ君? どうしたの?」

えつ!? ぁ いせ、 別に....」

たんだな』 マサムネはついつい『ミズホちゃんの母親は行き遅れになりかけて

などと考えていて周りが見えていなかったようだ。

「モ、モ、モグリュ!

あら、 カントーでは珍しいポケモンね」

まぁ。 モグリュー のシモンです」

マサムネは頭にいるモグリューを胸に抱きナナミに差し出す。

あらあら。 かわ (1 (1 わね

モモモモモモモモモオオオオオオ!」

だ (ふつ、 ナナミさんに抱えられて興奮しやがって... かわいいやつ

## マサムネは年上に興味がない。

っ む ? 「 え ? たのじゃろう」 おおっと、そういえばナナミよ。 ミズホですか?さっき出かけたと思いますけど... 入れ違いかのぉ。 きっとマサムネ君の家に向かってしまっ ミズホはおるかの?」

! ? (なん ...だとっ!まだ俺を焦らすと言うのかミズホちゃぁぁ あ h

マサムネは無表情だが頭の中では大変なことになっている。

「そ、そうじゃのぉ.....」「はっ!」ならうちに戻りましょう!」

足で家の方に向かった。 そう言ってマサムネはナナミからシモンを受け取りマサムネは駆け

「さぁ。わかりません」「ふむ、青春と言う物なのかのぉこれは」

青春は人それぞれである!青春まっただ中のマサムネ。

年齢的にいえばナナミもまだまだ青春中である!

うおおおおおおおおお モグリュアアアアアアア アア 青春まっただ中ぁぁぁぁぁ

家に向かい駆け足のマサムネ。

振り落とされそうで必死に捕まるシモン。

Ę 年下幼馴染恋人化フラグゥゥゥウゥゥゥ え?前に人がいる?って止まれんわぁぁぁぁぁぁ! モ ! ? モオオオオオオオオオオオオオオ ウ ウウ

《プッピガァン!》

「いたたたた。あ~大丈夫ですよ」「いてててて。あ~大丈夫ですか」

「「あれ?」」

も、もしや、貴方はマサムネさん?」も、もしや、君はミズホちゃん?」

(想像を超えた長身美形男子ですよ!?)(想像を超えたロリ巨乳少女ですか!?)

「久しぶりだね!」

久しぶりです!」

「元気にしてた!」

一元気でしたよ!」

モ、モグリュ?!」

# 【マサムネ家:マサムネの部屋】

いやぁ。 い え ! 荷物の整理なんか手伝わせちゃってごめんねぇ」 お礼なんて結構です!」

「モグリュゥ.....」 「ガメガ。ゼニゼニ」 「モグ・!」 「モグ・!」

ポケモン同士でいろいろと慰めあっていた。 イチャイチャな青春空間を展開している持ち主を横に

ぁ そうそう紹介するよ。 そうそう紹介します。 俺の相棒のモグリューのシモンだ」 私の相棒のゼニガメのトガミです」

「ゼニゼニ」 モグリュ」

えっ?マサムネさんはもう15歳なのでは?」 そうそう。 旅に出るらしいね。 俺も一緒に行ってもいいかな?」

ミズホがそういうとマサムネは少し下にうつむいた。

いや、 少し事故で怪我をね.....」

あっ.....すいません」 いやいや、いいんだよ」

少し静かになる.....

「それでさ。一緒に旅に行ってもいいかな?」

はい! もちろんです!」

(うおっしゃ!計画道理!)

(予想外、 でも最高です!)

「ゼニ」 「モグ」

そんなこんなで二人と二匹の旅は始まりを告げる.....

『ご飯できたわよぉ。ミズホちゃんも食べていきなさ~い』

「「はぁい」

「ゼニ....」 「モグ……」

次回に続く

# 第二壊 青春かぁ.....うん! 青春だぁぁああぁぁぁ! (後書き)

テンションが高すぎる持ち主二人。テンションについていけない二匹。

これが螺旋青春道.....

書いててものすごい恥ずかしい。

バトルはまだ遠い.....

## 【マサムネの家:リビング】

「は、はい! おいしいです!」「どう? おいしい?」

マサムネ達はヨ コが作った特性料理を食べていた。

「なんかいつもより豪華だな」

引っ越して初めてなうえにミズホちゃんもいるしね」

私なんかのために! ありがとうございます.....」

わんさかわんさかわきあいあいと盛り上がりを見せている。

「 モグモー グモグモグ」

「ガメガメー メ、ゼニガァ」

「モォォグ」

゙ガメ!」

ポケモンたちはポケモンたちで何か盛り上がっているようだ。

「それで、一週間後に出発するのね?」

はい。そういう予定でした。でもマサムネさんは準備などは.

「いやいや、まったく無問題!」

「そ、そうですか。よかったです」

(マサムネ.....見てると何だか.....て言うかもう相思相愛状態なの

じた。  $\exists$ コは二人の様子を見ながら既に二人は互いに好きなんだと、 感

少し昔を思い出していた。

(しかしまぁ.....ミズホちゃんは10歳なのよね.....)

「ヨ コさん? どうかされました?」

「え?いや、別になにもないわよ」

そんなこんなで時間は過ぎていく.....

って行ったりする?」 「あらあら。もうすぐ二人で一緒に旅するって言うのに、 「 え ? あらもうこんな時間ね。ミズホちゃんどうするの? あの、ヨ コさん。家は近いので別に.....」 今日は止ま 恥ずかし

その言葉とともにミズホは赤くなり爆発した。

いのかしら?」

あっ!ミズホちゃんが倒れたぞ!」

「やっぱり若いわね。育つところは育っても」

なにさ言ってるだこの母親はぁ! ただし大正解です!」

これを見ている人が一人もいないと言うのはもったいない。 さすが親子と言わんばかりのコンビネーションである。

「で、ミズホちゃんどうするの?」

「どうすると言われても.....」

「じゃああなたの部屋で一緒に寝なさい」

「なつーーーーーーーー!」

マサムネはすごく驚いた。

この母親は何を言い出すのだ。

なによ、 まだ10歳と15歳でしょ。 なにを考えてるのよ」

「いや、10歳だけどね!? なんですがね!」

まったく......昔はこんなんじゃなかったわよね」

「人間は成長して変わる生物なのです!」

マサムネはその場をくるくると回りながら叫び続ける。

とりあえずあなたの部屋に連れていくわよ。 と言うかベットは一

つしかないし他に寝るものはないわよ」

「それをわかっていながら連れて行く母上様の考えがわかりません」

「なによ。 子供が二人寝るだけよ。間違いでも起こるの?なに?い

まどきは15歳でそこまで行くの?」

いや、 ないとは思うけど..... まじでやるのですぅか?」

ニヤリと笑いながらヨーコはミズホを抱え。

' やるって何をやるのよ」

そう言いながらマサムネの部屋に向かった。

おぉおぉおぉおぉ うっ うぉぉぉ おおおおおおおおおおおおお お袋ぉ

## 【マサムネの家:お風呂】

「う~何なんだあの母親は。 本当に親か? 人間か? 子供の親か

風呂場でマサムネは体を洗いながらいろいろ考える。

「モグ。モーグ」

「ああ、シモン。俺の理解者はお前だけだよ」

「モグリュ!」

ホちゃんをあおる前に」 「そろそろ上がろう。まだ脱衣所に人の影はない。 あの母親がミズ

そう言ってマサムネは風呂からあがり脱衣所に出た。

「ふう。 しかし今日寝る時はどうなってしまうのか」

《ガラっ》

¬ ^?

「あ!」

そしてマサムネは何も着ていない。突然廊下への扉が開きミズホちゃんが現れた。

きやぁぁぁぁあああありすいませええええええん!」

叫び声とともにミズホは走り去り、マサムネは扉を閉めた。

(なにこれ! 普通逆でしょう!)

マサムネはその場にへたり込む。

「モ、モモグググモグリュ!」「ああ、ははっ!」ありがとうなシモン」「モ、モグリュゥ.....モ、モグモグ」

熱い信頼関係は深まり、男と女の関係は深まったのかは分からない。

【マサムネの家:マサムネの部屋】

「お袋が考えてることとは違うと思うよ.....」「帰ったわよ.....なにがあったの風呂場で」「あれ?お袋。ミズホちゃんは?」

そんなこんなで怒涛の一日は終わる。

## 第三壊 親って何なんですか? 精神道徳って何!?(後書き)

そろそろ旅に出ます。

時間がぐんと飛びます。

その間に起こったことをダイジェストで行きます。

いつもより短いです。

### 第四壊 ダイジェスト。 でもいろいろあったんだよ本当に

### 【それからそれから】

な 「簡易テントに懐中電灯と。 なんかキャンプに行くみたいな用意だ

「はいはい。ポケモンフーズもね。大事だな」「モグリュ。モグモーグ」

しかしあれからと言う物のいろいろあった。マサムネは出発の準備をしている。

### 親達によるくっつけ合い

どうやらマサムネとミズホをくっつけたいようだ。 そのために何かあるたびに二人きりにしてくる。 親達は父親・母親ともども知り合いだったらしく。 あえてのスルーである。 ミズホは顔を赤くしていたが。 マサムネはそこはあえて何事もないように普通に進めた。

### ポケモン同士の友情

いろいろ大丈夫なのかと......これからについて話し合っていたのだ。二匹はマサムネ達が二匹きりにされている間なにも言うまでもないだろう。

## オーキド博士の3人目の孫

彼の母親はミズホの妹さん。 彼はクールな少年のように感じた。 姉のナナミさんのようである。 つまりはミズホのいとこである。 三人目の孫のグリーン君とマサムネは出会った。 しかし好きなタイプの女性はミズホではなく

そして父親から

報われない話だ。

が強くなった。 送られてきた荷物をひらいた。 中には捕獲用のボール数種とマサムネ好みの服が入っていた。 父親からの思いを受け取りマサムネは《ちゃんとした》 マサムネは仕事で家にめったに帰ってこない父親から 旅への思い

じゃあ、 楽しみにしてるわよ」 行ってくるよ。 チャンプになって帰ってくるわ」

いつもの信頼した親子関係。

「ミズホもがんばるのじゃぞ」

はい!

これは仕事でこれなかったミズカからのプレゼントじゃ」

お母さんからですか。 大事にすると言っていて下さい」

何やら家族との関係が覚めているような感じだ。

か?) 時も会話していたのは電話だった.....親子であまり会えていないの (ふむ。 考えてみれば俺とミズホちゃんをくっつけようとしていた

その気持ちをミズホはわかっていないのだろうか。 ミズホの親はミズホのことが大事なのだろうが。 いろいろ成長していても10歳だ。

5歳のマサムネとは心の成長度は違うだろう。

あ、うん。さて、ミズホちゃん。 出発しようか!」

「はい! 行きましょうマサムネさん!」

「おおっと。待ちたまえ二人とも」

いよいよ出発と活き込んでいるとオーキド博士が話しかけてきた。

モンしか調べられんがの」 「このポケモン図鑑を持っていくといい。 未完成でカント のポケ

「図鑑ですか。ありがとうございます」

「ありがとうございます!」

そう言って二人はポケモン図鑑をオーキド博士から受け取った。

シモンの事は調べられないんだな」

「モグゥ〜」

終わってなくての。間に合わなかったんじゃ」 すまんのぉ~ 他の地方の博士たちとの図鑑制作用データの交換が

「いえ、それでも嬉しいです」

そう言いながらマサムネはポケモン図鑑を服のポケットにしまった。

「では、気をつけていくのじゃぞ」

マサムネも気をつけるのよ。おばあちゃんにはなりたくないわよ」

見送りの言葉にしてはおかしいものだ。

そもそも何度も言うが二人はまだ未成年で結婚できる年齢でもない。

何かあったらそこで人生が終わりだ。

「なにもおみるわけありませんよ、お母様」

「わかってるわよ、そんな事」

゙ まぁ、今はって言葉もつくけど」

「なら落としてきなさいよね」

無論

二人はこそこそと会話しているのをミズホは少し離れたところから

不思議そうに見つめていた。そして.....

そろそろ行くとしましょうか! ミズホちゃん」

「あ、はい!」

その二人の背後には二匹のポケモン。そんなこんなで二人の旅は始まる。

二人と二匹の長い物語はここからスター トするのである。

「おーい。ミズホちゃん! 下着忘れてるわよぉ。特注品でしょぉ

「なつ! なああああああああま!」

ミズホは荷物をひとつ忘れていたのであった。

「あれ、勇みよく出発して盛り上がっていたのに.....」

「ガメメメ.....ガメガアアアアアア!」

「モ、モグモグ?!モグモモググモ?!」

そんなこんなで旅は始まる。

次回に続く。続くったら続く!

いよいよ旅の始まりですよ。

### 第五壊 バトル?なんだよそれ。 あるのは男の花道よ

#### 【一番道路】

「いやはや。災難だったねえミズホちゃん」

「はうぅぅぅう.....」

言うまでもなく恥ずかしいのだ。ミズホは顔を赤くしている。

う (はうぅぅう。やっぱり私は普通じゃないんですぅ! 嫌われます

実際そんなことはないのだが、乙女心とは複雑なものである。

「それはさておき。 ボールは持ってるよね?」

あ、はい。お祖父ちゃ んにモンスターボールをもらいました」

ああ、 普通のやつね。 俺は親父からもらったこの数種のボール」

作られる マサムネが持っているのはジョウト地方でぼんぐりと言う木の実で

特性のボールである。 らったのだ。 マサムネの父親がガンテツ氏に頼み作っても

ですか!?」 す、すごいです! あの有名なガンテツさんが作っ た特性ボール

そう。 これを用意してくれた親父には感謝せんといかんね

「お父さんですか.....」

むっ:: ...とにかくだよミズホちゃん! ポケモンを戦わせ捕獲す

る! 「はいです!」 それがポケモントレーナーと言う物だよ」

それを聞いてミズホは元気に返事をした。そして揺れた。 マサムネは少しさびしそうな顔をしたミズホを元気づけた。

「う、む。よし! はいです!」 とりあえずトキワシティに行こう!」

そんなわけで草むらを歩いて行く二人。

「お、やる気だなシモン。よし初バトルだ!」「モグリュ!」「つ~ん。ポッポだしなぁ.....」「つ、捕まえますか!?」「おお、ポッポだ、ポッポ!」

「ポォポォォオォ!」「モグモグモグリュゥゥゥ!」「こうそくスピンで終わりだ!」

レベル差と言う物なのか。あっさりとポッポを倒した。

モッグ!」 さすがだ。 シモン.. おや?今度はコラッタの登場だ」

## しかも4匹。コラッタの群れだ。

「あの、マサムネさん? 4匹いますけど?」

倒 す ! 2対4だけど倒す! 道理は俺達でぶっ壊す!」

「え、あ、それでいいんですか?」

「いいんだよ!」行くぞぉおぉシモン!」

· モグッモ! モグモ!」

そう言うとマサムネとシモンはコラッタの群れへ駆けだした。

「え、あ、えぇと……行くよトカミ!」

「ガ、ガメガァアアアァア!」

へっへへ..... ついたぜトキワシティ」

あ、 あうあう.....あの、 私が襲われそうになったところを助けて

もらった時の怪我が.....」

「ふっ! 男ってのはなぁ! 少しぐらい怪我があった方がい いも

んなんだよぉ!」

「モグゥ!」

っている。 マサムネとシモンはミズホとトガミの前で仁王立ちして男らしく語

「はあ、はううう」

(か、かっこよすぎます!)

「ゼ、ゼニィ.....」

## なおトガミはボロボロだ。

へへつ。 まァなんだな..... ポケモンセンターに行こうぜ」

あ、はい」

そう言い、 マサムネ達はポケモンセンターに向かった。

しかし..... ここにいるトレーナーは年下ばかりだなぁ

「まぁ、 10歳から旅ができるという決まりになっていますし。 す

ぐに出るこの方が多いんですよ」

「なんか年上みたいに言うね」

私ももうすぐで11歳です。出発が一年遅れてたんです」

「え?なぜ?」

「..... 秘密です」

そう言うとミズホは少しうつむいた。

ふむ.....ま、人には知られたくない秘密ってのはあるもんだわな」

· マサムネさんにも?」

おいおい。そう言うのは聞かないって話だろ」

そう、ですね」

二人の仲は少し進展したのだろうか....

にはタダで料理って言うからどんなものが出ると思っ

たらこんなものだったな」

た タダなんですから文句なんか言っちゃだめですよ!」

「あ、あの、声、小さくな」

なのだ。 別だん不味いというわけではないが、 マサムネが自分で作るレベルの料理より下と言うくらいの美味しさ 美味しいというわけではない。

超えるほどである。 マサムネの料理の腕は親直伝であり。 そこらの家庭料理などは軽く

「おやおや、大声で凄いこと言うねぇ」

「あん? 誰だ?」

どうやらマサムネよりは年下だろう少年だ。

なんだぁ、お前? まァ無礼ってのはわかるけどよ。 お前が出て

くる必要があるのか?」

いせ、 ただよくそんなことがいえるなって思ってさ」

「ふ、俺の料理の方がうまいからさ」

「 君がか。どうやら年上のようだね」

わかっててそのしゃべり方か」

マサムネは少し少年を睨む。

「マ、マサムネさん? あの、喧嘩は.....」

「いや、喧嘩はしてないよ。別にね」

ふふつ。 そうだね。 僕が話しかけたのが悪かったかな」

ただ年上へのちゃんとした対応ができてなかったのが気に障った

だけだよ」

「ふふつ。 ごめんなさい。 そうだね僕の名前を名乗っておくよ。 僕

の名前は『カナデ』。 よろしく」 「あ、あの、声、小さくな」 「?カナデ? 女の子みたいな名前ですね」 「ふえ? ふええええ!」 ..... なぁミズホちゃん。この子は女の子のようだ」

これから先の出会いの一つにすぎない。この出会いは一応の出会い。

続くよ

# 第五壊 バトル?なんだよそれ。あるのは男の花道よ! (後書き)

戦闘描写は重要なときのみ。

なぜなら熱血度をたびたび消費するわけにはいかない。

だいたいヘル。

# ヘルアンドヘウンってのはこのことだよ

# トキワシティ:ポケモンセンター宿場・集団個室A】

ペ、ベベベ別に私達はそんななかではありませんからぁ!」 いやぁ、悪いね。二人だけの空間を邪魔して」

(なにその否定。 少し泣いてるようにも聞こえる不思議)

「そ、そうかい」

(カナデちゃんがちょっと引いてるじゃないか。バレバレだよ!)

トキワシティ のトレーナー 達が止まるための施設。

ここは二段ベットが4つあり4人まで泊まれる。

そのためこの三人でこの個室で泊まることになったのだ。 今日は満員まであと一人と言うまで宿泊トレーナーがいるらしい。

そういや、カナデはどこの出身なんだ?」

僕 ? 僕はニビシティ。と言っても引っ越してきたばかりなんだ」

「カナデもか」

「カナデもと言うと。あなたも?」

「ああ、イッシュからな」

「それは遠いところを。僕はホウエンさ」

ホウエンかぁ。 俺のしらないポケモンもいるんだろうな」

まぁそうだね。 僕のポケモンは明日にでも紹介しますよ」

カナデはマサムネに対してのしゃべり方は夕食時と違い 丁寧になっている。 マサムネの言葉が通じたのかもしれない。

「そうか。じゃあおやすみ」

「モグゥ〜」

以前に窒息死しかけるほどに苦しんでいたらしい。 ちなみにトガミはミズホと一緒に寝ていにない。 マサムネはシモンと一緒に寝ている。

「おやすみなさいです」

「おやすみ」

「ん.....む、朝か」

「モグゥ.....

マサムネは目が覚めてベットから出る。

おや、 カナデがいないな。顔でも洗いに行ったのか?」

「モグリュ?」

どうやらカナデはマサムネより先に起きていたようだ。

「いい時間だし、ミズホちゃんを起こすか」

そう言いながらミズホが寝ているベットに近づくマサムネ。

「ミズホちゃん。朝だよ」

「ふみゅう~」

起きないなぁ ミズホちゃん! 朝だって!」

「はぁ~みゅ!」

「グオボァ!」

マサムネはミズホに捕まってしまった。奇妙な声を発したと思った瞬間

「うぉ。 こ、これはぁぁぁぁぁ!」

これぞトガミが窒息死しかけた技。

『地獄の楽園』である。

こんな意志のない状態でやられてもうれしくない!」

そう言ってマサムネは『地獄の楽園』を自力で脱出したその時。

「ほえ?」

あ!」

ガチャ

ブチュ?

ふう、 やはり朝は少し歩くのが.....あ、 ごめん。 ごゆっくり」

パタン

ιζί ふぎゃ あぁぁぁぁぁああぁぁぁぁぁぁぁぁ

ふぐう」

「モ、モグゥ!?」

マサムネはその場に倒れた。

ふぎゃぁ .....あ!マ、マサムネさぁぁぁぁ

. 私のせいで.....」

「いや、いいんだよ」

いやぁ、空気呼んだのにそのまま行かなかったのかい」

「いや、呼んだて.....」

残念そうにしているカナデに言葉をかけていた。 気を取り戻したマサムネは泣き続けるミズホと

「まあ、 ぁ はい ι, ι, とりあえず着替えよう。 俺は少し席をはずすよ」

ガチャ

な。 「しかし。 なんかもっと強い奴と戦いたい!」 なんかポッポとコラッタの大軍以外と戦った記憶がない

「モグっ!」

少し戦いに飢えている二人。 マサムネはジャージ姿でポケモンセンター周辺の公園を走っている。

- かと言って旅始めだしなぁ。 適度な強敵いないかなぁ」
- 「ならば拙者と勝負するでござる」
- 「え? 誰?」
- 拙者はむしとりしょうねんのカナブでござる」

鎧を身にまとったむしとりしょうねんのカナブが話しかけてきた。

- バトルの申し込みか? しかし俺は旅を始めたばかりで」
- 拙者も旅を始めようとしていたところでござる」
- 「お、そうなの?」
- 「うむ。 拙者はトキワ出身トキワ育ちの虫好き男児でござる!」

何やらかっこいいポー ズをとるカナブ。

「でもちょうどいいな。まぁジャージ姿で悪いが。 朝一バトルと行

くか!」

「モグゥ!」

「では行くでござる! 行くでござるカイのしん!」

「ロオ ス!」

カナブはカイロスを繰り出した!

いよいよ戦いが始まる.....

- 「おそいですね、マサムネさん\_
- 女にも何かあるように男にも何かあるものなんだよ」

## 第六壊 ヘルアンドヘウンってのはこのことだよ! (後書き)

むしとりしょうねんのカナブ君

モデルは言わずもなが初代アニメ四話の

むしとりしょうねんです。

サムライしょうねんのほうが正しいのかもしれないけど。

見たのが当時放送していたものなので記憶があやふやです。

読者のみなさん! バトルですよ、バトル!

#### 第七壊 熱血とは! 心のつながりとは さぁ、 戦いだぁ!

### 公園:中央広場】

「カイのしんか。 いい名前だな」

「そうでござるか? そう言ってくれたのはお主が初めてでござる

「でも名前ならおれのシモンも負けてはいねぇ!」

「うむ。何やらかっこいい感じの名前でござるよ」

だろぉ? よっし!ノリノリになってきたとこで始めっか!」

「ござる!」

が向かい合っていた。どうやらやる気満々のようだ。 中央広場のフィールドでモグリュー のシモンとカイロスのカイのしん

行くぜっ! ひっかくだ!」

モォグリュ!」

シモンはカイのしんめがけて突撃する。

ただの突撃でござる。そんなの横によければいいだけでござる!」 ロオス!」

俊敏な動きでカイロスは横によけようとする。

ところがどっこいだ! 緊急ブレー キでこうそくスピンロケット

アタッ クだ!」

ロケットのごとくカイのしんに向けてこうそくスピンをした。 ひっかく攻撃のために加速したスピードでその場にとまった瞬間

加速 + こうそくスピンによるロケットのようにつっこむ!」 なんと! でござる」

普通のこうそくスピンのさらに倍速のこうそくスピン。 まさに高速回転するドリルのごとく.....

「ロオオオオオス!」「モオグウウウウウウウウウリ」

しかしカイのしんは倒れない。カイのしんに攻撃は直撃する。

ちつ。 もともと威力の低い技だったからな....

「モグァ!」

「ロオス.....」

むむむ。 旅始めとは思えないほどの戦法でござる.....」

旅始めとか戦法は関係ねえ! 俺達は熱血で進むだけよ!」

ふむ。 ならば拙者らも負けられんでござる! カイのしん!」

カナブがそう叫ぶとカイのしんはシモンに突撃してきた。

突撃してきたら横によけるだけ。 さっきおまえの言ったことだぜ

**ござる!」** 「そんなのわかりきってるでござる! カイのしん、 しめつけるで

「モグリュ!?」

横によけようとしたところをカイのしんの腕につかまりしめつけら

「どうでござるか! 手を伸ばせばよける前に捕まえられるでござ

「そうね。 モォグリュ!」 さすがだ。 感動できだ。だが、 無意味だ!」

シモンはこうそくスピンによりしめつけから脱出した。

「な、なんでござるとぉ!」

「何でもかんでもきくと思うなよぉ!」

脱出したシモンは空中にいる。

うううううううう これで終わりだぜええええぇええ! 超落下ひっかくっ

「モオグゥ!モオオオオオオグ!」

「ロオオオオオオオス!?」

落下速度が追加されひっかくの威力は倍増する。

そしてっ!

「カ、カイのしん!?」

「ロォ~ス……」

カイのしんは戦闘不能のようだ。

俺達の勝利だっ ふふっ始まるぜ俺達の真の始まりが!」

· モオオオグ!」

てしまったでござる」 か、完敗でござるよ。 レベルもそれほど差がないと言うのに負け

「いや、カナブの戦闘もなかなかだったよ」

時また戦おうでござる」 「カナブ……うむ。マサムネ殿、 拙者また強くなるでござる。 その

「ああ、わかったぜ!」

そう言ってマサムネとカナブは熱い握手をした。

「さて、 拙者は自宅に戻って出発の準備をするでござる」

「そうか、旅に.....ん? ってかミズホちゃん達の事忘れてたしい

!

「モモグゥ!」

「む、旅の仲間がいたでござる?」

「ああ! 待たせてるんで悪いな。 じゃシーユーアゲイン!」

「よ、横文字は.....」

カナブが戸惑う中マサムネは走って宿場に戻って行った.....

トキワシティ:ポケモンセンター宿場・集団個室A】

「そんなのとっくの昔にだよ。遅かったね」「うぉぉおぉぉぉ!」き、着替え終わった?!

「し、心配し、したん゛でずよ゛ぉ~」

ミズホは泣きそうな感じで話しかけてくる。カナデはそっけなく話しかけてきた。

「あ、ご、ごめんよミズホちゃん!」

そしてつい勢いでミズホをマサムネは抱きしめた。

俺はミズホちゃんに心配させるようなことはもうしないよ.....」

゙マ、マ゛ザム゛ネザァァァン゛!」

...... お熱いことで...... さて、僕はマサラに行くからここでお別れ

だよ」

「え。あっと! 「ああ、 何やら君が帰ってくるのが遅くて流れたからね.....」 そ、そうか.....あれ、ポケモンの紹介は?」

そう言ってカナデはモンスターボールを取り出した。

「でてこい、カミカ」

そう言ってボールからポケモンが出てくる。

「チトオ

出てきたのはクチートだった。

「僕の相棒のクチートのカミカさ」

「チト」

「ふむ、始めてみるけど口二つだなぁ」

「チト」

ちなみにミズホちゃんは泣き疲れたのか寝ている。 そういうところは年相応だ。 カミカはマサムネに愛想ふりまいている。

「じゃ、元気でね。また会おう」

「ああ、またな」

そう言ってカナデとカミカは部屋を出て行った。

「行ったか......さて、これからどうするかな」

た。 すやすやと腕の中で眠るミズホを見ながらマサムネはいろいろ考え

「寝てるよな?」

気持ちがよかった。

次回に続く

### 第七壊 熱血とは! 心のつながりとは! さぁ、 戦いだぁ! (後書き)

多くの考えを持つだろう。なに、最後の一行で多くの人が

小説とはそこが楽しい。

# 裏第七壊 真実はいずこに..... **序盤は真実だろう……ね (前書き)**

第七壊の待っていた二人の様子です。

### 真実はいずこに..... 序盤は真実だろう ね

## トキワシティ :ポケモンセンター宿場・集団個室A】

でしょうか!」 「マ、マサムネさんが遅いです.....何かに巻き込まれたんじゃない

起こることじゃないよ」 いや、別にそんなことないと思うけど。そんな怪事件はよくよく

「そ、そうですよね」

ミズホは異常なほどに心配していた。 二人は着替えを終えたが一向に戻ってこないマサムネのことを

いや、大丈夫だと思うよ? で、ですよね!」 彼は弱い人間じゃないしね」

狭い部屋を意味もなく歩き続けていた。 しかしミズホの心配そうな表情は一向に変わらない。

くれたらいいね」 まぁ、 部屋は昼までに出てくれって言われてるし早く帰ってきて

で帰ってこないんですか!?」 昼までにって言うのはマサムネさんも知ってますよね..... な 何

言わなければこの状態にはならなかっただろう。その時カナデは (しまった!) と思った。

いせ、 ふえぇ~きっと恐ろしい人たちに襲われたんですぅ~ ないと思うよ?! 彼強いから! ちゃんとしてるからさ

成長していても年相応。

やはりミズホはもうすぐ1 それを慰めるカナデは年下なのだが。 1歳になるとはいえ子供なのだ..

うわぁぁぁぁぁ 大げさだよ! ん ! 後泣き叫ばないでね!」 マサムネさんが死んじゃ いましゅ

そういいながらカナデはミズホの口を押さえる。

「もが、もぐ、もぐぅ~!」

なんか彼の相棒みたいになっちゃってるね。

「も? もぐもぐぅ~? もぐもうぐぅ~」

言っ た。 『彼の相棒みたいになってるね。 たとたんにミズホは泣き止み目をつぶりながら体を揺らしだし 6 カナデがそう

いになってるね』と言ったとたん.....そうか、 (突然泣き止んだと思ったらなんだいこれ? 僕が『彼の相棒みた なるほどね)

だろう。 つまりは『 マサムネの相棒』 として自分が見られていると思っ たの

そしてミズホは勝手に自分を相棒とした『マサムネとの未来予想図』 を妄想していたのだ。

やれやれだよ。 まったくマサムネさんは幸せ者だね)

< ガラッ ! >

うぉ そんなのとっくの昔にだよ。 おおおお お き 着替え終わった? 遅かったね」

帰ってきたマサムネにカナデは返事をしたすると。

「し、心配し、したん゛ですよ゛ぉ~」

突然ミズホが妄想モー ドの前の状態に戻った。

ないわけ?!) (切り替えが早いよ! 何 ? 彼に妄想しているところ見られたく

いた。 そうカナデが考えていると目の前でマサムネがミズホを抱きしめて

マサムネは気がついていないようだがミズホはにやりと笑っていた。

(そこまで計算しての泣きだったのか!? そうなのか!?)

カナデは少し混乱している。

するとミズホは寝たようにマサムネの腕に収まった。

本当に寝ているのかはわからない。

だよ」 お熱いことで.....さて、 僕はマサラに行くからここでお別れ

邪魔をしちゃいけない空気だと思ったからだ。そう言ってカナデは部屋から出て行こうとした。

え、 あっと! そ、 そうか.....あれ、 ポケモンの紹介は?」

ああ、 君が帰ってくるのが遅くて流れてたからね.....」

そういいながらカナデはポケットからモンスターボールを取り出す。

· でてこい、カミカ」

そしてモンスターボールからポケモンが出てくる。

「チトオ」

「僕の相棒のクチートのカミカさ」

チト」

カミカはその場でくるりと回る。

「ふむ、はじめてみるけど口二つだなぁ」

チト

マサムネはカミカの頭をなでている。

カミカは少しうれしそうだ。

「じゃ。元気でね。また会おう」

ああ、またな」

そう言ってカナデは部屋を後にした。

まったく。 彼は彼で、 彼女は彼女で不思議だったよ」

「チトツ」

ふふつ。 カミカも気に入ったのかい。 そう、 面白いね」

続く

いろいろ考えることができるでしょう。

#### 第八壊 ござるでござる...... いや、 いいよ別に。

【トキワシティ~トキワのもり・入口】

「モグリュ。モーグリュ! モグリュー!「……ガメガ?」「 〜」 〜 」

それを見て不思議そうにするトガミ 楽しそうにご機嫌に歩く二人と そしてそれを横目に戦いで買ったことを自慢し続けるシモン。

「ガ、ガメガ.....」

自分だけのけ者にされているようにトガミは感じた。 何がなんだかわからない....

【トキワのもり】

「少し怖いですね」「さすがは虫ポケモンの宝庫だ。深い森だな」

そう言いながらミズホはマサムネの手を握る。 前回の一軒からなにやら瑞穂は少し積極的になり始めた。

まぁ、 虫ポケモンがいるだけだろう。 動物なんていやしないよ」

絵本の中には犬が描かれていたが。そもそもポケモン世界には動物がいるのか。

この道に沿っていけば出られるらしいし。 このまま進めば」

おや?マサムネ殿ではござらんか」

マサムネがミズホに説明をしていると誰かが話しかけてきた。

「おお、カナブじゃないか」

偶然でござるな。 そちらがお連れの方でござる?」

**゙ああ、ミズホちゃんだよ」** 

う.....ミ、ミズホです。よろしくお願いします」

ミズホは挨拶しているがマサムネの後ろに隠れている。

おや、 どうやらマサムネ殿以外の男は苦手のようでござるなぁ

あの、 ニヤニヤしながらそういう言葉を返さないでもらえるかな」

どうやらミズホがマサムネが好きなことは理解したらしい。

「いやいや、あからさま過ぎるでござるよ」

「ああ、そうだな」

「? なにがあからさまなんですか?」

さらに本人は行動の意味に気がついてないようござるよ」

「......そうなのかね」

?

ミズホが天然なのか考えての行動なのかは本人以外にはわからない。

して、 ニビにそのまま向かう気でござるかな?」

いせ、 だって別に虫ポケモン狙いじゃ ないし」

いやいや、 トキワの森は虫ポケモンだけではござらんよ」

あれ、ここは虫ポケモンの巣窟だと.....」

るでござるよ」 な、何かひどい言われようでござるな。オホン。 ピカチュウがい

あの電気ネズミことピカチュウがいるのかぁ」

それを聞くとマサムネは道沿いを歩いて行った。

あれ? つ、捕まえに行ったりしないでござるか!?」

いや、 俺の興味の対象じゃないっていうかな」

ござる。 「そ、そうなのでござるか.....拙者は少しこの森を探索していくで では、またでござる」

そう言ってマサムネは森の中に入って行った。

「さて、行こうか」

あ、 は.....あれ? マサムネさん。 あれ!」

ん ? おや、あれピカチュウじゃないか!?」

目の前には少し傷ついたピカチュウが倒れている。

.... これって他のトレーナーが捕まえ損ねたやつなのかな」

「多分そうだと思いますけど.....」

「しかし、俺の興味の対象じゃない。 気が付いたら住処に帰るだろ

さぁ行こう」

そう言ってマサムネは道を先に進む。

ポシュ ッ

ん? ボールを投げた音?」

ポゥン

マサムネさぁ ん ! ピカチュウゲットしましたよぉ

ええつ!? ちょっと! なにしてんの!?」

「私はこういうのが好きでして」

「欲望に忠実すぎる.....」

そんなこんなで旅の仲間が増えたのだった

【 ニビシティ …ポケモンセンター 】

......回復してきたの?」

はい。名前はカミコにしました」

· あ、そうなんだ」

(何なんだろう。 ポケモンの名前は神縛りなのかな.....)

「カミコと言うとその子はメスなのか」

「はい。メスらしいですよ。後.....」

「後?」

普通にはないところがあるそうなんですが詳しくは教えてもらえ

ませんでした」

「詳しく教えてもらえなかった? ..... 教えなかったってことは意

味があると思う」

わかりました。追及はしないでおきます」

(気にはなるがな。 しかし聞かない方がいいということかもしれな

突然の出来事にシモンは戸惑っていた。 その後方ではなぜか知らないがトガミとカミコが喧嘩していた。

「モグリュ~!」

これからの旅が不安になるシモンであった。

募集中だって」 あれ、この街のジムリーダー何か今コンビで戦いを挑むトレーナ

めました」 ダブルバトルと言う物ですね。 最近正式ルールとして認められ始

「ええと、 ジムリーダータケシと弟子のコンビと戦うことになるら

りましょう!」 「そうなんですか。 ちょうどよかったです! 私達の力を見せてや

· そうだな!」

(そして勝った勢いで私は告白する!)

早すぎるような気がする。いよいよミズホの暴走が最終段階に入った。

(..... なんかガッツポー ズしてるけど何かなぁ.....)

マサムネはまさか一つ目のジム突破で告白されるなどは予想してい

ない。

「モ、モ、モグリュュウゥゥゥゥ!」「ガ……ガメガ……」

ミズホはあわてて回復をしに行った。 そしてその後、大変なことになっているトガミを見て そして後ろでは惨劇が起きていた。 なにがあったかは知らないまま.....

続く

## 第八壊 ござるでござる......いや、 いいよ別に。 (後書き)

ミズホちゃんはまだまだ子供なんだよってところです。

#### 裹第八壊 させ、 訳ないと.....ドカーンだよ

【真実その?・ トキワのもり】

やって来たでござる~」

ス

トキワのもりにやってきたカナブとカイのしん。

ここで虫ポケモンを捕まえるのでござる!」

ロオス!」

ガサガサ

む ? 早速いたでござる! カイのしん。 きあいだめでござる!」

ロオオオス!」

そしてお主の親から受け継いだ技! ばかぢからでござる!」

ロオオオオス!」

ドシィィィィイン!

草むらめがけて攻撃すると草むらから何かが飛び出し木にぶつかり

カナブの前に出てきた。

チヤアア

ピカチュウでござるか!?」

虫ポケモンだと思っていたでカナブには予想外だった。

虫ポケモンだけいるのではなかったでござるか」

「ロォス....」

もう少し森の中に入ればよかったでござるかな... . おや?」

カナブは森の入口から見知った顔が来るのを見つけた。

「マサムネ殿と……お連れの方でござるかな」

そう言ってカナブはマサムネ達の方へと向かった.....

【真実その?・ニビシティ ポケモンセンター】

「ガメガ。ゼニゼニ」

「モグゥ」

「ガメェ、ガメガメガ」

シモンとトガミは新入りの事を気にしているようだ。

「ゼニ? ゼニガ」

「モグ、モグモグリュ」

そう言ってシモンは少し離れて行った。

「ゼニ? ガメガ.....ゼニ? ゼニゼニガァ」

「ピチュ、ピカチュウ」

「ガメガ……ガメガメガ、ガメガメ」

**'ピカ? ピカチュ、ピピカチュ」** 

っ た。 少し離れていたところから見ていたシモンはなにが何だか分らなか

二人の争いは続いた。それにマサムネ達が気がつくまで。

本編に続く

## 裹第八壊 いや、訳ないと……ドカーンだよ (後書き)

訳は自分で考えてみて下さい。

\_

### 第九壊 謎・ミステリー どっちも同じじゃぁぁぁ

【ニビシティ付近:草むら】

「ポケモン~ポケモン~」

「モグリュ〜 モグリュ〜 」

マサムネ達は新たなる仲間を探すために草むらに来ていた。

『達』と言ってもマサムネとシモンである。

ミズホちゃんは宿場で寝ている。

いる。 今回は二人部屋だ、 絶対に部屋から出ないようにマサムネは伝えて

「ミズホちゃんなら男に襲われても過言ではない」

「モ、モモグ、モモグモグモモ」

なにやら普通に話すと危ない話をしながら二人は草むらを歩く。

「いないんかなぁ..... んだよなぁ」 L١ いやつ。 ポッポとかコラッタとかしかいな

· モグゥ」

そう言ってふたたび歩く。

すると誰かがいた?

おや? 君はここらでは珍しいポケモンを連れているんだね」

ん? 誰だあんたは」

俺か? 俺の名前はガイト。 シンオウ地方の出身なんだぜ」

そう言ってかっこいいポーズをしている少年ガイトを前に覚は少し ひいていた。

```
「ひ、ひどいこと言うなぁ.....」「おいおい、なんだそのひきようは」「おいおい、なんだる」(おいおい、なんがね」
```

ガイトはがっくりとしていた。

```
おや、
                                                       そうなのかぁ。
                                     事故で10歳の時旅に出なくて今まで長引いたのさ」
「同じ理由なんて意外なこともあるもんだ」」
                  俺も10歳の時に事故で行けなくってさ.....」
                                                                           俺も15歳さ」
                                                        めずらしいなぁ」
```

#### 言葉が重なった。

```
なぁ、
                                                  そして親達や世間一般には事故として見られていると」
                                                                                                      hį
必然だったのかもしれないぜ、これが」
                                                                    !
?
                                                                                  何かにさらわれて気が付いたら病院だったんじゃないか?」
                                  そうか、
                                                                                                    事故の事か、
                                                                                                                      その事故って..
                                                                 なぜその事を.....」
                                  なるほどな。
                                                                                                   あんまり他の人には言わないんだが.....」
                                  ここで君と出会ったのも偶然かな?
```

.. そうか。

まぁいいさ、

考えても仕方がない」

## そう言ってガイトは手を横にし、 やれやれとポーズをとった。

「モグリュー」 そうだな、 そんなことよりも、ここにはポッポやらしかいない なにか珍しいポケモンでもいないかと探してるんだが」 のかねえ

オール!」

パートナー達が返ってきた。 二人が話していると二人が話してる間に草むらを探索していた

「お、ガオイン。何か見つけたのか?」

「シモンも何か見つけたのか?」

「あ、そいつの名前はシモンって言うのか」

· そのリオルの名前はガオインっていうのか」

「モグモグ」

゙リオルゥ」

どうやら二匹とも同じ方向にマサムネ達を連れていきたいらしい。

「わぁったから引っ張るなよ」

「いったい何があるんだ?」

そう言って二人は二匹が向かう場所へ行く。

するとそこには.....

「なぁ、ガイト。こいつら.....」

ああ、 怪我をしているようだが...... どちらもカントーでは珍しい」

そこには傷ついたチュリネとコリンクだった。

この近くに持ち主らしき人影はなかったのか?」

**゙リオル~」** 

「足跡とか人がいた痕跡は?」

「モグリュ~」

不思議な話だ。

こんな所でこの二匹がいるわけがない。

「 なんでここにいるのか.....」

「まぁ、それは謎と言うことだろう」

「何やら因縁めいたものを感じるがな」

「そうか? 俺たちに関係する.....か?」

「わかんない。なんとなくさ」

なんとなくか......関係なくともこういうときは言いたくなるよな」

そう言ってガイトはコリンクを抱きかかえた。

そしてマサムネはチュリネを抱きかかえた。

「で、どうする。 ポケモンセンター は持ち主不明のポケモンは回復

してくれないぜ」

「厄介なシステムだよなぁ。 盗犯などを防ぐためとはいえよ」

そう言ってガイトはモンスターボールを取り出す。

- 「捕まえるのか?」
- 「持ち主がいないようだしな」
- 「自然に回復して住処に戻るかもしれないぞ」
- 「ここらにこいつらの住処があると思うか?」
- それも.....そうだがな。 なら......」

そう言ってマサムネもモンスターボールを取り出す。

「さぁな。さて.....」 「そうだな..... でも捕まえないとかわいそうな気もしてくるんだが」 ん、そうか.....そうだな。 何かこれでこいつらの自由を奪うようで嫌だなぁ なんでだろう」

マサムネもそれに続く。そう言ってガイトはボールを投げる。

「チュリネか.....」

新たな仲間を手に入れたマサムネ達はポケモンセンターに向かう。 その心はうれしさではなく、疑問など負の感情が多くを占めていた

【ニビシティ・ポケモンセンター】

すると二人の女の子が小走りで近寄って来た。マサムネ達はポケモンセンターの中に入った。

「ガイトぉおぉおぉ!」「マサムネさぁぁぁん」

二人同時のフライアタック-

「ぐおぼふぁ!」

「ぎゃふうぉ!」

こうかはばつぐんだ!

い、いきなり突撃はやめろと言っただろ。 ユウミ」

「ミズホちゃん。 なんか息が苦しいですよ.....ですよぉ~」

。 ってあれ?」

「なんか同じような状況だな」

マサムネとガイトは上にいる女の子をどけて立ち上がる。

「そちらもお連れの女の子と二人旅?」

「そう言うお前もそうだったのか」

`あれれ、マサムネさんそちらの方は?」

「ガイト~その人誰なの~」

俺はマサムネ。このミズホちゃ んと一緒に旅をしている

そして俺はガイト。 従兄妹であるユウミと一緒に旅していると言

うわけだ」

「なんか似てるな」

「微妙に違うがな」

「似ているところと言うと?」

「体型とかだろ?」

「「ふふつ」」

「なに笑っているんです?」

「そうだよ~」

不敵に笑う男組。

それを見て不思議に思う女組。

「って、こんなことやってる場合じゃない」

「そうだったな。回復に行こう」

そう言って回復コーナーに二人は早歩きで向かった。

「ガイト〜おいてかないで〜」「あ、待って下さいよぉ〜」

次回に続く

# 謎・ミステリー どっちも同じじゃぁぁぁぁ! (後書き)

過去っていうのは戻れないものです。

小学生・中学生・高校生などが青春と言われる時期です。 つまりは青春を楽しめる時期こそが子供なのです。

つまり自分は青春を楽しめてなかったということなのですよ~

【ニビシティ:ポケモンセンター 宿場・個室B】

と言うことがあってだな.....」

「そうなんだぁ」

「そうなんですかぁ~

待っていた女子組は簡単に納得したようだ。

しかし二人用の部屋に四人は少しきついな.....」

ようで 初めは二人で泊まる予定だったのだが、 何やら人数が切羽詰まった

この部屋に四人で泊まることになってしまったのだ。

あの二匹は明日には怪我が完全に治ると言うことだ」

そうか、それは良かったな」

マサムネの表情が穏やかになる。

しかし謎は謎のままか

まぁ、 深く考えることはない。 無事ならそれで終わりだ」

そう言ってマサムネは話を終わらせる。

そういや二人はジム挑戦の旅をしてるんだよな?」

ガイトが問いかけてくる。

ンで倒したぜ」 ああ、 今日にニビのジムリーダーと弟子を二人のコンビネーショ

「なんだと!」

マサムネはガイトの肩を持ち揺さぶる。

お、おうつ! いや、何だとって言われても.....」

......いや、それもそうだ。しかしいつの間に?」

何時の間にと言われてもなぁ。君に会う前かなぁ

草むらにいたのは戦力の捕獲じゃなかったのか」

マサムネはガイトの方から手を引き

腕を組みながらそう言う。

「あれは経験を積ませて強くしてただけだよ」

「レベル上げってか」

「ああ、 明日にコリンクの怪我が治ったらハナダに行こうと思って

いる

「そうか。 何かあってすぐに別れることになるとは」

「なに、俺達はライバルみたいなものなんだぜ」

サムズアップしながらそう言うガイト。

(何でもかんでもかっこつけて.....)

「ガイト、かっこいい!」

「な、なんだよいきなり.....

· べっつにぃ」

# 突然ユウミがガイトに抱きつく。

「 なに見せつけてるんですか.....」

「ミ、ミズホちゃん? なんか声に怒りが込められてるようなので

思ってるのミズホちゃんだけになるよ!) (いや、なんだ。そう言う感じだとパレパレだよ..... バレてないと

なんでそんなに怒ってるのミズホ?」

のほほんとユウミがミズホに問いかけている。

「空気を読むんだユウミ」

? 何だかわからないけど空気読む~」

イトはすごいわ.....) (天然と言うのかこれは.....俺はこのノリにはついていけん.....ガ

する予定だからさ」 「ま、まぁ、とにかくだ。今日は寝ようぜ。 明日の朝一に俺は出発

「そうか、そうだな。とりあえず俺とガイトは寝袋で床に.....」 やだぁ~僕はガイトと寝るんだぁ~!」

( ぼ 僕つ娘!? ってそこじゃねぇ! 緒に寝るだとお!?)

しかし驚いているのはマサムネだけだ。ユウミの衝撃発言に驚くマサムネ。

(これは... ... ユウミとガイトさんが一緒に寝れば私もマサムネさん

ر!)

(またか.....やはりユウミも子供だな.....)

ミズホはいろいろ企み、ガイトはいつものことと呆れていた。

「わあったよ。一緒に寝てやるよ」

っかい

. ! ?

そう言って、ガイトとユウミはシングルベットに二人で入った。

..... なにこれ。俺の考え方がおかしいのか?」

さぁ、マサムネさん。寝ましょう」

ミズホがマサムネの肩に手を置きベットに引き込む。

え? いや、その.....し、 シングルベットですよ?」

なにを言っていますか? 隣の二人も同じじゃないですかぁ」

「あ、うん」

「えへへ。初めての二人で夜に一緒に寝るってやつですねぇ」

なに?
そ、そう言う言葉はどこで覚えるの!?」

「え、この野球ゲームでですよ」

ミズホちゃんは某全年齢野球バラエティゲー マサムネに見せていた。 ムを荷物から取り出し

この全年齢対象ギャ ルゲー めがあああああ

うるさ~い」

ごめんなさい」

マサムネが叫ぶとユウミに怒られた。

そして気がつくとマサムネはペットのすぐ横まで引きずられていた。

「さぁ、寝ましょう!」

「さよなら、俺の春にできる花の実.....」

よし、バネ持ってこい

セット.....ヴァル.....エンチン.....

「はっ! 朝か.....はむにゅう!」

前回の死の楽園再び!

(うおぉぉおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ;)

「ふへへ~マサムネさぁ~ん.....」

しかし今度は少し違った。

顔ではなく背中に押し付けられているのだ。

これは死の楽園なのだろうか.....

いや、ただの天国である

( ) おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

マサムネは天国を楽しんでいた。

すると、隣のベットからガイトが出てきた。

んどけよ」 「ふぁ~朝か……ん? おやおや。まぁ始めはなれんわな.....楽し

そう言ってガイは部屋の洗面所に向かった。

「うるさい!」「ガ、ガイトぉおぉおぉおぉ!」

ブンッ!

「プゲラッ!」

そこでマサムネの意識は途切れる。隣のベットから枕が飛んできた。

俊半に続く

明日は14日か。

義理はもらえるのは確定してるんだけどな。

本命など見たことない。

102

前半のあまり的なもので短いです。

# 第十壊 - 2 攻守逆転劇は知らずのうちに起きていたのよ!

· ..... さん.. ムネさん」

(ん、あ.....ん.....な、何だ.....)

「……ムネさん。マサムネさん!」

うおわっ!?」

ポフン

「マサムネさん。 味わいたいなら言ってくれればいいじゃないです

「ふぃ、ふぃひまふー!」

ミズホの前回と反応が違いすぎる。

前回のカナデの言葉により何かが変わったようである。

俺らがいなくなってからにしな」 「朝から何やってんだ? とりあえず着替えろよ。 イチャイチャは

そう言ってガイトは荷物を持ちユウミとともに部屋を出て行った。

「あらら。いろいろ見られてしまいましたね」

「なんかいろいろ誤解が生まれつつある」

その後マサムネは力押しでミズホを部屋の外に出した。 その時ミズホはいろいろ言っていたが何もなかったことにした。

## 【ポケモンセンター前】

「チュリ」

元気になったようでマサムネにすりよっている。 マサムネの肩の上にいるのは昨日のチュリネだ。

リン!」

コリンクもガイトの足元で元気に声をあげている。

「行くんだな」

ああ、早くハナダに行きたいんでな」

またな、ポケモンリーグで戦おうぜ」

、ま、それまでにまた会うかもしれねぇけどな」

かもな」

「男の友情ってやつだね」

「ゆ~じょ~

ミズホとユウミはそれを離れた所からじっと見ていた。

「てなわけで。またな」

「ああ、またな!」

そう言ってガイトとユウミはおつきみやまへと向かって行った。

行ったか.....」

「行きましたね」

所でなんで俺達は手をつないでるのかな」

「気にしなくていいんじゃないですかね」

「そう....」

と恥じらいを持った子だった!) (攻守が逆転してる気がする.....何時から逆になった! 昔はもっ

何が起こるか分からない。

それが人生である。

次回に続く

# **暴第十壊 別れた後に何があったのか**

(トキワのもり)

「う~む。キャタピーやビードルばかりでござるよ.....」

カナブはむしポケモン捕獲のためにトキワのもりを捜索していた。

アーには興味ないでござるよ」 「まったく。拙者むしとりしょうねんでござるがバタフリーやスピ

ポケモンが好きなわけじゃない。 カナブはむしとりしょうねんの家系に生まれるがめちゃくちゃむし

なぁ~」 「何かもっとこう.....かっこいいという感じのポケモンがでござる

ブンっ

「カイロッ!?」

「ござっ!?」

カナブ達は突然何かに襲われた。

「な、何なのでござる!?」

「ストラア〜」

ストライクでござるか!? な なんと! ゕੑ かっくいい

・でござる」

人を襲ってくる時点で凶暴なのはわかる。そこにはストライクがいた。

「ストラァ!」「もえるでござるぅぅうぅぅぅぅぅ!」

叫ぶカナブにしんくうはが飛んでくる。

「ロォッス!」

それをカイのしんが止める。

「ロオオオオス!」「カイのしん!」

カイのしんの気合がたまっていく!

「口オオオオオス!」

ストライク目指し突撃するカイのしん。

「ストラアアアア!」

突撃、そして衝突する二匹。

「ストラアア!」

相打ちになる.....だが。

ロオオオス!」

弱りながらもカイのしんはストライクをつかむ。

「ラアアイク!?」

「口オオオオオ!」

そのままストライクを押し、 そのまま木を駆け上がる。

そしてっ!

**゙**ロオオオオオオス!」

急速に下に落下する。

ラアアアアアアイック!」

高空からの落下攻撃.....

カイのしんの俊敏さとカイロスと言うポケモン自体が持つ力を使った カイのしんオリジナルの攻撃とも言えるだろう。

駆け上がるものがなければできないが。

「口オオオオス!」

や、やったでござるよ。カイのしん!」

そう言ってモンスターボールを投げるカナブ。

ボールは揺れる、揺れる、揺れる.....

そして.....

「カァァァァァイ!」「や、やったでござるよカイのしん!」

抱き合うカナブとカイのしん。

「あ、す、少し痛いでござる.....」

顔に角が当たった

本編に続く

初期は技が少なくて困る.....

#### 【ニビシティ・ニビジム】

「と言うわけで、ダブルバトルをしに来ました」

はい。 今現在は二人一組のダブルバトルしか受け付けておりませ

h

「いや、だからですね」

「はい。お申込みですね」

うことになった。 何かおかしいような気もするが受付を済ませ1時間後にバトルと言

念のために言うが受付は決まりなので今ダブルバトルしか募集して いないと言ったのである。

と言うわけで、ミズホちゃん。 戦いの準備.....はできてるね。

「ならあっちの茂みの駆け出にゃんにゃん.....」

「セタアアアアアアプ!」

「X!? じゃなくてなんです?」

゙そう言うのはやめようね.....」

大丈夫ですよ。 パ ケに比べたらまだまだですよ」

......そこのベンチでこれからについて話し合おうか」

「え、もう未来設計図を?」

...... J

そしてマサムネ達はベンチに座って無言のまま時間が過ぎて行った。

### 【 ニビジム:バトルフィー ルド】

マサムネ達は準備ができたようなのでバトルフィー れられた。 ルドに呼ばれ連

(岩でできたフィー ルドか.....下は地面なのか.....)

下は地面である。

シモンなら潜ることもできるだろう。

そして岩のオブジェ。

これもうまく使えば戦いを有利に進められるだろう。

「お前達が今日の挑戦者だな」

「へっへへ、タケシさん。今日こそ俺の本気を見せてやりますよ!」

「何時もお前は言葉だけだぞ、トシカズ」

「うっ! もう油断しませんぜ。さぁ挑戦者ども! お前達がタケ

シさんや俺に戦いを挑むのは一億光年早いってことを思い知らさせ

てやるぜ!」

· それは距離だ.....」

何やら前で漫才をしているのがジムリー と弟子のようだ。

「あ~っと、準備OKでいいのか?」

「ああ、準備はできている」

「へっへへ、お前らなんか役不足だぜ!」

「それを言うなら役者不足だ.....」

( なんだこの漫才は.....調子が抜ける.....)

#### そして戦いは始まる。

「男の生きざま見せてやれ! シモン!」「よし、行ってきてトガミ!」

ガメェ!」

゙モグゥ!」

シモンとトガミがバトルフィールドに出る。

「行って来い! イワーク!」

「 行くぜ挑戦者! サンド!」

「イワアアアアク!」

「サァン!」

イワークとサンドが出てくる。

(.....強そうだな。まァ戦わんと実際わからんがな。これがな)

っでは、 それぞれポケモンは各自一体ずつの2対2のバトルとしま

審判がそう言うと全員がうなずく。

では、始め!」

そして戦いが始まる。

ワァァァク!」 イワーク! がんせきふうじ!」

空中から岩石が落下してくる。

なっ! よけてトガミ!」 イワークがこんな技を覚えてるとは! よけろシモン!」

二匹は上から落ちてくる岩をよけ.....

「よけてもそれで終わりゃせんぜぇ!」

「サアン!」

落ちてくる岩の上からサンドが奇襲をしかける!

「落下傘こうそくスピン+岩石つぶて!」

「ガ、ガメガッ! ガメェー!」

その攻撃はトガミに当たる。

゙ああっ! トガミ!」

そしてすべての岩石は落下し障害物となる。

「ガメェ.....」

「モーグリュ!」

シモンは攻撃をうまくよけるがトガミはサンドの攻撃を食らってし

これは、 弱点である水のトガミを狙ってきているのか.....」

(まぁ、どちらも同じだがな.....)

モグリュ!」 ならばサンドをこちらも狙わせてもらう。シモン!」 へへへっ! このままのテンポで行くぜ!」

そう言ってさっき落ちてきた岩石の上をシモンがはねる。

「サ、サァン!?」

シモンがサンドの周りを駆け巡りサンドをかく乱する。

いだろ。モグリューを狙え!」 「ちょこまかと......ふん。さっきの攻撃でゼニガメもあまり動けな

サンドはモグリューを追いかけ攻撃しようとする。

「ふっ。今だぜ!」

「 は い!

「ガメガアアア!」

こうそくスピンしながらサンドに接近するトガミ。

「ワァァァク!」「しかしあまい」

ドスーン!

ゼニガメ、戦闘不能!」ガメェ!」

サンドに接近していたトガミはイワークに落とされる。 そして、審判の言葉が響く。

· おおっ。さすがはタケシさんだ」

「ゼニガメの事を無視するからこうなる」

その通りだ」

· なに?」

「お前ら今のでシモンの存在を一瞬忘れたな」

きっていた。 そう、その時すでに一番大きな岩のオブジェをシモンは駆け上がり

イイイイイン!」 「行くぞシモン! 超落下メタルクロオオオオオオオこうそくスピ

「 モォ モモモモモモモモオオモオオオオオオオオオオオオオオ

この攻撃はよけることは難しいだろう。高速に回転しながらのメタルクロー。

「イワーク!」「ワアアアアアアアアアアアアアリ」「グゥウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥリュウ!」

イワークは倒れる。

イワーク、戦闘不能!」

審判の声が再び響く。

そんな.....タケシさんが.....はっ! モグリュー はどこだ!

まさかまた上にと上を探すサンド。

「残念!」下だぜえ!」

サンドの真下からシモンが出てくる!

「サァァァンド!」「みだれひっかきぃ!」

そして近くに会って岩盤の上にシモンは行く。サンドはよろめく。

「リュゥゥウゥゥゥゥゥウウゥゥゥゥゥ!」「よし、落下こうそくスピィィィイン!」

そしてその攻撃がサンドにクリティカルヒット!

サンド、 サアアアン~」 戦闘不能! 勝者、 挑戦者チーム!」

### そして、戦いは終わった.....

てないとつらいものだな」 「昨日といい、今日といい。 やはりダブルバトルは相方と息があっ

「そ、そりゃないっスよ、タケシさぁぁぁん」

......とにかくだ、このメダルを受け取ってくれ」

そう言って猛はメダルを二つ差し出す。

「よぉぉおおぉぉぉし! モオオオオオオオグリュ!」 グレーバッチゲェェェェット!」

「ガメ?」

そしてマサムネ達はポケモンセンターに向かうことにした。

タケシなどはダブルバトルにあまりなれていません。

このごろルールになったばかりです。

試験的にテストとしてやっている期間なだけです。

# 第十二壊(そう!)基準があればいいのだっ!

## 【ニビシティ:ポケモンセンター】

「モーグリュ」

「ガメガ.....」

「モ、モグモーグ!」

. モグモーグ!」

さぁこんな男の友情は置いておき、その頃マサムネとミズホは.....

今日は勝ててよかったですよね。 マサムネさん」

ああ、なんかトガミを囮に使ってしまったがな..

「ふふつ。 トガミは大丈夫ですよ。 強いですから」

なおトガミはあの一件でだいぶ落ち込んでいる。

それにより上のシモンの慰めである。

いえ女子トイレなんですけど.....」 「にしても、何なんだ。なんでこんな所に.....ここ人気はないとは

無理矢理にミズホに連れてこられたのである。

マサムネはいやがる暇もなく連れ込まれた....

いや、ついてこないと叫ぶと脅されたが.....

それはですね。 コホン。 . 私はマサムネさんが好きです」

「え?」

「世界で一番愛している自信があります」

何が何だかわからない。マサムネは固まった。

「は? 今何て言ったさ?」

です!」 「私は世界で一番マサムネさんを愛している自信があると言ったん

突然であった.....

マサムネの予想を超えていた....

順序を踏んでからこちらから告白しようとしていたら

むこうから告白されてしまったのだ.....

たかったと言うに.....) (前々からおかしいところはあったぞ..... 恋人以前の関係を楽しみ

マサムネはあえてミズホの好意を無視していたがもう無視できるも のではない。

さぁ、 OKと言ってください! 言わなければ叫びます」

る もう十分大きな声を出しているのだが、 叫び声などあげられても困

ほ ふっ。 本当ですね! わかったよ。 よっ お前の彼氏になっ しゃ ではさっそく.....」 てやるよ」

「ホワィ!?なに?早速ってなに!?」

「くくく、ワポーでえた知識ですよ!」

CERO:Aのくせしてええええええええぇ!」

その後運よくトイレには誰も来なかったそうな.....

#### 【次の日】

...... てな訳でだ。 おつきみやまに行こう」

「行きましょう」

のたのたと言う歩き方で二人はおつきみやまへ向かおうとした。

「おおっ! マサムネ殿~!」

· む? カナブか?」

「おや、君達。お久しぶり」

· カナデさん!」

入口近くで懐かしい? 二人と再会した。

「お前ら二人で旅してるのか?」

「いやはや、偶然知り合ったでござるよ」

「彼も君達を知っていると言うしね」

マサムネ殿はその様子だとジムは攻略したのでござるな」

「ああ、このとうりな」

· さすがだね」

うむ。さすが」

### マサムネの事をたたえる二人。

「お前らはまだジムは攻略してないのか?」

「トキワのジムは営業休止中でござるし.....」

僕もレベルを上げていたくらいだしね」

今はダブルバトルしか受け付けてねぇぞ」

それを聞くと顔を見合わせる二人。

となると。僕と君で行くしかないね」

うむ。 初めてでござるがよろしくするでござるよ」

二人は握手している。

二人は性別が違うはずなのに顔つきが似ている..

美形である。

「ふむ。お前らならいけるような気がするぞ」

· おおっ! でござる」

では今日は泊まって、明日に挑もう」

ござる。では、マサムネ殿またいつかでござる」

短い再会だけど..... またね」

そう言って二人はポケモンセンターに入って行った。

......さて、行くか」

「はい」

テンションが朝からずっとマックスである。ミズホは二人の会話を聞いていたのだろうか。

「ああ、わかんねぇよな.....わかんだけど.....」「モグリュ?」

かなりきわどい話である.....

続 く

付け足し

## 第十二壊・補足 これが真実だ!

#### 【個室でのその後】

CERO:Aのくせしてええええええええぇ!」

マサムネの言葉が女子トイレに響く.....

そしてマサムネは覚悟する.....

そして目をつむる.....

「あれ?」

何もおきない。

そしてマサムネは目を開ける。

.....え~と.....この先はどうすればいいんですかね?」

「ほへ?」

ミズホの発言にマサムネは気を抜かれる。

「いやぁ、さすがにこの先はないんですよねぇ」

CERO.....

そう、パワ いくらサイボーグが出たり殺人が起きても、 ポケットもその壁は乗り越えられなかったのだ。 裏でああいう描写があ

っても

のだ 夢の国のねずみに似た生物が出てきても、 越えられない壁があった

CERO:Aであるためには....

「よし、出よう。今すぐこの個室から」

「え? しかしまだ私達は一つに.....」

「年を考えよう。そしてCERO:Aで行こう」

そう。 プロクン 基準で....

てなわけでだ。 この先は結婚するまでお預けだぜ」

むー。なぜです。恋人ならすぐにするものだと.....」

いいの! 君は10歳なのね! だから駄目なの!」

^ チッ < わかりました。マサムネさんの言うことに従います」

「ねぇ、いました打ちした? したよね?」

い え。 じゃあ今日はもう寝ましょう。 いっしょに..

そ、そこは譲らないのね.....

#### 【カナブとカナデ】

いやぁ、マサムネ殿は相変わらずでござったなぁ

そんなに長い間いたわけでもないんだろ? なぜそこまでいえる

んだい?」

いるようにしゃ べるでござる」 「それはカナデ殿も同じでござるよ。 マサムネ殿たちをよく知って

### そういいあい二人は笑う。

ござるか」 あの二人は興味の対象さ。 面白いと言うものだよ」

そう言って納得しあう二人。

「あ、おー いカナデ~」

「おや?」

'誰でござるか?」

人の男性がカナデのほうに歩いてくる。

カナデ。ニビに帰ってたなら家に帰ってこいよ」

「僕は旅を終えるまで帰らないと言っただろう」

しかしだな......ん? 隣の子は?」

^ ? ええと、拙者はカナブと言うものでござる」

「へえ。 俺はカナデの兄のエンソだ。カナデをよろしく頼むよ。 今

まで男の子がよってきさえしなかったんだ」

「 は ? いやまぁ、これからも仲良くはしていくでござる」

カナブは困ったように言葉を返す。

なにやらエンソの言うことが理解できていないようだ。

ょ 「何を言っているのかこの愚兄は。 君も別にあわせなくていいんだ

そういいながらカナデはエンソの腰あたりをける。

いったぁ な なにするんだよ。 俺は妹思いのいい兄なんだぞ

.

「騒ぐな恥ずかしい」

そう言ってけり続けるカナデ。

「やめって、やめてって! それもそれで恥ずかしいだろ」

「愚兄がひどい言葉を言うよりは気持ちがいい」

「それ愚兄だけ心が傷つくよ!?」

続く兄妹げんか。

カナブはそれを見ているしかない。

「せ、拙者この状況が理解できないでござる.....」

本編に続く

第十二壊でみんなが考えた幻想をぶっ潰してしまったか。

### おっちゃん.....いや、 親父さん

【おつきみやま前:ポケモンセンター】

ですね、 何であんなにトレーナーが.....」

別に誰も進化などしなかったが、 チュリネことサユキとカミコのレベル上げとしてはいいものだった。 ここに来るまで行くとど泣くトレーナーと戦った。 戦いの経験がなかった

そうしましょうか」 しかし疲れたな......ここで一泊して明日にハナダに向かおう」

そう言ってマサムネたちはポケモンセンターに入った。

「ぼっちゃん。コイキングいらないかい?」

「コイキング? ああ、あのか」

「 500円なんだが.....」

まぁ、物によるな。 普通のコイキングならそこらでも見つかる」

話のわかる人ぼっちゃんだ。今まではコイキングと聞くと誰も買

ってくれねぇ」

「そうだな。最弱とされているわけだしな.....」

**゙ああ、で、こいつだ」** 

そう言って男はコイキングを出す。

金色のコイキングだと.....」

ああ、 水につけてもこすっても落ちない。 本物だよ」

色違いポケモンか.....」

ああ、 どうだい? 水などに付けで本物か試すか?」

「いや、買う」

「.....ぼっちゃん。金はいらねぇ。もって行け」

しかし」

いいんだよ。 信じてくれたしな.....それにたった500円だ。 気

にするな」

「おっちゃん.....」

そう言ってコイキングをボールにもどしおっちゃんは差し出す。 して受け取る。 そ

「てか、何やってるんですかマサムネさん?」

突っ込むなよ、ミズホちゃん.....」

そうしてマサムネは色違いのコイキングを手に入れた。

【次の日~】

「さぁ、行くぞシャドウ!」

「コッココココ!」

なんかダメな気がした。コイキングは跳ねる。

「無論。だってとびはねるを使っているからな」 「マサムネさん。そのこ大丈夫なんですか?」

何やら普通ではない。地面から少し浮いている。

「いいんですかねぇ.....」「さぁ、行くぞ」

そしてマサムネ達はおつきみやまへと向かう。

後半に続く

# 第十三壊・2 ホップステップ.....ああっ!

#### 【おつきみやま】

「暗いな.....」

. でも完璧に見えないってわけでもないですよ」

おつきみやまに入り、辺りを見回す二人。

「ピカ.....」

コッココココココ」

チュゥ.....」

カミコはシャドウから少し離れていた。

「とりあえずハナダの方向に向かうかな」

はい

そう言ってマサムネ達はハナダの方角へと進んだ。

[???]

本当にここにあるのか?」

間違いないさ。この文献にはそう書いてある」

男二人が二人いた。

その男達は奇妙な格好であった。

「あるんだ、あのポケモンの化石がな.....」

「カントーであるここにか? しかしあれは」

ふふふ..... ここにあるとあるのだからあるのだ」

お前は……われらの目的。忘れておらぬだろうな」

くっくくく。 わかっているよ.....くっくくくく」

お前は化石のことになると.....」

そして男はさくさくと発掘作業に戻った。

シャドウ! 回転しながら落ちて来い!」

「ロッコココココ」

「う、うわぁぁぁぁああぁぁぁ!

と戦い勝利を重ねていた。 マサムネはシャドウで近くにいたガー ルズスカウトやたんぱんこぞう

「うっし。なかなかいい感じだぞシャドウ」

. ロッコココロコ」

シャドウは喜んでいるのかはねる。

「ピカチュ.....」

カミコにはなぜあのシャドウがココまで強いのか理解できないらし

コッコココ.....」

ベタン!

「シャ、シャドウ! どうした!?」

PP切れです。

「ここまでよく持ったもんだ......休んでてくれ」

そう言ってシャドウをボールに戻す。

「よし、代わりに出でこいシモン!」

ボンッ

「モグリュ!」

シモンが元気よく飛び出てくる。

「ピカ」「モグリュ?」

うだ。 どうやらトガミではなくカミコが出てきていることに少し驚いたよ

ಠ್ಠ いつも自分が出ているときはミズホはトガミを出していたからであ

「ピグ」

カミコにシモンはそっぽを向かれた。

「モグ」 「ピカピ!? ピ! ピカピカ.....」 「リュリュリュ~」

どうやら何かをきっかけ気仲良くなったようだ。

「はーい!」「よし、なんかいい感じになったので出発!」

そう言ってマサムネー行は先へと出発した。

続く

PPの概念はゲームと違います

### 裹第十三壊 だからお前はわからずやなんだよ byシモン (前書き)

少し時間が戻ります。

後感想を何回も見ながらニヤニヤしてます。

### 【某日:ポケモンセンター】

「ガメガメガ」

トガミとシモンが話をしているようだ。

「ガメガ、ガメガニガメガガメガ」

「モ、グリュリュモ」

「ガメ……」

「グリュ! グググリュ!」

「ガメガァ!?」

シモンに殴り飛ばされるトガミ。

「ガ、ガメガ?」

「ヹヾヹニ

「ゼ、ゼニ.....」

「ガ、ガメガメ゛「モ~グリュ」

「ガ、ガメガメガ!?」

「モグリュ〜」

「ゼ、ゼニィ! ガメガメガー!」

そう言ってシモンはその場を去った。

「ゼ、ゼニ.....」

#### 【同日:同所】

「チュリ」

「チュリ」

「ピ〜」

「チュリ」

゙......ピカチュ」

「そうですか? 「あれ、なんか会話してるようで成立してなくないか?」 私にはわかりません」

二人の会話を見てマサムネはそう述べた。

ר חשחחחחם,

そして後ろではシャドウがとびはねていた。

#### 本編に続く

### 裹第十三壊 だからお前はわからずやなんだよ byシモン (後書き)

訳がほしいですか?

読もうと思えば読めますよ。

# 第十四壊 私達は夫婦ですよね (前書き)

今回からタイトル担当ミズホちゃんに変更

そして執拗に同じ感想を見てにやける自分こそ作者さん。

### **第十四壊 私達は夫婦ですよね**

#### 【おつきみやま】

「チュチュチュ」「ググググ」

シモンの言葉をうんうん頷きながらカミコは聞いている。

「何を話してるんだか.....」

「なら、紙とペンでも渡してみればどうです?」

書かせるってか。あの手で書けるんかね」

紙とペンを与えてみようと思った。そう言ってマサムネはハナダに着いたら

???

「これを見てみろ! この化石を!」

「こ、これは! 確かにだな.....」

「ああ、この化石を持ち帰るぞ」

だがそれを見つけるまでに見つかったそれらの化石はどうする」

ああ、 たしかに珍しくも強力でもないし目的対象ではない」

「ならば捨てておこう」

うむ。 では帰るとしようか。 目的が終了した場所にとどまる必要

#### はない」

そう言って男達はその場を去って行った。

· モモググモモグー」 · しあっわせわぁー」

「だーから毎日ー」

「モモモグモー」

楽しそうに歌いながら先へと進むマサムネとシモン。 そしてそれを見ながらついていくミズホとカミコ。

いいなぁ、シモン。うらやましいなぁ」

....

いた マサムネとシモンを見てミズホは息が合う二人をうらやましがって

そしてカミコはなにやら考え事をしているようだった。

「グモモ~モフッ!」

シモンは何かにつまづきこけた。

「大丈夫かシモン?」

「グ、グモモ.....モ?」

シモンは何か埋まっているものを見つけた。

· グリリュ~」 どうした?」

すると突然シモンはその部分を掘り始めた。

· なんだ、どうした」

「モグリュ」

何かを掘り当てたようで、その堀上げたものをマサムネに差し出す。

「何だこれ? 化石か?」

· そうみたいですね」

そしてマサムネは化石をかばんの中に入れた。

「よく見つけたな」

「モグリュ

マサムネはシモンをなでながらほめる。

あれ、 こっちには何か発掘した跡がありますよ?」

何?」

ミズホがいる方向に向かうと確かに発掘した跡がある.....そして

「あれ、化石がいくつか落ちてますよ?!」

「おいおい。何だこの宝の山は.....」

いろいろな化石が落ちている。

## 売ればそれなりにはなりそうだ。

「これだけあれば結婚資金には困りません!」

「何を言ってるんだお前は」

お前とは。いきなりどうしたんですか」

「ミズホちゃん。 俺は呆れて君の名前も呼ぶことができなかっ たよ」

嫌いにならないでください! 付き合い始めて数日ですよ?

\_!

ミズホはなきながらぴょんぴょんと飛ぶ。

マサムネは眼福である。

「いや、別れないから。絶対に」

「ほ、本当です?」

「本当さ」

はい! では早速化石の回収を.....

「って、おい」

そう言いながらも結局ミズホとともに化石を回収した..

## 【おつきみやま ハナダ側出入り口】

「重いな.....これは」

考えてみればそうですね。どうしてココまで楽に持ってこられた

んでしょう」

「ははっ。愛の力で持ってこれてたりしてな」

....<u>\_</u>

(あれ、これもしかして.....)

愛の力ですか! やっぱりこうなるのか」 すばらしいです! その通りです!」

ミズホは暴走し今にも走り出しそうな雰囲気だ。 マサムネはやはりなという顔で呆れていた。

「よし! ほえ? ぼ ハナダシティまで超速ダッシュです!」 ほへええええ!」

マサムネは化石を落とさないようにするだけで精一杯だった。 マサムネはミズホに手をつかまれ連れて行かれる形となっ た。

### 【ハナダシティ:古物屋】

. これ全部でこれだけで引き取るよ」

「わぉ これなら将来安泰ですよ!」

「ここままで貴重な品か? 店主」

ているが、これほどのものはよく見ないよ」 ああ、 この店もカントーで一二を争うほどの大きな店だと自負し

その大金はミズホにより『夫婦のお金』という事で そんなこんなだ大金を獲得したマサムネとミズホ。 マサムネの将来は決められてしまったようだ。 マサムネの銀行口座に振り込まれた。

俺の未来はどうなるのかね....

「幸せですよ。幸せ」

「まぁ、不幸ではないだろうがね」

そう言って二人はポケモンセンターに向かった。

#### 【ポケモンセンター】

「おや? ガイトじゃないか」

**おっ! マサムネか」** 

マサムネはガイトを見つけはなしかけた。

「どうだよ調子は」

「ふっ。聞いて驚くなよ。もうすでにジムは攻略した!」

「また先越しか」

というか旅を始めた時期がってやつだな、これは」

かっこつけたポーズをとるガイト。

`そして俺達は今から次の街に行く」

なんだと!」

「じゃあな。俺が一足お先にジム制覇するぜ」

'いつか追い抜いてやんよ!」

そう言うと、ガイトは笑いながらポケモンセンターを後にした。

ガイトはやっぱライバルといえる存在だぜ」

・ユウミも私のライバルです」

続く

# 第十四壊 私達は夫婦ですよね (後書き)

どう思われますかみなさんは? これポケモンリーグはアニメとゲームのどっちのようにするか.....

## **弟十四壊 捕捉 これはこれは!**

#### 【ポケモンセンター】

「モグリュ!」

「何を怒ってるんだシモン」

· モグリュ!」

゙お、そうだ、紙とペンを買ったんだ。ほれ」

そう言ってマサムネはシモンに紙とペンを渡す。

「グリュ!」

受け取るとあの手で器用に紙に文字を書いていくシモン。

「モーグリュ!」

何々? 『何で俺が掘った化石を売ったんだよ、兄貴』とな」

そしてマサムネは少し笑う。

「モグリュ!」

なぜ笑うのかがシモンには理解できない。

いい。 安心しる。 お前が彫ったやつだけはちゃんと保管している

さ

「モ、モグリュ?!」

ほら、これな」

そう言ってシモンが掘り出した化石をシモンに見せる。

「モ、モーグリュ!」

それを見てシモンは喜び踊る。 ちゃんと分けていてくれたことがうれしかったようだ。

「うれしいのか、シモン」

「モグ!」

そして二人は喜び続けた。 『 あ あ、 、 兄貴』と書かれた紙を差し出しながら喜ぶシモン。 回りから注意されるまで.....

「て言うかよくあんなにきれいに文字がかけるもんだな」 モグリュ!」

どうだと言わんばかりに胸を張るシモン。

「トガミもできる?」

「ガ、ガメガ?!」

そう言われてトガミも紙に文字を書いてみるが.....

「汚くて読めないね」

「ああ、そうだな」

そしてこの答え。

「ヨブリュー「ガ、ガメガアアアアアアア!」

「モグリュ」

『不幸だぁぁぁぁぁぁ』と叫んでいる、と。叫ぶトガミ、そしてシモンは横で紙を出す

本編に続く

# 【ニビシティ:ポケモンセンター 宿場個室Z】

```
「 れ、 カナデ殿.....」「 お、 おなっ!」「 お、 おなっ!」
```

もので」 「なら被害者には何もないのかい? 「し、しかしでござるな! ぐ、偶然でござるよ! 「気がつかなかったで乙女の体を見たことが許されるとでも?」 い、いやあ。 気がつかなかったでござるよ」 加害者」 事故みたいな

そんなの当たり前のことだろう。そして被害者に対し加害者が何かをする。それはあたりまえの話だと言えよう。事故というものは考えて起こるものではない。そう言われると何も言うことはできない。

どうすれば解決できる?なら今この状況。

「ならどうすればいいというのでござるか!」

「..... こ..... び.....」

「 ? なんでござる?」

「乙女の肌を見たんだから永久に僕のしもべになってもらうよ!」

なぬっ!? 永久でござると!? というか僕とかいうお人

でござったか、カナデ殿!?」

ょ バ いいからわかったかい! 僕のいうことはこれからは絶対だ

「ご、ござ......一人旅する予定だったでござるのに.....

おろおろとしだすカナブ。

顔を赤くしながら起こるカナデ。

もはや何も言うことはない。

かくして、 女とは知らずに風呂場に突入という大変な事件は

カナデに僕ができたということで幕を閉じた.....

まぁ、 何 ? 風呂場で両者全裸ということを知らなかっただって? いいんじゃないかな別に。

そもそも二人とも10歳だ、 こんな事件が起こっているのも不思議

いや、いまどきの10歳はよくわからない...

「ほら、荷物はこれだけ持ってね」

゙え、これカナデ殿の荷物で……」

「いいから!」

「お、おぉ.....わ、わかったでござる...

持 つ。 そう言われては言うことを聞くしかないカナブはいそいそと荷物を

ござる<sub>」</sub> 「い、今からニビジムに行くのでござるよ? 拙者疲れてしまうで

「持った後に何も言わない!」

わ、わかったでござるよ.....」

そしていそいそと先に部屋を出るカナブ。

「まったく.....女心というものを分からないな彼は.....」

何を言おうと彼女たちは10歳である。

半に続くよ。

#### ニビシティジム】

ろうからなぁ~」 「運が悪いのかもだぜぇ。 「よかったな。 今日でダブルバトルは終わりの予定なんだ」 俺とタケシさんのコンビには勝てないだ

ポカッ

勝ち続けていたとはいえ苦戦を強いられた。 ドは傷ついて休養することになったんだぞ」 「そう言って何度負けた? そのせいであの二人組と戦ってからは だからイワークとサン

「だ、だ、 大丈夫っスよ!
イシツブテ達でも勝てますよ!」

ニビシティのリー ダーと弟子の漫才はすでにニビシティで有名であ

「ご、ござ......何なのでござるかこれ..... いや、 ま、 あれだろ、このごろ有名になったっていう漫才でしょ 漫才!? 別に本業じゃないだろ。 ここはポケモンのジムのはずでござるよー て言うか僕は説明キャラ位置に..

なんやかんやでなんやかんやである。

いせ、 何を言ってるんだ君は。 ござる」 よくわからないでござる」 早く戦いの準備を」

カナブはポケットのボールを出す。

「どちらにするでござるか.....ここは.....」

いいから早くしなよ! 僕から先に行くよ! Ŕ い、行くでござるよカイのしん!」 頼むよカミカ!」

ポシュンィン!

ポシュイィイ!

「カーイ!」

「チート!」

のだが カナブはこの間に捕まえたストライクのハサのすけを出すか悩んだ

急かされてしまったので相棒であるカイのしんを繰り出した。

「いけ、イシツブテ!」

「俺のイシツブテも!」

「ツーゥブ!」

ジム側の二人もイシツブテを二体繰り出した。

「小さいから狙いにくいというのもあるかもね」「イ、イシツブテ二体でござるか」

「イシツブテ! いわおとし!」「イシツブテ! まるくなる!」

トシカズのイシツブテはいわおとしを放った。タケシのイシツブテはまるくなった。

クチっ!?」 イッシィ!」 なぜいわおとしにしなかった.....はっ よけるでござるよカイのしん!」 カミカ!」

カイロォ!?」

んでいたのだ。 いわおとしのいわにまるくなるでまるくなったイシツブテが紛れ込

落ちてくる岩、つまりはイシツブテが突然軌道を変えた。 それに二匹は対応することができなかったのだ。

「どうだ! 俺とタケシさんのコンビネーションプレィ!」

恥ずかしいらしい。 トシカズは大声をあげるがタケシは無言だ。

「以前もこういう流れが.....」「って、ありゃ?」クチートがいねぇ」

「ラッシャア!」「チトォ!」

トの不意打ちがイシツブテ (トシカズ) に決まる。

「カイのしん!」「しかし、こうかはいまひとつ」

「イッシャア!?」「カァァアイ!」

タケシ)をつかむ。 カイのしんがイシツブテ(トシカズ)を助けに向かうイシツブテ(

「カァァァアイ!」「ちきゅうなげでござる!」

だがカイのしんの異常なスピー ドにより通常の二倍のダメージを与 普通ならレベルと同等の威力しか与えられない。 そして宙に舞うカイのしん。

「イシツブテ!」「イッシャアアァ!」

える!

タケシのイシツブテは倒れる。

「イシッ!」

体勢を立て直したトシカズのイシツブテはカミカを倒そうとする。

だがそこにはカミカはいない。

またふいうちをするのだろうかとあたりを見るイシツブテ。

イシ!」

カミカを見つけたイシツブテはカミカに向けて加速する。

チ~ト」

· そう。狙っておってくるから馬鹿を見る」

「ござる! ばかぢからでござる!」

「 カアアアアアアア イロオオオオオオ !

「イ、イシャア!?」

離れた位置にいるはずのカイのしんが高速で走ってくるざまは イシツブテからしたら絶望でしかなかった。

「これにて」

閉幕ってやつだね」

そう二人が発言したとき。

「イシャァ!」

イシツブテは地に落ちた。

「僕たちの勝ちだね」

<sup>・</sup>拙者たちの勝ちでござる!」

「そ、そんにゃあ~」

「やはりこいつとのコンビでは無理か....

ひ、ひでえ!?」

## 【ニビシティ:ポケモンセンター】

「勝てたでござるな。よかったでござる」

ああ、そうだね」

これも二人の力を合わせたからでござる」

笑顔でそういうカナブ。

.....何にもないさ」 ? ど、どうしたのでござる?」

「どこか具合でも.....」

ッ.....ッぅ! さっさと次の町に行く準備をするんだ!」

「ご、ござる!?」

あわてふためるカナブ。

「君の地位はずっとそこだよ。カナブ……」

Ų 事故でござったのにここまで.....」

加害者に何も言う権利はない」

ひどいでござる~」

そう。 たぶん永久に変わることのないだろうこの関係。 永久に。

# まぁ別にマサムネさんならいいですけどねっ

旅。それは人生の縮図。男のロマンである。

「 行っけぇ~ !シャドウ!」

コッココココココ」

とびはねーる・れっどまきしまむ・ばぁにんぐ!」

ピュ〜

「何してるんですか?」

いや、なんか突然したくなって.....」

ガイトに負けるわけにはいかねぇ......」

ユウミに負けるわけにも行きません」

二人の背中くに燃える炎が見える。

「ガガガガガガガガガ」

「ピチュ」

炎ではなくトガミがカミコから電撃を食らっていただけのようだ..

「モグモ」

「チェリ」

「ロッロロロロ」

マサムネの手持ちメンバーはそれを何もせず傍観するだけであった。

モモーグモグ」

トガミはすぐに回復した。

超回復能力でも持っているのであろうか。

「いきなり何を言ってるんでせうか!」

とりあえずゴールデンボールブリッジに行こう」

「え、何?せうか?」

「 ゴー ルデンボー ルブリッジなんて! 卑猥です!」

ゲームフリークにでも言ってくれ」

そんなこんなでゴー ルデンボー ルブリッジへ

シャドウ。とびはねる! そしてシモンは落下こうそくスピン!」

そしてそこからシモンは落下しながらのこうそくスピン。 とびはねるで空に上がるシャドウの上にはシモンが乗っている。

「キヤアアアアア」「ビビイイイイイイ」

キャタピーとビードル相手にやりすぎな気もするが と言うか橋に穴が開いているようなきもするが.....

いせ、 負けでいい! まぁ。 うん」 負けでいいから! もうやめてくれー

そう言って戦いは終わりを告げた。

ゴールデンボールブリッジ制覇おめでとう」

「と言っても二人で協力してなんですけど」

「その通りです。愛のコンビネーションです」

そうかい。 じゃあ商品のわざマシンだよ。 一つしかないけど

そう言って係りの人が渡してくるわざマシンを受け取る。

「 それカントー では買えない非売品だからね」

へえ。ならいざと言うときまでとっておこう」

わざマシンは一度使うともう使えませんからね」

そう言ってかばんの中にわざマシンをしまうマサムネ。

そういえばこの先にポケモン転送システムの生みの親。 ポケモン

「ほう。一度会ってみたいもんだね」

マニアマサキの家があるらしいですよ」

「じゃあ行きましょうか」

ん ? いせ、 ಕ್ಕ あいに行って会えるものなの?」

「さぁ」

「さぁ? 『さぁ』なんだよねやっぱり!」

とりあえず行きましょう!」

# そう言ってマサムネはミズホに引きずられる。

俺は尻にしかれる旦那になりたくなぁ~ぃー!」

「そういやミズホちゃんはマサキは呼び捨てなんだね」 ここがマサキの家です!」 ここに呼び捨てでよろしくって書いてますよ」

じゃないと駄目だと書いてある。 ミズホが差し出したのは管理システムの利用条約。 この一つにマサキは自分に話すときは呼び捨てタメロ

「なんか、 ははっ。 これなら会おうとすれば会ってくれますよ」 お気楽そうな感じの人だな」

そう言って家のインターフォンを押す。

ピーンポーン

ピーンポーン

「...... 行け」「コッココココ」

コッココココ」

スゥ

.....

スゥ

「コッココココ」

「グリュ」

・コッココココ」

「 グリュ。 グリュ 」

カキカキ

「グリュ」

「そうか、中にはマサキはいなかったか」

「偵察ご苦労です」

. ロッロロロロ」

そしてマサムネたちはポケモンセンターへと帰った。

解説

と言うことです。二人が呼んで納得した。シモンに報告して、シモンが紙に結果を書きシャドウがとびはねるで家の中を調べ



感想待ってますよ。

## **褁第十五壊 なんやっちゅうんや!**

#### 【マサキの家】

マサキの前には二人の男がいた。

なんや、あんたらは」

「我々は.....いや、なんか悪人ぽいなこれ」

おいおい。 えーとマサキさん。 私達はこういうものです」

そう言ってマサキに男は名刺を取り出す。

「ポケモン解放会?」なんやねんこれ」

「ポケモンを解放するための活動でして」

その為に転送システムを我々にお貸しいただきたい」

んなこといきなり言われて『はい、そうですか』なんて言う訳な

何を当たり前なと言う顔をしながらマサキは答える。

「それもそうですよね。 まぁ我々も悪人ではないですし今回は帰り

「では、失礼します」

そう言って男達はマサキの家を後にした。

なんやったんや..... また来るんかな、 あの二人。 めんどうや」

(ポケモン解放会... ..目的はポケモンの解放かい.....なんてな)

#### ガチャ

くだらないことを考えていると扉がまた開いた。

なんや? ポケモン解放会の二人が戻って来たんか?」

そう言って後ろを振り向く。

「って。誰やお前は!」

「どうでもいい、一緒に来てもらうぞ」

あ、悪人や?!」

驚き戸惑うマサキ。

さっきの二人とはまったく違う格好をしている。

「こ、このままさらわれてたまるかい! 行くんやロコン!」

コン!」

マサキは近くにいたロコンを男に差し向ける。

「ところがそうはいかないんですよぉ~」

さらに男が現れる。

行くんだ。 化石より再生されしポケモンよ!」

.....

何やそのポケモンは! う うわぁああぁぁぁぁゎ!」

くふふ。さすがにこのポケモンには勝てなかったようですねぇ」

ふむ。さすがは大昔の強力なポケモンだ」

しかしこれは私達の目的の一歩でしかないのですよ」

ふっ。そうだな」

゙では、帰りましょう。 ジョウトヘ」

「ああ.....あの人も我らを待ってるだろうしな」

マサキはポケモンが袋に入れ担いでいた。そう言って男二人はマサキの家を去った。

本編に続く

#### 183

### 第十六壊 - 1 そう、 マサムネさん以外はどうでもいいのです

## 【ハナダシティ:ポケモンセンター】

「しかし、留守で残念だったな」

「ええ。 でもまぁ、 会わなくてもまったく問題ありません!」

· まぁ、ないんだけどね。うん」

問題ないとはっきりと行こうと言った人に言われるとは

マサムネも予想はしていなかった。

別にミズホ的にマサキなどどうでもよかったようだ。

マサムネ的にはあってみたかったので少し残念だが。

だな」 「まぁ なんだ。 レベル上げもなかなかにできたし明日はジムに挑戦

ミコで行きますよ!」 「そうですね。 ハナダは水ポケモンのジムのようですし、 明日はカ

そう言って足元にいるカミコを抱き上げ抱える。

「ピカチュ」

「そういや、ミズホちゃんはカミコは抱えるけどトガミは抱えない

ね

には行きません!」 「ええ、オスですから。 マサムネさん以外の男にココを触らすわけ

「ああ、 そう。 ポケモンすらそういう対称なんだ...

なんかトガミが倒れていつものように叫んでいる。 今回はマサムネは同情しなかった。

「モグリュ.....」

泣くなよと言わんばかりに慰めるのはシモンだけであった。

お風呂付です! 個室にお風呂が着いてます!」

「ああ.....そうだね.....」

そう、お金がたらふくできたために少しお金をかけた部屋に泊まっ

たのだ。

超豪華と言うわけではないが普通よりいいというレベルの部屋だ。

「わかってますよね? わかってますよね!」

「え、あ.....ああ.....ミズホちゃんの言いたいことはわかるよ。 で

もね」

「でも? でも、何なんです?」

「いや、その、さぁ」

「私達の関係って何ですか?」

「え、いや、なんか流されただけって言うか.....」

流された? 意味のわからないこと言いますね」

(じゅ、 10歳の女の子にココまで押されていいのか俺は.

10歳とはいえ凄い.....ミズホと風呂に入る

と言うことを戸惑うのは当然である。

いいですか。私達は恋人なんです」

グ、グゥ.....」 いや、 ひどいです! だからさ。 私とは遊びだったんですね!」 今考えると流れで.....」

( ミズホちゃんがこんな言葉を覚えるのもすべて野球バラエティゲ ムのせいだ.....)

「ふふ。『こいびとどうしですることぜんぶ』ですよ」 「な、なにをするミズホちぁぁぁぁぁゎん!」 「こうなったら。 むりやりにでもつれていく!」

大事なものは失っていないとだけ言っておく。その後のことはご想像にお任せする。

「朝ですね~」

マサムネは起きる。

ミズホも起きる。

『ただしなにもそうびしていない』

「……」「はい。この際だから着せあいましょう!」「……着替えよう」

. さぁ、ジムに行きましょう!」

「ああ、行こうか。ジム挑戦に」

何事もなかったのように二人はジムへ向かう。

「チュリチュリ」

「ピカチュ」

今回はこの二匹で挑むつもりのようだ。

くさとでんき。

愛称を考えてのものだがうまくいくかはわからない。

言い忘れていたがハナダもダブルバトルを受け付けている。 挑戦者は一人だろうが二人だろうがいいらしい。 ただし。ジムリーダーひとりで二体を使ってくるらしい。

ぬふふ ? そんなドイツ人武士みたいなこと言われても.....」 今回のジムリーダーのカスミはかなりの実力者だと聞く」 ... そうやね」 よくわかりませんが否定はよくないです。愛は絶対です」 私達の愛のコンビネーションに勝てるものなしです!」

なぜ関西弁.....

俊半へ 続く

## 第十六壊・2 なんてことをしてくれますか!

### 【ハナダシティジム】

「ふふっ。あなた達が挑戦者ね」

ジムリーダーカスミ..... 水着姿だ。

ださい」 「何て破廉恥な格好を! マサムネさんにそんなもの見せないでく

すうううう!」 「むきぃぃ! マサムネさんに肌をさらしていいのは私だけなんで 「え、ミズホちゃん? ここ回りプールだよ。 ただの水着だよ?」

ポカポカとマサムネを軽く殴り続けるミズホ。

「い、痛いよ。い、痛いって」

「......大変ね、あなた」

「はい、大変です.....」

と言うわけで。

ケモンを使用のダブルバトルとなります」 ジムリーダーはポケモンを二体。 挑戦者二名はそれぞれ一匹のポ

審判役のカスミの弟子がそう言う。

では、始め!」

それを合図に戦いは始まる。

「行けっ! サユキ!」

「行って! カミコ!」

「ピッカ~」

マサムネ・ミズホ組のポケモンがでる。

「行きなさい! ヒトデマン。スターミー!」

「ヘヤッ!」

゙スタァァァァア」

鳴き声の仕方がヒトデマンだけ違うような気がする.....

「試合開始!」

審判の掛け声とともに戦いは始まる。

「スターミー、ヒトデマン。こうそくスピンよ」

カスミの声とともにこうそくスピンで接近してくる二匹。

「よけろサユキ!」

「カミコもよけて!」

その攻撃をよけるが再び後方から襲い掛かってくる。

· チュリっ!」

サユキにヒトデマンがあたる。

それほどでの威力でもないようだ.....レベル上げの成果か」

らこっちに返されかねんな.....) (しかしあのこうそくスピン。 ねむりごなやしびれごなをつかった

「カミコ。かげぶんしんです!」

「チュゥ!」

カミコはかげぶんしんをする。

「そんなのこうそくスピンで全部狙ってやるわ!」

そして再びこうそくスピンでの攻撃が始まる。

には慣れていんだ) (カミコに攻撃を集中させている? そうか、 やはりダブルバトル

これではトレーナーが二人のマサムネたちに勝てるかはわからない。 一対一のような戦い方をしている。

「サユキ。せいちょうだ」

· チュリ<sub>」</sub>

カスミはサユキがしている行動に気がついていない。

カミコ。でんこうせっかです!」

· ピカチュウ!」

カミコのでんこうせっか。

「ヘヤッ!」

ヒトデマンにヒット。

「くうう。 やるわね」

サユキ。ヒトデマンにメガトレイン」

「チュゥゥゥリ!」

へ、ヘヤッ!?へ、ヘヤァァアァ」

突然の攻撃に驚きながら力尽きるヒトデマン。

......ふっ。 サユキのことを忘れているからだ」

「スタアミィ!」

サユキめがけてスターミーが飛んでくる。

「スタアアアア」

みずのはどうで攻撃を仕掛けてくる。

「こうかはいまひとつでレベルも同じ程度だ。 倒れるわけないだろ

う!」

「チュリィ! チュリィィィ!」

サユキはマジカルリーフで攻撃した。

「ス、スタアアア」

じこさいせいをするスターミー。

ピィィィカアアアチュー!」 カミコも忘れないでください。 カミコ、 エレキボール!」

「ス?!スタタタタタタタタタ」

そして下に落ちていくスターミー。

者の勝ち!」 ..... はっ! Ń ヒトデマン、スターミー戦闘不能。 よって挑戦

そしてマサムネたちは勝利者となった。

「完敗よ.....なれてもないのに一人で戦おうとしたからかしらね...

:

「ああ、そうだな。そうだろう。さぁバッジをくれ」

「そんなにはっきりと言わなくても..... まぁいいわ。 はい

そう言ってカスミからブルーバッジを受け取った。

「チュリー」「よし。また一歩前進だ!」

感想は募集してますよ。

## **褁第十六壊** いくつ始まる旅物語

【ハナダシティジム:更衣室】

「カスミが負けるなんて.....カスミより強い奴ってまだまだいるん

彼女はジムの一員であるピクニックガールのコズエ。 マサムネたちの戦いを見て自分はまだまだ下なのだと感じたようだ。

「これは旅に出るしかないわ!」

コズエ、13歳にして初の旅である。

【この小説だけのお話】

旅には10歳には出れる。

これはよく知られるルールであるが

ジムの門下生となるという道もあり

なったものは旅に出ないでジムリーダー のもとで修業し

一人前のトレーナーになるというものである。

「と言っても一人旅ってのはねぇ……そうだわ」

そしてポケギアを取り出す。そう言ってカバンをあさるコズエ。

あいつも旅には出てなかったわよね」

#### プルルルル

旅に? そうか。 ええ。 いやね、 あ、ああ。 ど、どうしたのあんた? それでね。 あんたも、 :: は? もし.....もし.....なんだ ....そうか、あいつらが来たのか。そうか.. 私 お前が?] お前は.....まぁ、頑張れよ] 実はね。旅に出ようかと思ってね」 自分が弱いってことを確信したの」 一緒に行かない?」 気にするなよ.....それでどうしたんだよ..... お前、俺はジムの門下生で.....] 痛感したんでしょ」 なんか元気ないけど.....」 ... コズエ..... ]

あんたしかいないの」

都合のいい使い走りってか。まったくよ]

まぁ、 そうね」

うし、 わかった。 タケシさんに話しつけてハナダに行くわ]

うん。 まってるわよ。トシカズ」

そしてポケギアの通信を切る。

(これから旅が始まるのか..... 楽しみだわ)

これはジムの門下生たちが旅に出るまでの軌跡である.

なにやらパッとしない感じだけど勝利したねぇ」

ハナダシティ:ポケモンセンター】

すべては愛の.....」

いや、もうそのパターンはいい」

「パ、パターンとは何ですか!」

「もうそんなことをなくても愛は伝わるよってこと」

· なんと!?」

その言葉を聴くと突然ミズホはぐるぐる踊りだした。

「うっれっしぃで~す 」

慣れるしかないよね。 慣れるしかないんだよね!」

マサムネの受難は続く。

てなわけで、次はクチバシティに行くよ」

おや、ヤマブキシティのほうが近いのでは?」

ミズホが疑問の声を上げる。

あそこはいまはゲート建設中で通行止めなの」

ゲート? 普通の人間は入れなくなってしまうですか」

いや、ほれ、通行証」

ポケッ トの財布の中からマサムネが通行証を出し見せる。

「何で持ってるです?」

. 親父はヤマブキで働いてるからな」

そう言いながら通行証をなおす。

「てなわけで、クチバに向かおう」

ならホテルでも泊まってそこで......」 マサムネさん以外に肌はさらしません! 「クチバですかぁ。 海の町ですね..... しかし水着はNGです。 なのでどうしても見たい

ょ 「いつも道理飛躍しすぎだよ。別に海に泳ぎに行くんじゃない んだ

「またまた飛躍しすぎ! 見たくないとおっ しゃる! 見たいとか見たくないとかの話じゃない Ų 死ぬしかないです!

いつも道理のミズホを抑えながらマサムネはクチバとの地下通路向

ぶつぶつ.....もっと勉強しなくては.....その為には.....」

(なにやらミズホちゃ 気のせいだよな) んが怖いこと言ってるよう泣きがするけど...

既.....子.....グフフ」

隣で不思議な笑い方をしているミズホを見てマサムネは少し恐怖を

#### 覚えた。

しかしここは長いなぁ。 クチバまでは遠いと言うことがよくわか

Z

「本当ですね」

ミズホは落ち着いたらしくマサムネの言葉に返答する。

そしてそのままとぼとぼと道を歩いていく。

「ん? なんかあそこでもめてるな」

「なんでしょうか?」

あなた達は悪人です! 何言うかてめぇ! こいつは俺が捕まえたんだ。 ポケモンは解放すべきなのです!」 どうしようと勝

手だろ!」

女性が一人男性に詰め寄っていた。

「ポケモンにも人権と言うものがあります!」

「あるわけねぇだろ!」

ですからそういう人たちからポケモンを解放するのがですね」

うっせぇんだよ!」

うわっ」

解放解放と言い続けていた女性は男に飛ばされた。

けっ。うぜぇ」

### そう言って男はその場をさった。

おいおい。 いたた..... ポケモンの解放はポケモンを救うのに.....」 何があったてんだ?」

は い ? どなたですか?」

いや、 なんかあったのかなと思って」

そう言ってマサムネは女性に手を差し出す。

これはすいません」

そう言って女性はマサムネの手をつかみ立ち上がる。

ふう。 私の名前はウルサです。あなたは?」

俺はマサムネ。 こっちはミズホちゃん」

よろしくです.....が、さっさとその手を離すのです!」

ミズホはずっと手をつかんでいるウルサの手を無理やり引き離す。

まったく。 何ですかこの女は!」

何も手をつかんでただけでそこまで.....」

マサムネさんはだまされているのです!」

あの~私はお邪魔ですか?」

いや、まだなんであんなことになってたか聞いて...

邪魔に決まってます! この場から去ってください!」

ミズホはマジ切れしてウルサをにらんでいる。

そうですか.....ではこれで....

## そう言ってウルサはその場を去って行った。

おいおい、 ハナダの方に歩いて行っちゃったぞ」

「ふん。これでいいのです」

「..... ああ、そうね.....」

マサムネの心には疑問が残ったままだった。

### 【クチバシティ】

つっきましたぁ~

「なんか暑いな.....」

なら、冷房のきいてるポケモンセンターに行きましょう」

。 あ あ あ

そしてポケモンセンターに入るマサムネたち。

お、おおい。マサムネ君」

「あれ? オーキド博士!?」

お、おじいさん!?」

いやいや、久しいのぉ」

突然話しかれられたと思ったらその相手はオーキド博士であった。

な、なぜこに」

なに、 サントアンヌ号が年に一度来る日でな。 船で講義をしてほ

しいといわれてな」

「そうなんですか~」

いてるのぉ~」 にしても、ミズホは少し見ぬうちにマサムネ君にべったりくっつ

「やだ、おじいさまったら」

それを見てオーキド博士は大いにうれしそうだ。凄くうれしそうにしゃべるミズホ

これはヨー コさんに伝えておかねばならぬの」

「ははは、なんか未来が見えます」

「ふむふむ。 おっ! そうじゃ、一緒にサントアンヌ号のパーティ

にでも行かぬか?」

「「パーティに?」」

オーキド博士の言葉に二人の疑問の言葉が重なる。

「さっきも行ったが講義を頼まれておっての。 その後にパーティ

があるんじゃ」

「それに俺達も……ですか?」

「どうじゃな?」

「マサムネさんの意思に従うまでです」

「え、そう? なら行きます!」

そうかそうか。 うむ。では明日はパーティじゃ」

そしてマサムネたちのパーティ参加が決まった。

続く

## さっさとどこかへ行ってください! 少しも見逃せないです.....

あと、マサキですが、第一部にはもう出てきません。 サントアンヌ号は一年に一度クチバに来るということになってます。

### 気がつかないこと 気がつくこと

### 【ハナダシティ】

「ふう、ふう。 やっとつきましたね。 ハナダシティ」

走りつかれている彼女はウルサ。

マサムネと別れた後早足でここまで来たのである。

**゙おお、ウルサ。来てくれたのですね」** 

· いやぁ。まってた、まってた」

「すいません先輩。遅れてしまって」

「いやいや、いいんですよ」

以前マサキの家に言った二人組みと合流していた。

「いやぁ、きっと君のような女性がいればマサキさんも協力してく

れるはずです」

「ええ、美人ですから」

「そんなことないですよ。お二人の奥さんだって.....」

はは、そんなの昔のことです」

そうそう」

「後でそう伝えておきますね」

「や、やめてください」」

うろたえる男二人組

とりあえず、マサキさんの家に行くのです」

「行きますか」

「おーい。いませんかぁ」「いや、扉の鍵は開いてる」「あれ、お留守ですか?」

勝手に家の中に入る三人。

「いないよね」「いないですね」

すでにさらわれた後である。そこにはマサキはいない。

「ないですが.....ん?」「特に荒らされた形跡とかは?」

「どうしました?」

「でかい足跡が.....」

部屋はそのまんまだが一部にでかい足跡がある。

「 ん~ 何かあるんじゃ ないですかね」

「何かって何でしょう」

「わかりませんよ、そんなの」

「でも荒れた形跡がないですしねぇ.....

しかたないです。 マサキさんの協力はあきらめて本部に帰りまし

事件が起こったという事実を知らずに.....

本編に続く

### 気がつかないこと 気がつくこと (後書き)

悪って何ですか?

正義とは何ですか?

答えはどちらも偏見です。

まぁそんなことは気にしなくていいのでしょう。 いや、求めるものの答えですかね。

答えを考えるのは自分なのですから。

# 美女とか出てきてマサムネさん狙いに来ないですよね?

### クチバシティ ·・ポケモンセンター】

普段の格好でいいんです?」

別にそういう階級の人が来るパーティーと言うわけじゃないんじ

ゃ。 普通のトレーナーも来るぞ」

「サントアンヌ号は豪華客船なのに庶民に優しいんですね」

まぁ、そういうことじゃの」

いよいよパーティと緊張し始める二人をなだめるオーキド博士。

(もしかしたら新たな戦いの出会いがあるかもしれない.....ワクワ

クだな!)

しみです!) (もしかしたらここでマサムネさんとの既成事実が.....ニヘッ。 楽

あった。 それぞれは笑顔だったが、 その心の中の考えていることには大差が

なにやら二人の笑顔から怖いものを感じるのぉ....

すかね」 マサキさんいませんでしたしねぇ。 私達のよさを伝える方法内で

そういえばサントアンヌ号が来ているとか」

それにのりこめばいいんじゃないですか!」

でもチケットを買うお金がないですよ」

ああ.....帰りの分のお金まで使うわけには」

「出入り口で講義でもします?」

· そうしましょうか」

### 【サントアンヌ号前】

「見てくださいマサムネさん! 大きいですよ! 大きいです!」

ああ、大きいね」

年相応のはしゃぎ姿を見せるミズホを見て

マサムネはかわいいと思って頭をなでていた。

「ニヘエ」

なかよきことはいいことじゃの。さて、そろそろ行くぞ」

マサムネたちもその後を追う。 そう言ってオーキド博士はサントアンヌ号へと向かう。

#### (一方そのころ)

ガイトぉ~あの船に乗らないのぉ~楽しそうなのに~」

クチバシティのジムから出てきたガイトとユウミ。

ええ〜 いや、 乗りたいよぉ~乗りたい~」 しかしだな。 俺はマサムネの先を行くと宣言してだな」

### ユウミは外との背中を乱打する。

そういうと思ってたよ。 わかった。 わかったから。 はい、チケット」 乗ろう。 乗ろうぜ」

そう言って背中のカバンからチケットを取り出す。

何でお前がチケットを持ってるんだ」

お母さんから貰ってたんだよ」

「お、叔母さんから!? 行かないと言ってたら叔母さんをたてに

使って無理やり連れて行く気だったのか?!」

· さぁ~ 」

「こ、こいつ……まぁいい! とにかく行くぞ!」

· おぉ~ \_

そんなこんなでガイトもサントアンヌ号に乗ることとなった。

### 【サントアンヌ号】

「す、凄い豪華ですね」

「そうだな。しかしいる客は一般人ばかりだ」

ない。 周りを見渡すと豪華な服装をしていると言う人は数えるほどしかい

だ 「豪華な服装をしている人たちは真の金持って人みたいなのばかり

ふん。世の中お金より愛です」

「まぁ、金はあるんだけどね.....」

そしてマサムネたちはオーキド博士の後ろに続き部屋に向かう。

ガチャ

「ここがわしの部屋じゃ」

· ほえ〜 」

「この船はカントーを離れた後シンオウに行く予定での。パーティ

の後はホウエンに向かう予定じゃ」

「シンオウに?」

「うむ。ナナカマド博士がわしに会いたいらしいのでな」

北の地シンオウ。

ガイト達の故郷である。

一度行ってみたいなぁ。雪とか見たことないし」

いずれ行くこともあるじゃろうて」

さ、マサムネさん! そこらを回ってみましょう!」

ああ、そうしよう」

そう言ってマサムネたちは部屋を後にする。

ふむ。 ここで他の地方のものと戦うことができるかも知れんの..

:

# 美女とか出てきてマサムネさん狙いに来ないですよね?(後書き)

ため書きしたりしてる人もいるんだろうけど。毎日一話考えるの辛いね。そろそろ疲れ始めた。

今回からタイトルは再びマサムネくんに戻ります。

## 何を感じた?

#### 【サントアンヌ号】

「バトルフィールドか。 すげぇなぁ船の中なのに」

船なのにすごいですね!」

船の中にある大きなバトルフィー ルドを見て驚きの声を上げる二人。

そうだな。 すごいバトルフィー ルドだと思うぜ」

# 突然後ろから声が聞こえた。

お前も来ていたのか」

まぁな。 ユウミのわがままだ」

「 ぶぅ~ 私のわがままじゃ ないよ~ 」

ガイトの背中にべったりとくっついているユウミは不満そうに言葉

を発する。

やれやれ .....とにもかくにもだ。俺は別に今はバトルする気はな

「ジムに行って来ただと!? まさかまた.....」 ジムに挑戦してそのまま来たしな」

「ふっ。すでに攻略済みということだ」

またってことかよ.....」

決着は大会で.....そういったはずだ。 俺は負けることはない」

そうだな」

ではそろそろな。 ユウミがうるさいしな」

た。 そう言ってユウミを背中にくっつけたままガイトはその場を後にし

「あいつはあいつで大変だな.....」

「何が大変なんです?」

「男にしか分からない大変さ.....」

「男にしか分からない.....そんな、 マサムネさんの大変さを分かっ

てあげられないなんて.....」

...... 7 h

もはや何も言うことはなかった。

「バトルがしたい~したいんや~」

「おやおや、いつもと違う感じやな」

ジョウト訛りの男と女の子が会話をしていた。

いやな、 こう言うノリの時はバトルってのが筋やねん」

しかし、 ここで降りてジョウトに帰れんの?」

女の子が男に問う。

·帰れな話が進まんけどな」

せやな。 せやけど兄ちゃん。 どこのだれと戦うって言うん?」

てけとーや、てけとー」

そか。てけとーか」

一人はニヘラニヘラと笑っている。

よしよし。 おうおう。 あいつと戦ってみよか」 なら相手あれでいいんちゃう?」

二人は見つけた適当な相手に戦いを挑みに向かった。

なんか、会ってはいけないものに会いそうな予感が」

突然何を言うんですかマサムネさん」

なんか体が突然震えて」

マサムネは何かわからない不安に襲われた。

ん ? おやおや、 バトルフィー ルドでバトルが始まるみたいだな」 マサムネさんが一番になると思っていたのですけど」

バトルフィ ルドを見ると同じ年の少年と年上らしき青年が立って

いた。

あれ?」

マサムネさん?」

え、 ぁੑ 何 ?

いえ、 何かを見ていたようで..

俺が、 何かを見ていた?」

ええ、 何かに.....」

マサムネは少し考えていた。

(俺があのフィ ルドを見て何かを感じだ.....そういえばガイトも

#### 時も何か.....)

何かとは何か.....

何かを感じてはいる

何を感じているのか

何かはわからない...

「何か.....」

「マサムネさん?」

「あ、いや。あれ?」

長い時間考え事をしていたのかバトルは知らない間に終わっていた。

どうやら一対一で短期決戦で終わったようですね」

「短期決戦でか」

もうバトルしてた人はどこかに行っちゃいましたよ」

「行っちゃったか.....」

感じた何かを分からずじまいに終わってしまった。

結局いったい何だったのか。

そもそも『何』とは.....

どうやらおじいさんのお話が始まるようですよ」

「ん、ああ」

ミズホの言葉へのマサムネの返事は軽いものだった。

·マサムネさん?」

「心ここにあらずという感じなので」「ん? どうかした?」

するとマサムネの顔は少し驚いたような顔になった。

「そう、ですか?」 「いや、そんなことはないよ。いつもと変わりはないよ」

(バトルを見ただけでここまで悩むものなんでしょうか.....)

ただミズホの心には不安が残った。

続く

# 第十九壊(何を感じた? (後書き)

そこのところはよろしくお願いします。 答えられないようなものにはこたえられないので 感想は募集しますがいっときますが

感想は募集中です。

224

以上で話はおしまいじゃ」

オーキド博士の話は終わった。

「どうやら話も終わったようだ」

「そうですね。マサムネさんこの後は....

この後ね。どうするかね」

(普段のマサムネさんに戻ってる.....でもなにか.....)

「どうした? ミズホちゃん?」

゙あっ、いえ.....」

間もなくダブルバトル景品付きバトルイベントが始まります

突然アナウンスが聞こえる。

景品付きダブルバトル?」

「あっ。 あっちで参加者募集中らしいですよ」

景品は勝ったペアの一人一人がくじ引きで決まるか.....」

面白そうな話である。

対戦相手は用意された船員と戦うらしい。

「試し放題ってやつです」

運だめしに力試しってか.....面白い話だ」

試し放題。 グフフ。愛の力で簡単に勝利です」 しかも無料でってか..... 参加しかねぇよ」

不気味な笑いが周りの視線を集める。 ミズホもいつもの調子に戻った。

「ミ、ミズホちゃん?」 さぁ、行きましょう。 グヘヘヘ.....」

壊れるときは壊れる。 ミズホのキャラは安定しない。

【特設バトルフィールド】

ん ? 違和感はないか」

マサムネさん?」

hį ああ。 相手が気になってな」

(さっきの違和感がない。 つまりはあの対戦者はいない.....)

マサムネは今のところ通常だ。

感を感じただけだ) (しかし、 いないというのは確定か? ガイトの時も始め少し違和

違和感は違和感。 その何かはわからない。

**一君たちが挑戦者だね?」** 

「っと、そうです」

ですよ」

船員が現れ二人に言葉をかけてくる。

「よし。ならばバトルの準備はOKか!」

「できてます」

「です」

「ではパドル!」

船員はボールを構え投げる。

それに合わせ二人もボールを投げる。

「行けっ!シャドウ!」

行くです! トガミ!」

ボールからシャドウとトガミが出てくる。

「ロッコココココ」

「ガメ! ……ガメ?」

隣のシャドウがいつもより光っているような気がする。 トガミはそう思った。

「メノォ」

船員のポケモンはワンリキーとメノクラゲだ。

試合開始!」

審判役の船員が叫ぶ。

「コッコココココ」

シャドウはとびはねる。

「ガメェ!」

トガミはこうそくスピン。

「メノォ!」「リキキキ!」

トガミのこうそくスピンはよけられる。

「ガメガメガァァァァ!」

だがさらに高速に回転し、こうそくスピンの勢いは高まる。

「リキッ!?」

「メノ?」

二匹の周りを回っているだけで攻撃をしているわけではない。

「コッコココココ」

二匹がトガミに集中している瞬間にシャドウが落下してくる。

· リキッ!」

される。 しかし気がついたワンリキー のからてチョップで当たる直前に落と

これによりほんの少しワンリキーはダメージを受けたようだが。

「ガ、ガメガ!?」

予定が崩れたトガミは急停止する。

「ゼ、ゼニガ!?」「メノォ!」

トガミはメノクラゲにしめつけられる。

「ガ、ガメェ」

. リキキ」

徐々に近づくワンリキー。

「ガ、ガメガ.....」

逃げたほうが大ダメージを受けるかもしれない。 こうそくスピンしようにもワンリキーが近すぎる。

「リキ?」

後ろから突然倒れているはずのシャドウの声がする。 ワンリキーは気になり振りかえってしまう。

゙ガ、ガメガ!」

その隙にこうそくスピンでしめつけるから脱出する。

「メノ!」

再び捕まえようとする。

「□オオオオオオ!」

『その時ふしぎな事が起こった』

シャドウは光に包まれた。

「リ、リキ!?」

シャドウに近づいていたワンリキーはうろたえる。

「ついに来たということか.....」

な、何が来たんですか?」

「進化だよ.....」

マサムネの言葉が終るとともにシャドウは巨大化していく。

「リ、リキィ!?」

「ガ、ガメガァ!?」

ワンリキーだけではない。トガミも驚く。

「ギャラアアアアアアアアア!」

進化したシャドウの姿はギャラドスだった。

その姿は普通のギャラドスではなかった.....

赤色と言うには遠い。

黒い.....黒い龍と言うべきだろう。

赤い模様が入っているのが凶悪さを強調させる。

「か、かっこよすぎます.....」

゙ああ、かっこよすぎる.....」

どこぞの黒い?5の元刑事人のセリフを二人は言っていた。

後篇に続く

自分は90年代ごろから見てます。

しないかもしれませんがご了承ください。少し更新が一時停止するかもしれません。そろそろ更新を毎日するのはやめます。

ニコニコの人気のない実況の続きをしたいので。

感想は募集中です。

233

ヮ゚ 「ギヤヤヤヤオオオオオ」 .... おっと。 お前の力を見せてやれ!」 かっこよすぎて見とれてしまった.....よし、 シャド

シャドウの口からはかえんほうしゃが放たれる。

「リキイイイイイ!」

る 体力が減っていたワンリキー はその火炎を受けたっていられず倒れ

「メノオオオ!」「ゼ、ゼニガア!」「メノオ!?」

驚くメノクラゲにトガミはたいあたりをする。

「ギャラアアア!」

トガミの方向に向けて飛んでいく。さらにシャドウの尻尾の部分で跳ね飛ばされ

゙ガメェガァ!」

つまりはきゅうしょ にあたった! トガミのアクアテー ルがメノクラゲにクリティカルヒット!

「メ、メノォ」

メノクラゲもその場に落ちて倒れる。

「あ、あ、ちょ、挑戦者の勝ち.....です.....

審判役の船員は目の前で起きた出来事を理解できなかった。

「勝てたか.....しかし。かっこよすぎる」

「ですねぇ!」

そう話しているとオーキド博士が近寄ってくる。

「なんとも珍しい色違いのギャラドス! 素晴らしいのぉ~」

オーキド博士は年甲斐にも泣く目をきらきらしている。

「ですよね。自分も色違いは始めてみましたよ」

マサムネは目上の人への一人称は自分だ。

「あれ、トガミどうしたの.....ってあれ!?」「ガメ.....メェ!」

進化のするようである。トガミの体も光っている。

ピキュイーン

カメー」

なんか色が変わって目つきが悪くなった感じですね」

カ カメル!?」

もう少し頼りのある感じになると思ってたのに」

ルウ!?」

トガミは膝をついて倒れた。

しかし珍し いのお」

ですね」

さらにシャドウに全員の興味が向きトガミにはだれも興味を示さな

カ カメルゥゥゥゥゥゥ!」

今回はシモンは出ていないので慰めることはなかった..... そして誰も見ぬところでトガミは泣き叫ぶことしかできなかった...

そういえばガイトがいないな」

もう帰っちゃったんですかね」

まぁ、 今日に出航だしな」

ガイトはもうすでに出発したのだろう。 サントアンヌ号を後にした。 そう思いマサムネ達はオーキドに別れの言葉をいい

#### 【その頃のガイト達】

「ガ、ガイトォ.....」「つ、うつ。ここは? 俺は.....」

「ユウミ? ッとなんだこれ.....」

体が亀甲縛りで縛られていた。

「あ、あいつらだよ。あいつらが.....」

「あいつが.....」

ガイトはある男の顔を思い出した。

一瞬だったが何かを感じだ。

「それにこの船もう出航したみたいだよ.....」

「なにっ!?」

ガイト、帰郷。

「というわけでシャドウとトガミが進化した」

「みんな仲良くね」

ポケモンセンターでシャドウを出すわけにはいかないので近くの広

場である。

「ギャラァ!」

「モグリュリュ~」「カメル」

「 リピ ....」

しかしサユキは何にも興味を示していない。何やら感想はそれぞれのようだ。

「ゴニョゴニョ」 「おじいさんが言うには?」 「しかしシャドウは.....博士が言うには.....」

それは二人には衝撃の事実であった

「ええっ! そ、それは!」

どうなる次回!

商品の存在を忘れていた。

#### 【サントアンヌ号】

船員がマサムネ達に話しかけてきた。トガミが叫びながらひざを突いているとき

「え~と。 君達が勝利したからこのくじを引いてくれるかな」

「ん、あ、ああ。そういう話だったっけ」

「すっかり忘れてましたね」

シャドウのことでそんなことをすっかり忘れていた。

「この箱の中から引いてね」

そう言って船員は箱を差し出す。

そしてその箱に開いている穴にマサムネは手を入れる。

「さて、何が出るやら.....」

ガサゴソ

「これか。結果は.....2等!」

おめでとう! こちら商品のひでんマシン01だよ」

「え? あ、どうも」

あまりうれしくはない。

では、私も」

#### ガサゴソ

「これは.....3等です!」

「凄いな君達は。こちら商品のかみなりのいしだよ」

どうも」

使うかは微妙だ。

終了! 二回目は一時間後に行われるのでよろしく!」 「と言うわけで、ダブルバトルイベント第一回目は白熱した戦いで

そうしてイベントは終わった。船員がそう叫ぶと叫び声があがった。

**本編に続く** 

感想募集中です。

# 【数日前:お月見山付近:ポケモンセンター】

「へぇへぇ……疲れたでござるよ」

「まぁ、そうだね」

何も持たずに歩いたカナデとでは疲れ方はだいぶ違う。 二人分の荷物を持ち歩き疲れるカナブと

今日はここに泊って明日にハナダでござるな」

「そうだね。君が速く歩けばだね」

「な、なら少しはもってくれてもいいでござるよ!」

「僕にそんな権利はないんだよ」

^ ろ、労働基準を守ってほしいでござる~!」

泣き叫ぶカナブを置いてカナデは宿泊申し込みに向かう。

「おや?」

カナデはだれかを見つける。

「あの、人は.....」

カナデの視線にいるのは....

ギャラアアアアア!」

゙カ、カメル.....」

そして横で凹みながらシモンに話しかけるトガミ。 シャドウが叫び、 それを見て叫ぶシモン。

リーダーです」 「クチバジムはですね。 今日は寝るとして明日はいよいよクチバジムだ」 間もなく引退するというキイガと言う人が

「ええ、今月を持って引退して交代らしいです」 「キイガ.....噂ではリーダーはマチスという元軍人だと.....

そう言ってクチバシティパンフレットを読むミズホ。

「かなりのご老体なんだろうな」

ええ、64歳で定年まで頑張っていたらしいですよ」

らしいじゃなくて今もな。65まで頑張るってか」

昔の若いころの写真と今の写真が貼ってある。 そう言ってパンフレットに書かれている写真を見る。

· いや.....」 ・どうしました?」

( どこかで見たことあるような顔だな..... ま、 気のせいだろう)

別段気にすることもなかった。 そう言ってマサムネは疑問をなかったこととした。

「朝か....」

マサムネはペットから起き上がろうとする..... しかし、お馴染のがんじがらめで起き上がることができない。

「……もう少し寝るかな……」

何年後かにはきっと自制心を抑えられなくなる。 マサムネはそう思った。

続く

## 裹第二十壊 ピンときたら 考えろ (後書き)

オリジナルジムリーダー.....

いったい何者なんだろうか.....

というわけで次回をお楽しみにです。

### ひなまつり..... 番外編じゃないよ! そして本編でもない (前書き)

アンケートでした。

今回作者さん書いてて突然変な気分になりました。

というわけで暴走開始。

#### ひなまつり... 番外編じゃないよ! そして本編でもない

自分にはひまなつり。 ひな祭りです。 ひな祭りですが

つまりは暇がないってことですね。

いや、笑えませんね。

そうですね。 はい。

感想が少なくてやる気でないですとかいう この頃は感想を多くの人にもらえてるのに

わがままな人が増えてきたものです。

ゆとり教育の弊害です!

かくいう私もゆとり教育世代だよ!

自分は頑張って生きているんだぁ~!

そのせいでゆとりゆとり言われんだよ!

と、そんなことを言いたいがために話を書いたわけではない。

アンケート。 アンケートですよ。

一つ目

この先何ですがね。

いやね、 パワプロクンポケット基準の全年齢対象で話書き続けていいですか? 自分的にはこのまま行きたいんですけど

まぁ、参考にするだけですが。どうかな、と思って。

二つ目

つまりは普通じゃない子を出しまくりでいいのかと。 シャドウ君のようなキャラを増やしていっていいか。

三つ目

長期で連載休止しているものが多いんですわ。 自分はポケモンの小説だけ連載してるわけではないんですね。

こっち止めてそっちに行ったりしてもよろしいですか?

一月ほど離れることになるでしょう。

四つ目

コラボって楽しいの?

てか、 コラボとかってどうやってやってるのさ。

すると世界観を共通させなくちゃ いけなくてむずくならない?

コラボ回は別世界なわけ?

それでいいならしたいなぁ。

でも壊すよ、 コラボ相手のキャラとか気にしないで設定だけで話作

るよ。

まぁ、 以前自分のキャラと性格が違いすぎるとか言われた経験ある

けど....

逆に使ってもらうとか言うのもあるのですかね?

五つ目

ドロドロしていい?

他にどういう要素が必要ですかね?いや、するけど

というわけで答えをお待ちしております。

### ひなまつり..... 番外編じゃないよ! そして本編でもない (後書き)

期間限定アンケート。

解答者が一人なら

たぶん意味ない.....

ああ、 わがまま言ってる人たちみたいになりたい.....

そして今回は題名のごとく

### 【クチバシティジム前】

「さてさて、歴年のベテランに俺たちは勝てるかな」

ふふ、私たちが負けるとでも?」

マサムネの言葉に笑いながら答えるミズホ。

「まぁ、そう答えるとは思っていたけど。さて行こうか」

そう言って二人はジムの中へと行く。

おやおや、挑戦者さんかの」

あんたがジムリーダー のキイガさんか」

目の前にいる老人がジムリーダーのキイガ。

歴年の風貌を見せる。

ああ、で、ここの対戦方法は?」

そうじゃの......引退までにダブルバトルというのをしたいと思っ

ておった.....それに」

「それに?」

「 今年はポケモンリー グ大会はダブルバトルを導入するようじゃし

な

「なんだって!」

# 知らなかったとは言えまさかタプルバトルも導入されていたとは。

「ど、どちらかにだけ!?」 「シングルかダブル。どちらかしか参加できぬようじゃしの」

「ダブルバトルに参加するにきまってます!」

ミズホの叫び声が響く。

「さぁ、私とマサムネさんとダブルバトルです!」

そう言ってミズホはボールを構える。

「よっしゃ! 「まだ話は終わってはおらぬが.....まぁよいかな」 ポケモンバトルだぜ!」

後半に続く

感想募集なりです。

アンケートの答えも待ってます。

### 【クチバシティジム】

では行くかの。 いでよマルマイン!」

マルマー!」

マルマル!」

マルマイン二体が登場した。

「ふおふおふお。 勝てる勝てないじゃない。戦うだけだ! スピード戦法についてこれるかの」 行 け ! シモン!」

ポシュウィン

「モグゥ!」

よし、 お前に出来ないことはないところを見せてやれ!」

「モグリュ!」

マサムネとシモンが燃え上がっていた。

「ピカチュ」

「じゃあ、カミコ。よろしくね」

ミズホとカミコはいつもどうりだった。

ジジジ」

高速で動き続けるマルマイン。

その高速の動きにシモンは付いていくことができない。

「ふふふ、属性がすべてと思わぬことだな」

不敵に笑うキイガ。

「モ、モグゥ~」

チュゥ.....」

カミコは何かを考えているようだ。

「シモンで楽勝かと思っていたがな..... しかしシモンに電気技は聞

かない。長期戦になるだろう」

「それはどうじゃろな。

マルマイン!」

「ジジジ」

「ジジジ」

ビュン!

「モグリュァ!?」

「ピカチュ!」

カミコはシモンを踏み台にしてよける。 シモンはソニッ クブー ムを食らう。

なんでシモンを踏み台にしたぁ

カミコは晩御飯抜きね」

驚きとまどうマサムネと冷静に罰を決めるミズホ。

ピカァチュ!」

シモンを踏み台にして飛び上がったカミコはかけぶんしんをする。

₹ マル!」

ママル」

一瞬それに片方のマルマインが驚いたが

もう一方のマルマインがなだめ、 再び元の動きに戻る。

チュ

チュ

チュ

チュ

かけぶんしんしたカミコは回るマルマインに向けてそれぞれ落ちて

マルー

₹ マル.....マルア

ٽے ! な なにんじゃ! かけぶんしんにぶつかってまひ状態になるな

ならばあのマルマインたちをまひ状態にしたカミコは何なのか。 本物のカミコは頭を押さえているシモンの横に着地しているのだ。

質量をもった残像とでも言うのか!」

残 像。 そう、かけぶんしんはそういうものだ!

だが、カミコのかけぶんしんは違う!

それぞれの分身にでんじはの電気が込められていたのだ! それによりかけぶんしんにぶつかったマルマインはマヒ状態となっ

てしまったのだ!

やろう」 「でんじはとかけぶんしんの合わせ技とはな。 仕方ないから許して

「でも別に晩御飯は豪華にしないからね」

トレーナー二人は冷静を取り戻した。

そもそもミズホは冷静だ。

「モ、モグリュ!」

ピピピ」

「モ、モモモ! モグリュ!」

踏み台にしたことを怒っていたがカミコに現状を説明され落ち着く。

゙モォォォオグリュ!」

シモンはマルマインめがけて攻撃をする。

マルマインはマヒして高速に動けない。

シモンはつめとぎをしながらマルマインに向かいきりさく攻撃!

「マルマァァァ!」

「マ、マル!」

「モグリュァ!」

マルゥゥゥ!」

# 動けないマルマインたちは速攻でシモンにより始末された.....

「まさかこうなるとは思わなんだよ」

「俺もいろいろ予想外だったけど.....」

まぁ、 とりあえずこのパッジを受け取るがよい」

そしてマサムネ達はパッジを受け取る。

「最後の試合。楽しかったぞ」

「ジムリーダーとしてだろ。 あんたのトレー 人生は終わってな

いよ

「そうですよ」

「ほっ。うれしいことを言ってくれるの」

キイガは少し笑う。

「じゃぁな、キイガさん。またいつか戦おう」

「またです~ .

そう言って二人はジムを去った。

もう一度か。まだまだ頑張れるかの.....」

ガシュ

おや? 誰か来たのかの? もう今日は挑戦を受けて」

ザガシュ ビヂョァ

- な……」

「勝ちましたね。次はどこに行くんですか」

次はとりあえずシオンタウンだ」

「シオンタウン?」

ああ、タマムシシティに行くための通過点としてな!」

その時何かがあったことを知らずに..... そう言って二人はポケモンセンターへと帰って行った。

続く

## 第二一 壊・2 なんとぉぉぉぉぉおぉ! (後書き)

アンケートの答えも待ってますよ~

後よければ聞いてください。

http://www ·nicovideo ·jp/watch/

音量にご注意ください。

# 裏第二一回(かかわることはないかかわること)

### 【ポケモンセンター】

「と言うわけで。 でもここにカビゴンが寝ていて通れないとあります」 シオンタウンにはこの橋を通って上に行くんだ」

「ふふふ、心配は要らないぞ。これを見よ!」

マサムネが取り出したのは折りたたみ式の簡易ボートである。

「寝ている横からボートで行けばいい。 深いから泳いではいけない

がこれならいける」

「さっすがマサムネさんです!」

いつもの如くきゃっきゃと喜ぶミズホ。

「カ、カメル?」

「モグリュ」

「カ、カメ!?」

「モグリュ」

「カ、カメルー!」

一匹はいつもと変わらなかった。

クチバシティでは事件が起こっていた。その後二人はシオンタウンに向かった後

『ジムには血痕が発見された模様』 『まもなく定年退職寸前と言うところでの事件!』 『 クチバシティ ジムリー ダー キイガ 行方不明!』

だが、 そう。 二人はこの事件にはかかわらないだろう。 着々と何かが進んでいる.....

続 く

#### 第|||壊 はい、 温もった! ついでに俺も温もった!

「簡易のボートですけどねぇ」「いやぁ、船はいいなぁ」

のんびりとボートに乗っている二人。横に橋をふさいでいるカビゴンを見ながら

「ボーッとしているってのはいいですね」

「うまいこというね~」

そんな二人はボートをこいではいない。 寒いシャレすら笑いに変えてのんびりとしている二人。

「カメカメカメカメカメ!」

ボートの動力はトガミだ。

「のんびりだ~」

のんびりです」

「 カ、カメールゥゥゥゥ!」

「さて、ついたついた」

「ご苦労様トガミ」

「 カ、 カメ.....」

トガミは睨んだ表情で二人を見ている。

仕方ないですよね。 シャドウが使えればよかったんだが、 おじいさんの言うとうりなら」 無理だしな」

そう。 ボートなど入らないだろう。 その疑問は読者諸君の心に残るだろう。 そもそもギャ ラドスであるシャドウがい ならばなぜ? れば

「そうだ、 力メ? カメ」 トガミ。 このアメをやるよ」

そう言ってマサムネから受け取ったアメを食べるトガミ。

カ<sub>、</sub> カメカ!」

体に力がみなぎる。 レベルがアップしたようだ!

すね 「マサムネさんのお父さんはいろいろな物を持ってらっしゃるんで ふしぎなアメだったんだがな。 親父からの贈り物の一つだが」

「確かにいろいろだな」

そう言って背中にしまっている父親からの贈り物を見るマサムネ。

( 開発 ...か.....そういやミズホちゃんの親って.....)

昔遊びに来ていたときもオーキド博士の助手と来ていたはずだ。 そう言えば母親のヨー コと知り合いだというのは知っているが 一度も顔を見たことがないし話したこともない。

そう言えば、 ミズホちゃんのお父さんって....

.....

「あ、いや」

突然場の空気が悪くなってしまった。

だ。 (確か、 確かに母親からの贈り物などがあったときにこうなっていたはず マサラから旅立つときにもこういう感じになったことが....

にオーキド博士言っていたはずだ) 確か棒読みのような感じで流すように母親へのお礼を伝えるよう

親と何かあったんだと、マサムネは思った。

. お父さんとお母さんは多分今はホウエンです」

「え、ホウエン?」

お父さんはおじいさんの子供です。 ホウエンのオダマキ博士の助

手になりに行ったんです」

「ミズホちゃんをおいて?」

「昔からですよ、そんな事」

そう言ってミズホは何も言わなくなりシオンタウンのほうへ歩いて

いった。

いつもらしさはどこにもない。

(なんとなく聞いただけなのに....やってしまったな)

そう言ってマサムネはミズホに向かい走る。

いや、温もりの少ないミズホちゃんを温めようとね」 ほえ!? な、 なんなんです!」

マサムネはそう言ってミズホを強く抱きしめる。

「はっはは。じゃ、行こうか」「にゃ、にゃにゃー!?」

そう言って離れたマサムネはシオンタウンに向かって走る。

「あつ、 してくれないくせにー!」 あっ! ずるいんですよ~! こっちからするときは何も

二人の旅はまだまだ続く!!そう言ってミズホもマサムネを追いかける。

続くったら続く!

こういう話は楽しく書ける。 ノリノリで書いていた。

### 第二三壊・1 謎発見!

### 【シオンタウン】

「なんか暗いな.....」

「ポケモンタワーがあるからじゃないですかね」

大きく聳え立つ塔。

ポケモンのお墓ポケモンタワーである。

「でかいなぁ」

「ですよねぇ」

顔をあげて見上げる二人。

「ほっほほ。ポケモンの供養にはまだものたりん位じゃ」

とづぜんの声。

後ろを振り向くと一人の老人がいた。

わしの名前はフジ。このポケモンハウスの理事じゃ」

後ろにある建物。

どうやらポケモンの孤児院のような物らしい。

「あれ? あなたはおじいさんの知り合いの」

おや? ユキナリのお孫さんかの。 大きくなったの~」

ユキナリとはオーキド博士の名前だ。

# ポケモンでフルネームがわかる人は珍しい。

「して、隣の男の子は誰じゃの?」

「恋人です」

「まぁ、そうです。はい」

「ほぉ。この頃の子供というのはのぉ~」

まぁそう言う事なのだろう。この頃というのはどういう事か。

「カラぁ~」

「ガラガラ~」

近くで元気よくガラガラとカラカラが遊んでいる。

「おお、 あの二匹は親子での。父親は病気で死んでしまっての。

のからからのかぶっとる骨は父親のものじゃ」

「ああ、 カラカラは親の骨を被るといいますからね

「成長してどうやったらガラガラみたいになるかは分からないです

けど」

「まぁ、それは学界でも謎のままじゃ」

「フジさんは博士だったんですか?」

む ? さな ユキナリから聞いたのじゃよ」

少したじろぎながらしゃべるフジ。

否定の言葉を発するが肯定しているようなものだ。

シオンタウンは特に何もすることがないしなぁ

ならポケモンタワー の最上階にでも行かんか?」

あ

## フジが二人に話しかけてきた。

最上階にですか?」

ああ、不思議な石碑があっての」

不思議な.....」

マサムネは少しわくわくする。

なのじゃが」 「どうもだれにも動かすことができなくての。 下に何かがありそう

「下の階から何もできないんですかそれ」

「うむ。なんとも不思議での」

(不思議ってものじゃないな。神秘だ.....)

マサムネはその石碑にかなりの興味を感じた。

「行きましょう。最上階に!」

おお、マサムネさんノリノリです!」

よう 「そこまで興味が出るとはの。 では今日は遅いから明日に行くとし

らった。 そして二人はそれに甘えることとなり、 そう言ってフジは今日はうちに泊まるように言った。 空き部屋に泊まらさせても

ランキング始めました。感想は随時募集。

### 【そして次の日】

「朝ですよ。朝ですよ!」

「わ、わかったから。揺らさないで.....」

さすがに今回はフジがのぞきに来る可能性もあるので一緒にはねて

いない。

同じ部屋だがペットは別だ。

では、おはようのキスを」

突然何を」

私のマサムネさん成分が一緒に寝なかったことで不足しているん

ですよ!」

ミズホはその場にぴょんぴょんとぶ。

ぶんぶん揺れてるがマサムネはなれてしまった。

なれというのは恐ろしいものである。

' とりあえず着替えてくる」

一緒に着替えましょう!」

成分不足してるから? いつもはしないのに..

ですからつ.....ふえっ!?」

マサムネはミズホをぎゅっと抱きしめる。

成分補給。できたよな」

へ、へう~」

# ミズホは顔を赤くしてくるくる回っている。

「んじゃ、着替えに行きますか」

なれというのはこういうものだ。

· おはようございます。フジさん」

おお、 おはよう。......おや? ミズホちゃんはどうしたのじゃ」

ああ、もう少ししたら来ますよ」

「何かあったかの? 何かあったのかの?」

この老人。

昨日のいいかからもわかるが

年を考えてほしいものである。

別に何もないですよ。とりあえずご飯にしましょうよ」

そうかの。ならそこに用意があるでの」

和 食。

この世界で和食と言うのが正しいのかどうかわからないが

和食が置いてある。

味噌汁に焼きジャケに納豆、 海苔と.. .. あれ、 これパンじ

ゃないですか?」

「いいじゃろ、別にパンでも」

「いや、ふつうはご飯でしょ」

「別にパンでも食えることは食える」

### 少しにらみ合う二人。

「ミズホちゃん。起きたのか」「お、おはようございます!」

しし

そしてミズホはテーブルに着く。

「おいしそうですね。 いただきます」

パクパクと置かれていた食事を食べる。

「うむ。いいのじゃ」「……まぁ、いいか」

そう言ってマサムネも席に着き置かれた食事を食べる。

「さて、そろそろ行くかの」

っ い こ

レッッゴー です」

そうして一行はポケモンタワーへと向かう。

#### 後半に続く

### 第二三壊・2 謎 ! いや、朝ごはんでそれは謎! (後書き)

そもそも元ネタとはほど遠い内容だが。 元ネタを知る人は少なかろうて。

休刊するまで私は購読してました。 ところで皆さんはコミックボンボン購読されてましたか?

感想は随時募集です。

### 【ポケモンタワー】

「なんか予想よりも明るいですね」

一応人が来る墓じゃからのう。少しは明るくないとの」

予想より明るいといっても少し薄暗い。

何かが出てきても不思議はない。

「ふふふ なんだかお化けでも出てきそうですね~」

「そうだね。怖い?」

「別にです。 怖がらなくてもいつも抱きついてますから。 怖がる必

要はないです」

「..... そうかい」

二人はいつも道理である。

そしてフジの後をついて歩く。

「人気がなくなってきましたよ.....」

頂上に行くものは少ないからのす」

上に行くたびに人がいなくなっている。

「ゴスゴス」

うん。

薄気味悪い感じですね」

## どこからか何か聞こえた。

「ん? 何か言いましたか?」

「いや、俺は何も」

、なら.....」

「いや、わしでもない」

ならいったい.....」

ミズホがくるっと振り向くと....

「ゴースト!」

「うわぁおっ!」

突然ゴーストが現れた。

ずが変に混ざった味が口に広がったじゃないですか!」「うぉっぷ……いきなり出てくるから驚いて朝ごはんのパンとおか

「我慢してたんだ.....」

朝ごはんを何も言わず食っていたがどうやら無理していたようだ。

「許すまじ、ゴースト!」

「ミ、ミズホちゃん?」

ミズホは暴走している。

うぉぉぉぉ! 出でこいトガミに、カミコ!」

ボシゥウン

「殺ってしまえ!」

「カ、カメ!?」

「ピ、ピか?!」

そしてそれを驚きながら見守るマサムネ。ミズホの突然の言葉に戸惑う二匹。

「ゴース?」

「ええい! 私たちを見て笑っている! いいから速く殺る!」

ゴーストポケモンを殺るってどうやるんだろ.....」

マサムネは疑問が生まれた。

「ええい! トガミはみずのはどう! カミコは10まんポルト!」

「カ、カメ! カアアアアメエエエエエエ!」

「ピイイイカアアアアアアアアアア!」

||匹の技が融合し爆発的な力になりゴーストに直撃する。

「ゴオオオオス!」

まだ殺られてないですか!」

ミズホはかなり怒っている。

「ミズホちゃんが壊れた原因は朝ごはんのせいですよ。 フジさん」

ゎ わしのせいじゃなかろう! ゴーストのせいじゃ

そして横では再び起きる朝ごはん論争。

うぉぉぉぉお! むかつくでええええす!」

ミズホはその場にあるものをゴーストに投げつけた。

「ゴス!?」

ポシュン

「ほへ?」

ミズホが投げたのはモンスターボールだ。

怒っていたときに腰から一つ落ちたのだ。

「ほ、捕獲に成功しちゃた!?」

゙ありゃまぁってやつだ.....」

ほんとにのう.....

#### 【最上階】

くううう。 こき使ってやるです!」

いや、ゴーストはあまり悪くは.....」

むぅ。 考えてみれば頭に血が上ってかもしれません.....」

落ち着きを見せ始めるミズホ。

「そうそう。ちゃんと仲間として扱ってあげるべきだ」

「はい。そうしますです」

'仲良き所すまんがの。ついたぞ」

どうやらフジの近くにあるのが例の石板のようだ。 確かに動かせるようになっているように見える。 フジが話しかけてきた。

前にも言ったが何をしても動かぬのじゃ」 これは動かせるか確かめたんですよね?」 そうですか」

そう言って石板にそっと触れるマサムネ。

「どうしたです?」 ん? ! いや.....ん?」

見たことのない文字だ。 事実読めない。 石碑には文字が書かれている。

しかし見たことがある。

「この文字.....ん? ああ、 ..... はめるものか。 何かをはめるように見えるがの。 これとかだったりして」 石板に穴が」 はめるものが見つからん

マサムネがとりだすのは父親から送られてきたドリル型の首飾り。

そう? あれ? ならはめてみちゃおうかなぁ~~」 ちょうどよさげじゃないですか?」

カチッ

「あれ、はまった.....」

. でも何も起きませんね」

やっぱり偶然はまっただけか」

そう言って穴から取り出そうとする。

「ふぇ? て、手伝いますよ!!」「んっ? んっ?! 抜けない!」

そんな時。
二人で一所懸命に取ろうとする。

グルッ

ドリルの部分が回転した。

ウィィィイイィィィィン!

「え、な、何?」

な、何です?」

ウィィイイイイイイイン!

「うわぁぁぁあぁぁぁゎ!」」

二人が光に包まれた。

## 第二三壊・3 暴走理由は和食にパン! (後書き)

わくわくします?

100円でテイルズオブディ スティー 買えたので

わくわくしてますよ私は。

遣ったことないのでシンフォニアも売ってたので490円で買いま

したよ。

新スーパーロボット大戦を買って

サモンナイト2とトゥルーラブストーリー2と

全部込めて940円でした。

後電撃プレイステーションも買って

500円ぐらいしましたが。

これ後書きじゃなくて近況報告じゃね?

#### キャラクター 紹介 (第一部版 中盤) (前書き)

第一部 (中盤時) でのキャラ紹介です

## キャラクター紹介 (第一部版 中盤)

流される男

マサムネ (15) CV:緑川光(仮) 出身:イッシュ

ご存じ主人公。

ニビにてミズホに告白されてから主導権を奪われている節がある。

年上に対しては一部を除いて敬語で話す。

和食が好きでありパンが好きではない。

やる時はやる男であり、ギャルゲーで鍛えた力でミズホの好感度を

上げる。

戦いのときには感情を抑えることができなくなる。

そのためちょっとしたことで切れる。

相棒

シモン (モグリュー ) CV:柿原徹也

マサムネの相棒と言うよりトガミの相方と言えるようになってきて

いる。

一応はミズホのメンバーとも合わせ一番強い。

サユキ (チュリネ ) CV:丹下 桜

マサムネ以外に気を許そうとしていない。

しかしシモンには少し気を許しているようである

通常より凶悪性を増しているように見える。 黒い体に赤い模様のギャラドス。 オーキド博士によると珍しい突然変異体らしい。

自称健気な女の子

ミズホ (11) CV:桑島 法子 出身:カントー

身長144cm B 8 5 (H) W 4 8 H 8 0

なお、 さらに何があってもマサムネがすることは悪くないと思っている。 マサムネ絶対主義者となりマサムネのいうことを疑わない。 マサムネに告白したのち妄想癖がさらに悪化した。 怒るとマサムネ以上に手をつけられない。

相棒

トガミ (カメール ) CV:阿部 敦

特にこれ以上書くこともない。登場回数は多いが扱いがあまりにもよくない。

#### カミコ (ピカチュウ CV:佐藤 利奈

普通のピカチュウではできないことができるらしい。 るようだ。 かげぶんしんにでんじはの電気を込められるなど トガミは緊急時でもなければ顔を合わせるたびに電気を浴びせてい

リュボ (ゴースト ) CV:玄田哲章

バトル時以外は勝手に行動する。 彼はただ驚かせてその反応を見たいだけであった。 ミズホの暴走により捕まえられた。

かませ犬じゃない!

アサノブ (13) CV:ヤスヒロ 出身:不明

別に弱いわけでもない。扱いがあまりにも使い捨てであったが。

感想は募集してるんですよ?

してますからね!

「目が覚めたかい?」 「う、うう.....何だったんだあの光は.....」

突然誰かに話しかけられたマサム

え ?

だ、

誰…」

そして声の方向がした方を向いた。それはミズホでもフジでもない。突然誰かに話しかけられたマサムネ。

お袋? お袋?」 私は娘はいるけど息子はいないわよ」

その女性はマサムネの母親であるヨーコに似ていた。

一緒にいた女の子なら横のペットよ」 人違いのようです.....って、ここは? ミズホちゃ んは!?」

隣のベットでミズホがすやすやと眠っている。

え? ふ む :: フジさんなんてシオンにはいないし、 それで俺たちはフジさんとポケモンタワーに.....」 倒れていたのよ。 フジさん? それにポケモンタワーは現在立ち入り禁止よ 確かにシオンタウンよ。 気絶していた? : で そんな..... 俺は確かにポケモンハウスからフジさんと. 俺たちはいったい.....」 というかここはシオンタウンで」 家の近くでね」 記憶は確かのようね」 ポケモンハウスなんかない

ない?」

マサムネは少し顔をしかめる。

「そう。ないの」

「..... まさかここは.....」

現実では起こりえないと思っていた出来事だ。 マサムネはこういう状況になる状況を知っている。

(過去....だということか!)

その手のゲームはやりつくした感があるのでわかる。

しかしリアルだ。

ゲームじゃないリアル.....

(リアル? 現 実 ? 仮想? そうなると俺は.....)

「う、うん……」

ミズホちゃん!目が覚めたか」

゙ はにゃ。 マサムネひゃん.....

ミズホは寝ぼけている。

(**\$**, 現状はミズホちゃんとの間だけの秘密にしておくべきだな...

:

「二人で話がしたいので二人きりにしてもらえませんか?」 いいわよ

本当なんて誰も知らない。

「過去です?」

「そう過去」

「なるほど、過去ですか」

予想道理にすんなり受け入れてる感じだね」

· はい。マサムネさんのいうことですから」

「そういうと思っていた」

もはや二人に疑いというものはない。

しかしどうすれば元の時間に戻れるんでしょう」

そりゃポケモンタワーの頂上の石碑に行けばいいんだ」

「ですね」

そうとわかればさっそくと出発の準備を始めるミズホ。

あ、そう言やぁポケモンタワーは現在立ち入り禁止なんだっけか」

「ふぇ? それじゃあ戻れないのでは!?」

そうだな..... ふむ.....」

コンコン

「もういいかしら」

ドアの外から声が聞こえる。

あ、はい」

「ええまぁ」 どう。 今の状況については整理できたかしら」

5

「まぁ~」

「ま?」

女性の声とほかに何かの声がする。

ああ、私の娘よ。ヨーコっていうの」

マサムネの母親と同じ名前だ。

「ええ、かわいいでしょ」

「ええ.....そう言えば旦那さんは何をしているんです?」

マサムネはここまで来て偶然じゃないと思った。

気になったのだ。

「 え ? なんだろうね。 初めて会った子に言うことじゃないかもし

れないけど、私は旦那はいないの」

「え?」

「いないと言うことはシングルマザーなのですね」

いない。

母の母、 そう言えば母は父親を知らないと言っていた。 イッシュには母親が死んでから引っ越したという。 祖母も病気で死んでいて会ったことがない。

## (偶然で収まるのか?)

この子の父親はね、 イッ シュ地方に住んでるんだ」

「イッシュ……」

「親の都合で私だけこっちに引っ越したの」

「それって……」

「ふっ。 彼とも引っ越してから連絡がつかなくなったし、 彼もこの

子の事は知らないわ」

普通人に言うことではないだろうことをマサムネに言う女性。

「そう言えばあなた。彼に似ているわ」

「俺が似ている?」

、そう。瓜二つよ」

マサムネの背筋が凍る。

マサムネの父親とマサムネは瓜二つ。

それは昔からよく言われていたことだ。

あなたの..... 名前は?」

. 私?私の名前は.....」

それで、ポケモンタワーにはいつごろ入れるように?」

入口の整備が終わってからかな。 少しは前に崩れてね」

「それはいつごろに?」

四日後位かな......そう言えば明日はタマムシにデパー パレードをやるらしいから行ってみれば?」 トができる

「パレードですか。楽しそうですね」

ああ、そうだな……行ってみようか」

「です」

今回の出来事がいや、出会いが何を意味したのか。 女性にはお礼の言葉を述べ、シオンタウンを後にした。 マサムネ達は用意をしてタマムシに向かった。

わかってはたまるか!そんなもの誰がわかるか!

答えなんて誰も知らない。

続く

ふ ふ ふ

305

# そう言えばあの二人ってあの後どうなったん?

ため!」 「ふふふ あのさぁ 知らない新天地! ...... なんでジョウトに行くわけ?」 知らないポケモン! それを求める

「ああ、そういうわけか...

いや、出ようとしている。今は真の強さを求めるために旅に出ている。ハナダジムとニビジムの門下生である。彼らはコズエとトシカズ。

きなさい」 「なんか軽い感じでカントーと当分お別れか。 修行と言うのはそういうものなの。 サントアンヌ号出発後にジョウト行きの定期船が出るらしい さあこのチケットを持ってお せつなくなるなー」

そう言ってコズエはトシカズにチケットを渡す。

定期船用乗車チケット.....これ安売りじゃないか」

「いいじゃないの。行き分だけよ」

「帰りはどうすんだよ.....」

いいのよ別に! 向こうでチャンピョンにでもなりゃ

「修行に行くだけだろ.....」

タケシという存在がいたからこそのあのキャ コズエの前ではこんな少年なのである。 コズエのやる気にトシカズは答えられない。 ラだが

「へいへい」 「あら、どうやら定期船がきたみたいね。 行くわよ!」

二人の旅は始まる......

行先はホウエンである定期船に乗って。

本編に続く

# 番外編 そう言えばあの二人ってあの後どうなったん? (後書き)

なんかやってほしい番外編があれば。

ただしガイトとユウミの番外編は駄目ですご了承ください。

#### 第二五壊 ミ、ミズホちゃん?

## 【タマムシシティへの地下通路】

パレード

「 ははっ。 嬉しそうだね」

「まぁ、過去っていうわけですから現代のようなものは求めません

けどね」

ミズホはくるくると回りながら出口へと向かう。

ははつ。ミズホちゃんは元気だなぁ~」

いつも道理のミズホを見てマサムネはほほ笑む。

「早く行きましょう!」

そう言ってミズホに手をひかれる。

「うおっと。ひっぱらなくても行くってば~!」

いつも道理である。

ははっ。 ミズホちゃんは元気だなぁ~」

いつも道理.....

## 【タマムシシティ】

「へぇ。古い街並みだなぁ」

現代に比べればですけどね。今からすれば最新です」

はっきり言って現代のマサラよりは近代的である。

「そう言えばお金とカ大丈夫なんですかね」

安心しろ。この時代も今と変わりないようだから」

そもそも百年単位で変わっていない。

「あっ。 あっちで何かイベントやってますよ」

「うぉっと……」

マサムネは引きずられてイベントが行われ方へ行った。

**゙**って、ここはタマムシジム?」

ほえ~タマムシジムでイベントですか~」

その通り! 草タイプ専門ジム。タマムシジムにようこそ!」

突然男の声が響く。

この俺がジムのジムリーダートラスケだ。 よろしく頼むぜ」

そして同じくその娘のウリカです」

突如現れたのはジムリーダー親子であった。

トだぜ」 この俺と勝負して勝てれれば豪華景品とパッチをプレゼ

お父様。 もう少しジムリーダーとしてちゃんとした言葉づかい を

....

ろうが!」 うっせぇ ! 女ばかりの家系で唯一の男の俺が何したってい いだ

「屁理屈です!」

んだろ子のジムはぁ!」 「じゃかしぃわ! お前らがくどくど言うから俺以外男がいねぇえ

思いますが」 「だからと言ってお母様が違う娘が何人もいるというのはどうかと

だなぁ 「あ、人前でそんなことを.....でもイリもそれついては認めていて

「そもそも妻公認の浮気と言うのがおかしいのです!」

あらわれて二人に説明をしようとしていただけなのに. マサムネ達の前では大変なケンカが起こってい

「あの、イベント.....」

おおう! なんか恥ずかしいことを..... あ 今の内密にね」

「 な、 内密にですよ.....」

ジムリーダー親は恥ずかしそうだ。

公認浮気とか言ってたような気がするですが...

「内密にィいい! これあげるから!」

「これ、ジムパッチですよ」

「いいからもってけ!」

「そして内密に!」

そう言っ てジムリー ダ 親子はジムに走って帰った。

「え?」

「なんですこれ?」

「もらっても現代じゃ使えないんだよなぁ.....」

ならジムに行きましょう」

「え?」

「何言ってるんです。 こっちが上なんですから.....ふふっ」

「おぉう.....」

ミズホの笑顔にマサムネは恐怖を覚えた.....

## 第二六壊・1 ミズホちゃん.....(前書き)

別に規定人数超えてもいいのですよ~感想くれるいい人を後四人くらい募集中~感想は募集していますのです。

## 第二六壊・1 ミズホちゃん.....

#### 【タマムシジム】

「たのもォですよォ~」

いらっしゃ.....ひいい!」

ミズホの笑い顔を見てウリカは怖くなり逃げた。

「ミ、ミズホちゃん?」

「なアんでエすかぁ~」

いや、なんかいつもと違う感じが.....」

マサムネも少したじろぐ。

ふふふ。さぁて、ジムリーダーさんはあちらかなぁ~」

「ミ、ミズホちゃ~ん。お帰りくださいー!」

### マサムネも壊れた。

ウリカが走って逃げてきましたが. 誰ですかあなたは」

「そういうあなたは何ですかァ~」

「私はそう。友人のエリノです」

「なるほど、異母姉妹ですか」

のお。 な 何を言ってるんですかお姉さん

ぶ ぶ ぶ。 やはり一桁の女の子は隠し事が苦手ですねぇ~」

どうやらミズホはマサムネや目上の人以外に対してはSのようだ。

壊さないでください~」 ってるんですよ。 「う、うう......それで何が望みなんですか......わ、 あなたのお父さんが多数の女と子供を作ってるというネタは上が ふ ふ ふ。 それでお父さんにようがあるのです」 私たちの幸せを

エリノは泣き叫んでいる。

「ふふ。かわいい子ですねぇ~」

向に進んでるような.....」 ..... とりあえずジムリーダーの所行こうか。 なんか話が大変な方

「それもそうですね(早く行きましょうか!」

そして、ジムの奥の部屋へと向かう......マサムネが話しかけるといつもの様子に戻る。

「うわぁぁぁぁあぁぁぁん!」

これは完璧に自分たちは悪者だと。 というか脅すということは悪だというのはあたりまえである。 マサムネは後ろから聞こえる鳴き声がすごく気になっている。

h 「さぁて、 出てきてださいですよぉ~」 イベントほっぽり出してジムの奥にいるジムリー ダーさ

ジムリー ダー の部屋と書かれた扉をノックしながらしゃべるミズホ。

なぁ、 ミズホちゃ h 所でさ、 何をするつもりなの? お金とか

困ってないよね.....」

「え、そう言えばそうですね.....どうしましょうか?」

「え?」

「いや、なにかその、脅さないといけないかなぁと思っちゃいまし

7

「ミズホちゃ~んー!」

マサムネはただ泣きそうな顔で叫ぶしかなかった.....

後半へ続く

感想は大人数の人募集中!

## 第二六壊・2 なんかいいわ!

と言うわけでですねぇ~このパッチはお返ししますぅ~」

そうミズホが言うが.....

「そ、そんな。どうしても世間に公表する気なんですね.....」

「いや~そうではなくですねぇ~」

「びえええええええええ!」

ウリカは絶望した顔で。

エリノは泣き続けている。

全く話を聞いていない

「まったく。話を聞かない子たちですね.....

誤解は深まるままだよミズホちゃん」

とりあえずパッチを返そうと思ったのだが

一向に父親であるトラスケは姿を現さない。

「どうすればいいんだ.....」

泣き声が聞こえると思えば何台あんたたち二人は!」

また女の子が走ってきた。

なんですかァ~また異母姉妹ですかァ~めんどくさいですゥ

おっ おっおおぉぉ!? な なんでしってるんだぁ

隠そうとする気もないですねこのお子ちゃまは」

## そしてたじろぐ女の子。

く ふ ふ。 とりあえずお父さん読んでもらえますかァ~」

ゆ、許してくれ! 私がすべて背負うから!」

「……いや、君。その……ね?」

「わかった! まだ 歳だけど別にこの.....」

それ以上は言わんでいい! 言わんでいいのよ!」

マサムネはこんらんしている!

「さっさと父親を呼べと言ってるのですよぉ

ミズホのトラスケの呼び方が安定しない。

許してください! 許してください!」

びええええええええええええええ

「あわ、あわわ.....」

トラスケの娘3人は三者三様の表情をしている。

何この状況.....誰か説明してくれよお

そんなことを言っても誰も説明してくれない。

「ハァハァ。お前ら、娘に何を……」

ジムリー ダー トラスケ。 の部屋からではなく、 階段からどたどたと降りてきた

いや、本当になにも.....

```
ち
もういいかげんにしろやぁぁああぁぁぁぁぁ
                                            やめてえ!
                             ちちうえぉ いじめえ にゃいでぇ~!」
              お父様!
                                           親父には何もしないでぇ~」
              私たちでどうにかしま.....
```

マサムネの叫びですべてが止まった。

「わ、わたくしが怖がったせいで.....」「そ、そうだったのですか」「ご、誤解しちまったじゃねぇかよ」「ああ、なんだ。そういうことだったのか」

やっとの事で誤解が収まった。

「まったく。 君が言うなっ」 勝手に誤解してくれちゃって困ったものです」

バシィッ!

マサムネはミズホの頭を叩く。

**ありがとうございます!」** 

ミズホは凄いことを叫んだ。

· · · · · ·

バシィッー

ありがとうございまぁぁぁぁぁす!」

マサムネは気持ちよさそうだ。

はっ あのぉ... Ļ と言うわけでこれお返しします。 じゃ、 これでえ~

マサムネは部屋から走って去って行った。

す ! あの二人が父上の事をしゃべらないとは限らない。 追跡しま

「あたしもそうする!」

そう言ってエリノと三人目の娘エカミはマサムネ達の後を追った。

ええ~! いいから帰るの!」 へぇへぇ.....とりあえずシオンに戻ろう」 パレードに何も参加してないですよ~」

ちなみにシオンからタマムシまでは往復で三日かかる。 なので帰ればポケモンタワーに入れるはずだ。

と言うわけで。帰る!」

そう言ってミズホを背中に乗せてシオンタウンへ向かった。

### 裹第二六壊 これから起こりうる何か (前書き)

活動報告にも書いたがショッキングな事が多すぎる.....

すべてはあの日から始まった.....

スパロボのPV公開も中止になるし.....

俺は何を楽しみにしながら小説を書けばいいのだぁぁぁぁー

あら、久しぶりね」

゙ええ、お久しぶりです.....

マサムネ達は再びあの女性に出会った。

5日ぶりかしらね。どうだったパレード。 楽しかった?」

「え、ええ。楽しかったでふ」

「でふ? 何かあった?」

`い、いえいえいえいえ! 何も何も何も!」

そんな反応すれば誰にでも何かあったということがもろばれである。

「ところでですね~ポケモンタワーには入れるようになったです?」

「ええ、工事が終って入れるようにはなってるわよ」

「そうですか~ではマサムネさん。早速いくですー!」

そう言ってマサムネの手をつかみポケモンタワー て行った。 へとミズホは走っ

「なんでお墓に急いでるのかしら.....」

「おっ。 どうしたどうした?」

「あら兄さん」

「なんかあったみてぇだが.....どうした?」

ええ、 男の子と女の子が急ぐようにポケモンタワーに」

「ほぉ.....」

女性の兄はニヤリと笑う。

「」と、意を呼り言いら、

「ん? 俺を呼んだか? 父さん」

女性の兄は息子を呼んだ。

「ああ、 すぐに旅支度をしる。 まぁここにおおよそは用意してある

がな」

「はぁ? いきなりなんだ父さん」

息子は疑問そうな顔をして父親に問う。

「螺旋の導きってやつだよ」

「螺旋の.....父さん。それって.....」

息子は何かを理解した。

へへっ。楽しくなってきやがったぜ.....まだ予測だがよ.....」

な、なになに? どういうことなの?」

女性のその言葉に兄はニヤリと笑う。

俺たちは当分家をあけるぜ。 親父とお袋の事はたのんだ」

え?ど、どういうこと?」

なに、 親父たちに螺旋の導きが来たって伝えろ。 それで伝わる」

そう言うと兄は急いで準備に取り掛かった。

だあいつにも見せたかったぜ」 「ポケモンタワーに急ぐ理由。 それは最上階の石碑..... へつ。 死ん

その言葉は女性には聞こえていなかった。

#### 【一方その頃】

勢い余ってシオンタウンまで追いかけてしまいました」 なんか食料が尽きそうなんだけどなぁ。 もうそろそろやめない?」

タマムシから追いかけてきたトラスケの娘のエリノとエカミ。

すが、ここは町なのですよ?」 「しかし、ここまで町がなかったから言いふらすこともなかったで

「でもよぉ.....おや? なんか誰かと会話してるぞ?」

「なんですとっ!」

「って。突然走ってどこかに行ったぞ」

'追いかけましょう!」

そう言って二人はポケモンタワーに向かった。

### 裹第二六壊 これから起こりうる何か (後書き)

いいか、二択ですよ?所でみんな、ジョウトとホウエンのどっちが好きですか?

お気に入りに登録している人たちは答えてくださいよ.....

何のための登録だぁぁぁぁぁ!

## 第二七壊 じゃ、せかされてるし。さしちゃおうか! (前書き)

感想はまってますよ。

喜んだり悲しんだり辛いですね.....にしてもいろいろな情報があって

「さ、最上階か.....」

そうですね~。 ちゃんと石碑もありますねぇ~」

ここはポケモンタワー最上階。

「ちゃんと穴もある..... でもこれって.....」

「どうしましたか? 今誰もいないうちにちゃっちゃとやってしま

いましょう」

「まぁ、早くやらないにこしたことはないけど.....」

そんな時何か音が聞こえた。

マサムネ達はきょろきょろと周りを向くが何もない。

「早くやりましょうよ! 誰か来ちゃいますよ」

「わかった。 早くやろう」

ミズホが少し焦ったように急かすので

マサムネは石碑にキー ホルダー をすぐにさしこもうとした。

「じゃ、さすよ.....」

· はい。 いよいよですね。 ワクワクです」

そしてマサムネは鍵をさしこむ。

【エリノ・エカミ組】

で何をしているのでしょう」 隠れる場所少なすぎです..... 最上階の人がめったに来ないところ

· 覗くとばれるから隠れとけよ」

た。 階段の壁の部分に隠れ、 マサムネ達の会話を二人は盗み聞きしてい

「さて、何を話しているのでしょう.....」

なになに? ......誰もいないうちに.....なにぃ!?」

ばれるかもだから落ち着いて。 なにを言ってたんです?」

エカミは何も答えない。顔が赤いままだ。

「次は私が.....さ、さしっ!?」

エリノも顔が赤くなる。

「早すぎますよ! なんですか、以上に出会あれを使って誘惑です

かなりの誤解が生じている。

無論そうなるように書いたのだ当たり前だろう。 ね?

行きましょう」 これは突撃です! ばれるとかばれないじゃなく。 道徳的に!

「お、お、おう」

#### 【男性親子組】

か? 「なんだぁ、あのガキ二人組は。 10歳にもなってねえんじゃねえ

「父さんよぉ……このままじゃ導きの時に突撃するってのは……」

エリノ達より少し下に隠れている二人。

「そうだなぁ。 導きのためにやるしかねェ。 あいつらを気絶させて

すると少し上から叫び声が聞こえる。

「あれ?」なんか叫んでるぞ」

「なんかあったのかもな」

「あれ? また叫んだぜ?」

「やはり何かあったんだろう」

すると前の二人組は突撃を開始した。

「親父!」

もしかしたらいよいよかもしれねぇ! 行くぜ!」

そう言って二人も突撃する。

カチッ

光る! 光るぞ!」

「きましたね!」

石碑から光があふれる。

そして二人は光に包まれ.....

「よくわかんないけど光だ!」「にゃ、にゃんにゃんですかこれえええぇ!」

突撃したことにより巻き込まれる二人。

「そう。螺旋の導きだぁ!」「父さん。これが!」

そして光は消える。そして意図して巻き込まれる二人。

それは前回と違う結果.....

すべては運命の通りに.....

続く

### 第二七壊 じゃ、せかされてるし。 さしちゃおうか! (後書き)

どちらがいいか選んでください。ジョウトかホウエン。

ジョウト・ホウエン以外の地方がいいというのはホウエン・イッシュ・オーレ・フィオレ・アルミア・オブリビアなど 作者さん困っちゃうのでおやめください。 間違っても

# 第二八壊(どうしてこうなったんだ!?(前書き)

前回の地方アンケートは随時募集中。

お気に入りに登録している人はどちらがいいかくらいは

感想に書いてくれると嬉しいです。

# 第二八壊 どうしてこうなったんだ!?

あいてて..... ここは..... 石碑の前 ....帰ってこれたのか?」

「ほえええ~」

「だ、大丈夫かミズホちゃん」

「ほへへぇ~だいひょうぶでふ~」

よし。いつも通りだ!」

### マサムネは安心した。

「さぁ、早くタワーから降りて.....おや?タワー の外から街がすぐ

に見える?」

「ほぇ? それってどういうことなのですか?」

「……過去の次は未来とか」

れですね、 「 え〜 なですかそれ〜。 帰ろうとしたら未来とか。 じゃあきっとあ 少年が激レアなカードダスを隠してたりするんですよね」

「そんな、 これは騎士物語の外伝の2じゃないからね.....」

作者は一週間で攻略した。

じゃじゃぁ.....あれですよ! えええと.....」

何か思いつこうとして思いつかなかったんだね? よくあるよね

え〜そういうことって」

「はうううう~」

はてさて。ここは本当に未来なのか..... 度外に出てみよう」

そう言って二人は外に出てみることにした。

あれ? ポケモンタワー があった場所になんか派手なものが

ます!」 「て言うかこの二階建ての建物がお墓なんですか? 規模縮小すぎ

「何があってこうなったのか.....」

のは初めてかな?」 「おやおや? 君たちはシオンタウンと言うかカントー 地方に来る

マサムネ達が話していると突然誰かが話しかけてきた。

'n もうあれは昔話になるから知らない子もいるかなぁ~」

そうして男は数年前に起こった事件の事を話した。

「そんな事件があったのか.....」

そう言うわけだよ~じゃ、 用事があるのでこれで...

と思ったら戻ってきた。 そして話を教えてくれた人はそそくさと帰った。

「 忘れてたよぉ~ これをあげるねぇ~

· え、あ、どうも」

「じゃあね~」

そう言ってそそくさと帰って行った。

「所で何なんですかそれ」

に帰らないと」 ん ? なんだろうな...... それよりももう一度石碑で俺たちの時代

「ええ、じゃあもう一度!」

そう言って二人は石碑に向かった。

টা ট্য いいんじゃないかな。これで歴史はちゃんと動くと思う」 しかし。まぁ~あなたの言うとうりにするだけですよ~」 これでよかったんですかねぇ~」 これでちゃんとした未来に進むさ.....ふふ.....」

「と言うわけで今度こそ!」

「さっさとさしましょう!」

そして石碑にキーホルダーをさしこみ、 そして再び光が二人を包みこんだ。 回した。

「行ったようだな」

そのようたね~」

ふふ

「笑ってますね~旦那様」

「気にするな」

この二人の正体は今は謎である。

待ってるんですよ?感想はまってますよ。

目の前にいるのはフジ老人だ。マサムネは起き上がる。

「突然消えたかと思うたらタワーの入り口付近で倒れておったが。

何があったのじゃ?」

「何があったか?(俺にもわかりませんよ)

ホントの事を言うのは得策ではない。

と言うわけでタイムトラベルについては秘密にすることにした。

ておいてあげるといい」 「そうかの......そう言えばミズホちゃんはそこに寝てるでの。つい

そう言ってフジ老人は部屋を後にした。

「今度こそ現代か..... あれ? 未来での出来事がよく思い出せない

何かをもらったことは覚えている。

そう言えば俺は何を.....ん? 箱?」

箱だ。

あかない?」

開かない。

「なんなんだろうか。これは.....」

わからない。

「う、ううん....」

その時、ミズホの目が覚めた!

「ミズホちゃん!」

「ふにゃ......あ、まひゃむねひゃん.....おへょぉございみゃす」

寝ぼけているなこれは.....」

普通に会話できていない。

**・ひゃいひょうぶでひゅよ」** 

- 少し、目がさめるまで会話は控えようか」

そう言うわけで会話は一時中断した。

つまりは私は寝込みに襲われそうになったんですね!」

なぜそうなる」

ミズホのおかしな解釈にマサムネは突っ込んでいる。

についてだけど.....」 とりあえず前と同じでタイムスリップに関しては秘密。 後この箱

「あかないんですか?」

「ああ、 る人だったな」 あの女性にもらった箱。 しかしあの女性はなんか特徴のあ

聞き取りにくい感じでしたね」 「そうですね。言葉の語尾を伸ばすタイプで聞き取りやすいですが

「ああ、 者なんだ?」 以前あったユウミちゃんともタイプは違う.....いったい何

現在は確実に不明である。

もしかしたら、この先に出会うことになるかもだな

未来からすれば過去。 今からすれば未来にですか」

、そう。未来に」

そうして今回のタイムトラベルについての話は終わった。

今回のタイムトラベルでいろいろな事実も得た。

衝撃しかなかったが。

「まぁ、 1, とりあえず今は夜のようだ。 明日にでもタマムシに

行こうか」

「タマムシですか~昔と今を見比べられたりして楽しそうですね」

「実にその通りだ」

そう言ってフジ老人に今夜は寝ると伝え。

明日に備えることにした。

#### 【次の日の朝】

洋風ですね」 「スクランブルエッグにソーセージにサラダにスープ..... いかにも

「うむ。昨日はいろいろ言われたからのぉ」

「そしてパンじゃなくてご飯ですか」

「こ、今回はあわんとは言わさんぞ!」

#### フジ老人叫ぶ!

「まぁ、それもそうですね。 別にいいと思いますよ」

「おや? そうかの」

「米で食うは文化ですよ」

### 日本文化バンザイ!

カレー ライスバンザイ!

と、とある副部長が言っていましたよ。

「マサムネさんも早く食べるといいですよ」

おやおや、ミズホちゃん。そんなにがっついて食べちゃって...

やれやれとした顔でマサムネも朝食をとることにした。

# 第二九壊 日本文化ですよね! (後書き)

第一部はいまだ中盤である。

果たして何話で第一部は終わるのであろうか!

ミズホちゃんはどう暴走するのか!(こうご期待! そして知らぬ間に11歳になってさらに枷の外れた

やっぱ昔の方がいいかな.....

# 都会育ちってのはだな…… (前書き)

感想はまってはいる。

感想を読むのにはまっている。これは感想が来るのを待ってる。と

と言うことである。

## 第三十壊(都会育ちってのはだな....

「旅は道連れ」

「世は情け~」

「ふぅ......さて。もうすぐタマムシだね」

「ですね~」

過去の世界とは違い、何と動く歩道となっており 往復に四日もかからないようになっている。 現在はシオンからタマムシへとつながる地下通路。

すが」 「そもそも過去のタマムシは町の風景とジムしか思い出がないので

んだか」 「逃げるように帰ってきたからなぁ……今のジムってどうなってる

したてのエリカと言う人らしいですよ」 「えっとですね..... パンフレットによると今のジムリーダー は就任

う引退した後って感じか」 「ふぅん。あれが何年前かはよく分からないけど、娘さんたちはも

あの一桁少女たちがどのように成長したか見ものですよ」

ミズホはニヤリと笑っている。

「そうね。できれば遭いたくないかな」

「それもそうですかね。ふふふ.....」

「もう昔には戻れないんだね。ミズホちゃん」

マサラで久しぶりに会ったころのミズホを思い出し涙を浮かべるマ ムネであった。

### 【タマムシシティ】

「やっぱり凄い都会ですねぇ」

まぁ、 俺が住んでたイッシュに比べればまだまださ」

おお、 都会の男は言うことが違いますねぇー!」

あんまり大声で言うことではない。 して、ポケモンセンターは..

... あそこか」

ポケモンセンターを見つけるとマサムネはそちらへ向かい歩く。 ミズホもそのあとを追っていく。

· .....

そしてその光景をただじっと見つめる誰かがいた。

見慣れた顔は.....いないなぁ」

「もう先に行ってたりするんじゃないですかね」

別にいなくても不思議はないのだが。見慣れた顔は一人もいやしない。

ガイトとかもいねぇんだなぁ」

「カナデちゃんとかもいませんよねぇ」

「なんか悲しい感じだ」

゙モグリュ」

カメカメ」

さらっとシモンとトガミが登場。

考えればお久しぶりである。

ま、それはさておきと。 今日は泊って明日にはジム戦だな」

ですねえ」

「モグモグ……モグ?」

「どした? シモン」

モグ」

シモンは紙をさしだした。

·ん? 誰かに見られた気がしただと?」

マサムネは周りを見渡す。

だがマサムネを見つめているものはいない。

「そんなやついないぞ?」

「モグリュ.....」

気のせいだったんじゃないか?」

「グリュ.....」

シモンは考え込んだ様子になり何も言わなくなった。

「 ...... とにかく今日はもう寝よう」

「そうしましょう 」

そして二人は宿泊の手続きをとった.....

その後はいつも通りである。



### 第三十壊 都会育ちってのはだな……(後書き)

中盤から後半までペースアップしていきたいと思います。 諸事情により4月中盤から忙しくなるので

世界で一番くらいに。スバっと行くよズバッと。

このネタわからない人多そうだよ~

# **長第三十壊 ござるござるござるううううう!**

「せ、拙者は疲れたでござるよ.....」

贅沢言うなと言っているだろう? 僕の言うことは絶対だ」

カナデとカナブ。

現在はクチバシティである。

「まったく。 ポケモンセンターはすぐそこだからね」

拙 者。 ここまで辛い罰を受けるほど悪いことは.....」

「言ったよね? 君に権限はないよ」

「 ござる.....」

もはやカナブは何も言うことはなかった。

【ポケモンセンター】

「とにかく。明日にはジム挑戦だよ」

「ござる~」

カナブはもう何も聞こえていない。

倒れている。

まったく.....ん?」

カナデは壁に貼られているポスターを見た。

ダーのマチスが来るまでは休止か」 「当分ジムは休業? ジムリーダーが行方不明..... 臨時のジムリー

カナデは少しがっくりする。

「当分はここで足止めか.....どこかに遊びに行ったりするかな」

そしてカナブと二人で遊んでいるところを想像する。

な 「……そ、そうだな。僕にも休暇を与えないとな。僕っていい奴だ

カナデが正直になる日は遠い。そう自分に言いつけた。

「ござる~」

カナブはどう思っているかは謎のまま.....

## 第三一壊 えっ!? (前書き)

本日の出来事である

なんとなくサンデーのポケモン漫画が気になるので見てみる。

バースト....融合!?

なんてこった......俺の考えた名前とかどうしよう.....

てかこの先の展開どうしよう.....

自分がこの先何をしようとしていたかは.....

俺は泣くぜ.....

「そうだね」

何、もはや言うことはない。何事もなくいつも通りだ。

「と言うわけで。行こうか」

はい。行きましょう」

二人の仲はAから進んではいない。

### 【ジム出入り口前】

「おや? 女の子ばかりのジムですからねぇ~。 なんか爺さんがジムの中を覗いているぞ」 覗きなんて最低ですね」

しかし覗いているじいさんには見覚えがあった。

ん? 気のせいかな.....もしもし」

んあ、 なんじゃぁ。 このポイントはいい位置なのじゃからどかん

ぞ」

「なぁ、爺さん。あんたもしかして.....」

何を言われてもわしはどかんぞ! 覗きがわしの生きがいなのじ

や !

「いや、まてよ。俺の思い道理ならあんたは!」

#### パタン

そんな時ジムの扉が開いた。

で寝ててください!」 「お爺様! またそんなところでジムを覗きになるなんて! 部屋

「何をするのじゃ! わしはわしは除くのが生きがいなのじゃぁぁ

ジムから出てきた女性によりおじいさんはジムの中へと引きづられ て行った。

あれ? 今の女性はジムリーダーのエリカさんですよ」

つまり今覗いてたのはトラスケさんってこったな.....」

あのですか? なら別に覗かなくても中から.....」

覗いてばれるかばれないかがいいというのもあるかもだが.

何か普通ではない感じがした。

### 【タマムシジム中】

挑戦者さんですか......先程は失礼しました」

さっきのって先々代のジムリーダーですよね? 何があったんで

す ?

祖父がジムリーダーであったことをご存知ですか.....」

するとエリカは少し悲しそうな顔をして理由を話し始めた。

ああなられたそうです」 祖父は過去に娘..... 私の叔母に当たる方が行方不明になってから

「行方不明?」

行ってから帰ってこなかったそうなのです」 「ええ、何やらよく知らないのですが。 とある二人組を追いかけて

マサムネとミズホは顔を合わせる。

その二人組とは.....

業で病気になり寝込んでいます.....」 ...もう元には戻らないかもしれません。 そして今のように何があってもジムを覗くようになってしまい... 母様も看病とジムリーダー

.....

すいません。こんな話をしてしまって.....」 お爺様も覗きなんてしていられる体ではないのですが. ああ、

「あ、いや.....」

ミズホは喋ることすらできない。マサムネは少し言葉に詰まる。

「これではバトルなどできはしないですね.....こちらを受け取りく

ださい」

「バ、パッチ!? で、でも.....」

「いいんですよ.....私も就任したてですし.....こんな話を聞かせて

しまったのですから.....」

「 あ<sub>、</sub> あ.....う、 受け取らさせてもらいます

ィ マ マサムネさん.....い、 いいんですかね?」

え、あ.....」

# 二人分のパッチをマサムネは受け取った。

「し、失礼しました!」

前回とは違う逃げ方だった.....また逃げ出すことになった。そう言ってジムを後にした。

`.....お爺様。私は弱いのですか」

そこには涙を流すエリカ。マサムネ達が去った後のジム。

ガチャ

「おや、戻ってこられ.....あら。」

男一人と女の子二人の集団だ。入ってきたのはマサムネではない。

「いや、ここにトラスケさんっているかな」「挑戦者さんですか?」あいにく今は.....」

## 第三一壊 えっ!? (後書き)

まだ泣いてる自分です。

さて、スパロボでも見て寝ますかね。感想は募集中ですよ。

#### 【ポケモンセンター個室】

「.....なにかやりきれない感じだ」

あの子たちが行方不明ですか.....」

マサムネ達の雰囲気は何か暗い。

でも、俺たちのせいってのが確定もしてないし」

で、ですよね。 私たちが誘拐などをしたわけでもないですからね」

ミズホはそう言うが場の雰囲気は良くならない。

「モグリュ!」

「カメェェェェェエル!」

そこで突然叫ぶシモンとトガミ。

「モグモグモグリュ!」

「カメカメカメェェ!」

シモンが差し出す紙には

兄貴! 何暗くなってゃがるんだ! そんなの兄貴じゃねぇ!』

「シモン……ついでにトガミも……」

カ、カメメ?」

# トガミの扱いはいつも通りである。

「ありがとうよ。なんか元気出るわ」

「そうです。さすがはシモンです!」

「カ、カメ、カメメメ!?」

あ、トガミもどうもです」

「カメェー」

戻したのであった。 なにはともあれ、シモンとトガミにより二人はいつもの元気を取り

続く

バースト、バースト.....ふふふ.....

ってる.....

次はどこに行くんですか?」

セキチクかな..... サイクリングロードを通るしか道がないように

見えるが.....」

「ここに裏道がある」

そう言ってマサムネは地図を取り出し指さす。

裏道ですか?」

そう。あまり知る人のいない ルートだ」

そんなものを知っているマサムネさんさすがです!」

ふふふ。調べていたのさ」

タマムシの下、サイクリングロード横の森のけもの道

ここはめったに人が寄り付かないらしいが

サイクリングロー ドを越えるより早くセキチクシティ につけるらし

めったに人が寄り付かないって言う所が気になりますが」

は い ! 気にしなくていいよ。うん」

気にしません!」

問題は解決した。

と言うわけで準備ができたら早速向かおう」

はい

### 【タマムシ近くの森:けもの道】

「人っ子ひとりいないな.....」

「ええ、と言うかけもの道なんですからポケモンがいてもいいと思

うのですが.....」

「ポケモンかあ..... ん?」

目の前にぶんぶんと飛んでいるポケモンがいる。

「ヘラクロス? カントーでは珍しい」

・ここはあまり人が来ないそうですからねぇ~ 」

「ゴスゴス」

おや、リュポ。 お前なんで勝手に出てきてやがるです?」

「ゴスゴースト」

「なんかむかつくです.....」

しかしあのヘラクロスはほしいなぁ。 よし。 シャドウ。 瀕死状態

にしてきちゃえ」

「ギャラアアアアアア!」

ボールから出てきたシャドウは近くの木を倒す。

「へ、ヘラクロッ!?」

「ギャラアアアアア!」

こうかはばつぐんだ!シャドウのかえんほうしゃ

「へ、ヘラクロッ!」

「ほぉ。 ほうしゃを食らっても倒れないとは.....ナイス根性だ」 シャドウが木にうつらないように集束してはなったかえん

「へ、ヘラっ!」

きゅうしょにあたった。シャドウにクリティカルヒット!ヘラクロスのとっしん。

「ギャラアアアアアア!」

「へ、ヘラっ.....クロッ」 「体力付きかけだったのにとっしん。 そしてまだ倒れない.....

そう言ってマサムネが手にしたのはスピードボール。

「そう言ってマサムネはボールを投げる」「ヘラクロス.....ゲットさせてもらうぜっ!」

ガシュイン

そして。ヘラクロスはボールの中に納まる。

•

ポシュウン

ヘラクロス。ゲットだな」

「流石ですマサムネさん!」

「ゴスゴースゴスト」

てめえ。 いつまでそこに. : あれ? なんで手にモンスターボー

ルる持ってるです?」

「ゴスゴース」

すが..... 「これ中にポケモンはいってるですね。 ヘラクロスじゃなさそうで

「こ、これは!」すると中に入っていたのは。開けてみる。

後半へ続く

# 一意専心! (後書き)

モンスターボー ルは初めにボールのボタンを押したものを持ち主と

認め

初めてボールのボタンを触ったもののポケモンとなる。 他の誰がそのボールで捕まえようとも

これがこの小説のモンスターボールだ!

(前書き)

感想大募集。

#### 【少し前】

「ラキラキ」

「ゴスゴス」

た。 勝手にボールから出てきたリュポは森の中にいたラッキーとであっ

「ゴスゴスト」

「ラキラキ」

リュポ そんな時偶然にミズホが持ち主となっているボールを手にしていた

「ゴス」

軽い気持ちで投げてそして

カシュゥン

「ゴスゴースト!」

と言うわけであった。

全くどういうわけなんですか!」

俺にそんなこと言われても.....」

そして掴まれて揺らされるマサムネ。 なぜラッキー を捕まえられているのか分からない。

「こりゃリュポが捕まえてきたってことなんじゃないかな」

スピードボールを拾いながらミズホにそう言うマサムネ。

ですよ」 「そう言うことにしかなりませんね……少しは見直してやるとする

ちなみにミズホにツンデレの要素は一切ない。

誤解なきように。

後ヤンデレの要素もないよ。

「まぁ、ラッキーと言うわけで」

「ラッキーですね」

「ゴスゴス」

「ギャラアアアアアアアア!」

シュールな光景だ。

【セキチクシティ近く】

と一緒に」 「なんかボロボロです。 「どうやらセキチク近くに出れたようだ」 シャワーでも浴びたいです。 マサムネさん

「......ま、もはや何も言うことはないさ」

服に葉がつき汚れか付いている。

「早いとこセキチクのポケモンセンターへ.....」

「あ、ポケモントレーナー?」「ちょい待ち」

目と目があったらポケモンバトルの合図だぜ!

感想は募集中。

#### 何?

ああ.....わかったよ。

行って来いシモン!」

モグゥ!」

さっそうと登場するシモン。

ころいる どうやら頼りになる相棒のようだが。 俺の相棒に勝てる

かな?」

「モグゥ!」

「今の言葉にシモンが意気揚々となってるぜ」

「おお。 いいバトルになるかもしれねぇな。 よし、 行けっナビフ!」

ラーバ!」

出てきたのはビブラーバだ。

「ビブラーバか.....なかなかの強敵ってやつだな」

「ふふん。 さぁ勝負だ!

ナビフ。 いつもの通りだ!」

ビブラーバことナビフはシモンの周りを高速で動く。

「モグリュ!?」

シモンはその高速な動きについていけない。

に見分けて攻撃できるはず.....」 「シモンが反応できていない!? シモンは高速に動くものもすぐ

ナビフのパターンのない高速な動きには追いつけねぇだろ」

そこに一定のパターンはない。 ナビフは自分の意思で高速移動している。

「モグモグゥ!」

わけではないので シモンはこうそくスピンで攻撃するが一定のパターンで動いている

狙った所に攻撃しても当たらない。

「ナビフ。 りゅうのいぶき!」

「ビラーバ!」

ナビフのりゅうのいぶき。

「モグァ!」

シモン!」

きゅうしょにあたった。

「モ、モモグ.....」

シモンはマヒしている。

ふ ふ。 よし。 ナビフ。 パターン2!」

בעני

ナビフの高速の移動は終わる。

「モ、モグリュア!?」「ビブーラ!」

シモンの足元が砂の流砂となる。

「ビビビビラァァァァバ!」「悪いね。速攻で終わらさせてもらうよ」「すなじごく!」

天候が良くなっていく.....

「にほんばれっ!?」

ナビフの口元に光が集まる。

「そう。ソーラービームだ!」「まさか。草タイプ高威力技.....」

そして発射されるソーラービーム。

「シモオオオオオオオオオオン!」

プチッ

その攻撃はシモンに直撃した。

がい。ショックで黙っちゃったか」 おやおや。ショックで黙っちゃったか」 マ、マサムネさん! シ、シモンが」

流砂の中にシモンの姿は消えていた。

「さて、 俺の勝ちだな。 さっさとモグリューを助けて.....」

「負けてねぇ.....」

「 何 ?」

「俺とシモンのコンビがこんなところで.....負けるわけないだろう

がああああ!」

「マサムネさ.....キーホルダーが光ってる?」

そう。 マサムネのキー ホルダー が光っている。

「俺が信じるシモンが負けるはずねぇ……そしてシモンも俺がシモ

ンを信じていることを信じている.....」

「 な、 なにを戯言を..... 」

ズシャ

「あん?」

砂の中からシモンの手が現れる。

「どうやらそこまで言うほどの底力はあるようだ... ビビビ」

再びナビフの口元が光...

「ピッ!?」 何 ?」

ナビフは地面に落ちている。

「え? 何があって.....え?」 ..... モグリュ」

そして戦いは終わった。

「何があったのか全く分からなかったが......負けたよ......」

「そうか。そうだな」

「まぁいい。今度は負けない。俺の名前はアサノブ。覚えておいて

くれよ。じゃあな」

そう言ってアサノブはサイクリングロードへと向かった。

あの、マサムネさん。 なにが.....」

マサムネさん?」

.....ヤマブキか.....」

ん、ああ、何?」

いえ、今のは.....」

hį ああ、 気にしなくていいよ」

「 え、 あ.....あ.....はい.....」

ミズホは納得していない。

ミズホが納得しないとはよほどの事である。

「とにかくセキチクシティに行こう」

その後ろにはとぼとぼと付いていくシモンの姿もあった。 そう行ってマサムネはセキチクシティに向かう。

「いったい何なんでしょうか.....」

続く

### 第二三壊 ……何?(後書き)

こちらよければ聞いてください。 http:// s m 1 3 9 0 6 5 8 2 W W W ·nicovideo ; p / Watch/

考えるのに2時間もかかってしまった..... アサノブのポケモンとビブラーバの名前を

後、ヘラクロスとラッキー の名前も募集。感想は大募集中。

#### 裏第三三壊 親父

【セキチクシティ:ポケモンセンター 宿泊個室14】

「と言うわけで。 はい。 今回もダブルバトルのようです。 今日はもう寝て明日はジム戦だよ」 頑張りましょう」

いつも通りの光景がそこには広がっていた.....

「じゃあ寝よう。おやすみ」

「あ、はい」

そう感じたミズホであった。だが少しだけ違った。

- ......

隣のベットでミズホが寝ている。

マサムネは考えていた。

(あの時何があったんだ? いせ、 何があってああなったのか.....)

あの時は何かが起こってああなった。

何があったのかは分からない。

( キー ホルダー が光って…… その時に…… )

それが何なのかは分からない。

うな.....) (だが胸の奥からこみ上げてきたあの力。 シモンと一つになったよ

そしてその時にキーホルダーが光っていた。

(親父なら何か知っているかもな.....)

そもそもいろいろなものを送ってきたのは父親だ。

終わる) (セキチク・グレンに行った後ぐらいにヤマブキのゲートの工事は

】)〔目:: ] っこうこ。 マサムネはヤマブキに行くことを決めた。

力の真相を知るために。

(所で工事の間ヤマブキの人はどうやって.....)

それはきっと永遠の謎である.....

### 第三四壊 - 1 親子愛.....そしてこうなるのか.....

#### 【ポケモンセンター】

「と言うわけで。さっそくセキチクジムに行こう」 イエッサーです」

それを感じたのかミズホもいつも通りに戻っていた。 マサムネは寝る前の決心によりいつも通りに戻っていた。

「いつも通り引きずられるのね~!」「と言うわけでレッッゴーです!」

いつも通りである。

#### 【セキチクジム】

こんな奴ら簡単に倒しちゃ ファファファ。 挑戦者から いましょう父上」

「申し訳ありません父上」

アンズよお前もまだ未熟。

そんなことを言える立場ではないぞ」

もはや何ともいわれぬ何か。目の前で繰り広げられる親子劇。

「ミズホちゃん......

それを見て顔を少ししかめるミズホ。

親子愛と言うものを見ていると少しイライラするようだ。

「ミズホちゃん。大丈夫か」

大丈夫ですよ.....マサムネさんがいてくれますから.....ええ」

どうもイライラが抑え切れていないご様子。

やっちゃえばスッキリすると思うよ。ミズホちゃん」

やっちゃえばいいんですよねマサムネさん。 フフフ」

ため マサムネは人前では抱きしめるという行為が恥ずかしいのできない

倒すという選択肢を選んだ。

どの道倒すわけだが。

ファファファ。 すまぬな、 ダブルバトルといこう。 娘には私のポ

ケモンを使わせる」

「残念ですがあなた方に勝ち目はありませんよ」

゙ はたしてそうかな.....」

「私たちにはかないません」

そして戦いが始まる。

後編に続く

# 第三四壊・2 そりゃそうなるよ~

「行ってくるのだ! マタドガス」「行けっ! ベトベトン」

キョウ親子はお得意のどくポケモンを繰り出してきた。

「やってくるですよ。トガミ!」「やってこい。シモン」

そしてマサムネ達はベストコンビを繰り出した。

「では、試合開始!」「グリュー!」

審判の宣言とともに試合は開始した!

「モグゥ〜」 「シモン! つるぎのまい!」

シモンはつるぎのまいを舞う。

「カメェェェェル!」「させないです! ロケットずつき!」「隙あり! ベトベトンのしかかり!」

シモンにのしかかろうとしたベトベトンをトガミがロケットずつき で押しのける。

「ベトオ!」

少ない。 シモンへののしかかりは止められたがやわらかい体ゆえダメージは

「マータドガァ〜ス」

「カメカ!」

マタドガスのたいあたりをトガミはよける。

「モグリュ!」

マタドガスに向かいシモンは走る。

「ベート〜」

近くにいたベトベトンはシモンに再びのしかかろうとする。

「モグっ!」

シモンは軽く投げる。

そして

「モグっ!」

「カメっ!」

シモンはトガミを担ぐ。

そして....

「モオオオオオグリュ!」

力いっぱいトガミを上に投げる。

. | 体何を.....」

「今だシモン! じしんだ!」

「モオオオオオグリュ!」

空高くにいるトガミとふゆうのマタドガスには当たらない。

だが

「ベトオオオオオオオオ!」

ベトベトンにはこうかはばつぐんだ。

「ベトベトン戦闘不能!」

「ち、父上のベトベトンがぁー!」

そしてフィールドの地形が荒れ地に代わる。

「カアアアアメ!」

落下してきたトガミがマタドガスにずつき!

「ドガつ」

斜めに落ちていきマタドガスからは離れる。紙一重の所でよけられる。

「モグ……!」

つめとぎをしなからトガミがいる方向へ走るシモン。

「マタドガァ~」

シモンめがけて襲いかかるマタドガス。トガミは当分は起き上がれないだろうと思い

「モグ」

そして逆転する。シモンは突然止まる。

「ドガっ?」

怪しいと思いマタドガスは少し離れる。

「モグモグモグー!」

マタドガスに向かいシモンが走る。

「ドガっ」

少し上にふゆうしその攻撃をよけようとする。

「モォグ」

そんなシモンの後ろから走るトガミがいた。

カアアアアアアメ!」

その先にいるのはシモンだ。 トガミのロケットずつき。

カアアアアメつ!」 モオオオグリュ!」

その勢いでシモンはマタドガスめがけて飛ぶ。

ドガァ!」

その勢いにのまれたかいや、速さもなかなかのその攻撃をマタドガ

スはよけれない。

そしてそのまま攻撃を食らう!

ドガアアアアア」

シモンの攻撃を食らいマタドガスは墜落して行く。

モォグ!」

マタドガス。

戦闘不能。この勝負、

挑戦者の勝ち!」

カア.....メ?」

勝利が確定したときトガミの体が光りだした。

そして

カメェェェェクス!」

## トガミはカメックスに進化した。

「勝てたですよー ざまぁ みやがれェです~」

「よかったねぇ」

「力、カメっ」

勝利の喜びの方がトガミが進化したことより勝ったようだ。

「力、力メクゥゥゥゥスー!」

「モグリュ」

最後の進化だと言うのにトガミの扱いは変わらない.....

その後バッチを受け取り泣いているアンズを見て

笑顔のミズホと困り顔のマサムネはジムを後にした.....

続く

# 第三四壊・2 そりゃそうなるよ~ (後書き)

いや。 Bハートどこかで出そうかな.....

面白いし楽しそうだが出すのはどうかな.....

### 裏第三四壊 友情と疑問

「 モグモグモー グリュ」「 カメカメカメ〜 」

だが以前のように肩に手は届かない。落ち込んでいるトガミを励ますシモン。

「モーーーグリュ」「カ、カメカク」「モグリュ。モグーリュ!」

手を使いトガミとの大きさを比較するシモン。

「モグリュ」「カメェェェクス」

そういうことである。友情は姿が変わってもなくなることはない。そして手をつかみ握手する二匹。

【ポケモンセンター】

マサムネ達はシモンたちの横で荷物の整理をしていた。

ん? なに?」

「何か考え事ですか?」

「そう、ですか.....」「いや、別に」

「シモンはなぜ.....」

そういうとミズホは荷物の整理を始めた。

マサムネはそうつぶやいた。

続く

## 第三五壊 ふたごじまでラブラブ..... ISじゃねぇよ!

「グレンタウンですか?」

ヤマブキはまだゲートの工事中だ。 と言うことでグレンに行く」

「どうやって行くのです?」

これだ」

マサムネが出したパンフレットをミズホは見る。

「ふたごじま経由グレン島行きの船.....ですか」

「と言うかこれしか船がないようだ」

「グレンタウンって田舎の田舎なんですね」

ようだ」 「観光地なんだけどね。 まぁ一定の季節以外は人が限りなくいない

そう行ってマサムネはパンフレットをなおす。

「と言うわけで、出発の用意をしようか」

· はいです」

そして二人は出発の準備を始めた。

【セキチクシティ:浜辺】

さぁ、出発ですよ。出発」

**・俺たち以外に乗る人がいないようだけどね」** 

毎日一便ですよね。 他に乗るトレーナーも見えないです」

キョロキョロと周りをミズホ。

その視線の先にはマサムネと船しかない。

ま、船長さんがいるからふ二人きりではないが」

「..... ちっ」

**ああ。何も聞かなかったなぁ俺」** 

そういうことで二人は船に乗った。

「出発~」

「ふふっ」

ミズホは子供らしいところは子供だなとマサムネは少し笑った。

#### 【数時間後】

· ふたごじまだよぉ~」

「到着か」

**゙ここで乗り換えなんですよね」** 

そうもいがなぐなったよ」

突然船長がしゃべりだした。

ここの島の入り口からもう一つの島の出口に行ってくれんかな」

もう一つの出口?」

諸事情でなぁ。 これのせいで船で渡る人も少なくなっちまったぁ」

そう言ってタバコを吸いながら船長さんは船に戻っていく。

向こう側の出口に弟の船が来る予定だからそれに乗るとええよ」

そう行って船長さんは船に乗りセキチクへと帰って行った。

......これで二人きりですよ」

そうだけども。 しかしこれで人が乗らなくなったか.....」

そう言ってマサムネは洞窟の入り口を見る。

「強いポケモンでも出るのか?」

強いポケモンなんてのは私たちの力があればなんともないです」

「私たちの力ねぇ」

「はい。ラブラブパワーです

なんかどこかの何でもカレーかける女の子みたいなセリフね」

たぶん誰もわからないですよそれ。 女しか乗れないロボットに乗

る男が主人公の話とか言っても」

マサムネ達はふたごじまの洞窟に入って行った。 そんな今なら別物の作品に間違えられるような話をしながら

## 第三五壊 ふたごじまでラブラブ......ISじゃねぇよ! (後書き)

そろそろ終盤なのかもしれない。

自分は後に食べる派です。 ところで皆さんは好きなものは先に食べる派? 後に食べる派?

## 第三六壊(まぁ、こういうのもいいな

「薄暗いな.....」

「ああ。もしも誰かでたら大変です」

たぶんないよ。そんなこと」

抱きつくのではなく背中にひっつく状態となっている。

「ついに抱きつくを超えてしまったね」

まぁ歩きにくいので常時できないというのが難点です」

そう言ってマサムネから離れいつも通りに抱きつく。

しかしまぁ。ポケモンが元気に泳いでるねぇ」

パウワウやジュゴンなどが水の中を泳いでいる。

「襲ってくる気配とかはないけども」

。 のどかですねぇ~」

ガチャ

「ん? ガチャ?」

「あの、足元.....」

'足元?」

足元の氷にひびが入っている。

「ははは。通りで寒いわけだ」

「私。 いつまでも一緒ですから」

゙ああ、現実を教えないで.....」

パリン

「あ、あぁぁあぁぁぁぁぁー」

「落ちますぅぅうぅぅぅぅー

んぁ? うむ。助かったか.....」

「んにゃ~マサムネさん~もっと~」

何言ってるんだこの子は.....しかし。 落ちたところが見えない...

:

マサムネは上を見上げるが暗くて何も見えない。

「上にあがれそうなところは..... 穴のある場所が分かればシャドウ

に乗って上に行くんだが……」

ある場所がよくわからない。

゚少し歩いて探すしかないな.....」

そう言ってマサムネは腰を下げ倒れているミズホの頬を叩く。

「ミズホちゃん。起きて」

ペシペシ

起きて」

ペシペシ

「起きてくれ」

ペシペシ

「まだ起きない.....ん?」

よく見ると目をつぶっているが幸せそうな顔をしている。

ミズホ。ここでお別れだ」 しかたない。置いていこう。ミズホちゃん.....いやオーキド

そう言ってマサムネはミズホから離れて.....

ガシッ

「.....さい....」

泣き声が聞こえる。

まぜん~!」 「おいでいがないでぐだざい~マザムネざんがいないどいぎでいげ

かける。 この世の終わりが来たというような表情でマサムネにミズホは話し

じゃあもう、 たぬき寝入りとかしないこと。 わかった?」

「じゃ、はい」「ふぇ.....もうしませんからぁ~」

そう言って手をさしだす。

「..... ありがとうございます!」

そしていつもの抱きつく状態となる。

「はい」「じゃ行こうか」

そう言ってマサムネ達は上に上がれる場所を探しに歩きだした。

続く

#### 第三六壊 補足 助けは来るのか 助けはないのか

っだっぺ」 もすもす。 おお、 ジロウ。 何 ? 迎えの船の日時? 今日だとい

いや、船は当分は出れねえんだっぺ」

船業者の二人の会話。

どうやら連絡の相違があったようだ。

ポケモントレーナーなんだからどうにでもなるべ」 んだど、あのお客さんどうなるんだ?」

「んだな」

勝手に大丈夫と結論づけた。

そして二人に助けは来ないことが確定したのだった。

## 【一方その頃 クチバシティ】

「マチスが明日に来るらしいよ」

ſί いよいよでござ......いや、 それより子の荷物重いでござる...

:

テーマパークのお土産なんだ。 実家まで送るのを頼むまでなんだ

から我慢しなよ」

でも10時間待ちでござるよ!?」

いいから!」

続 く

## 第三七壊 ただボキャブラリーがないだけだよ! (前書き)

感想は本当にほしいです。

たくさんあると作者がいつもより倍に働きます。

# ただボキャブラリーがないだけだよ!

けるような長い奴送ってくるとかどうなんだか」 親父の贈り物の一つなわけだが……ファッションモデルと力がつ こんな時にちょうど合ってよかったですね。 長いマフラー

「私たちにとっては都合がよかったんですよ」

笑顔で笑うミズホ。

それを見てマサムネもただ笑うだけだった。

「と。歩いては見るものの上が見えない.....」

「ここで死ぬまで二人きりなんですかね」

それはいろいろ困るがな.....と」

前には大きな湖が広がっている。

端についてないのに後ろに戻るもどうだかな..... ここは..... 」

と言うことでいつぞやの時に使った簡易型ボートを用意するマサム

ネ

力人.....」

そして動力は.....

トガミである。

っさて、奥にはは何があるのか」

「なにもなかったりしたりしますかね」

「それはそれで戻るのが面倒だけどね」

## そして奥へと少しずつ進んでいく。

「こういうときに温まる方法は、ひと.....」「なんかどんどん寒くなってくるなぁ.....」

ん? 何か見える.....」

ミズホは残念そうな顔をしているが...マサムネは何かを見つけたようだ。

「降りれる場所がある。降りよう」

そして二人は船から降り、 何かに向かって歩く。

「これは.....扉?」

なんで人工物があるんですかね」

「この先に誰かいる? 物好きな人もいるもんだ」

そう言ってマサムネは扉を叩いてみる。

こっこっ

「少し凍ってて冷たい.....」

かわいそうなマサムネさん.....

そんなことを言っていると。

「どなたです?」

### 扉の奥から声がした。

「遭難者です」

です」

ガチャ

「それは大変ですね。どうぞ中へ……あら?」

中から出てきた女性はマサムネを見て不思議そうな顔をした。

· ? なにか?」

· いえ、とりあえずどうぞ」

そしてマサムネ達は部屋の中へと入った。

· フリーザーですか?」

はい。 私の家系は代々ここでフリーザーの守護をしてきたのです」

「へえ.....」

まぁ、 ある特定の時期のみ来るだけですが。今はいません」

そう言って彼女はお茶を二人に差し出す。

「そう言えば名前をまだ行っていませんでしたね。 私の名前はツラ

ラです」

「俺の名前はマサムネ」

私はミズホです」

#### 軽い挨拶をし。

マサムネはもう一つの出口に出る方法を聞こうとしたその時。

「あの、あなたはその胸のものをどこで?」

「ん? このキーホルダーの事?」

「ええ。どちらで?」

これは親父からの贈り物さ。これについて何か知っているのか?」

マサムネはキーホルダー について何か知っているのか凄くに気にな

いえ、お爺様がよく見せてくれたものと似ていて...

· お爺様? そのお爺様はどこに?」

たしかオー レ地方に療養に行かれているはずです」

「遠すぎるなそれは....」

「ですねぇ」

やはり親父に訊きに行くのが一番早いか.....)

.....

「何か?」

「いえ、何でもないです」

「所で地上に出るにはどうすればいいです?」

「出口はこちらの扉ですよ」

「おお。早く出ましょう」

「あ、お茶ありがとうございました」

カチャ。パタン

再びしまった扉を見てツララはただ呟くだけであった。

## 第三七壊 ただボキャブラリーがないだけだよ! (後書き)

何か書いてあったのを見た人は忘れてください。 後書きは何も書いてありませんでした。

## 第三八壊(なんとなくですか……

「外の光だ」

もう一つの出口に到着したマサムネ達。

「でも船は見えませんけどね」

`ならここはこの簡易ボートで行くしかないか」

んじゃ動力でも出しますかね」

ミズホがモンスター ボー ルを取り出そうとしたとき。

あの、少しよろしいですか?」

「おや、ツララさん?」

「あのこれを.....」

「なん.....んん?」

ツララが手渡してきたものがマサムネは気になった。

「このプレート……俺に?」

はい。あなたに」

カードー枚ぐらいの大きさのプレート。

それをマサムネは受け取る。

゚しかしなぜ.....」

「それは....」

りです?」 あなた.....マサムネさんにプレゼントなんかしてどういうおつも

# 恐ろしい形相をしたミズホがツララを見つめている。

すから」 いえいえ。そう言うのではないのですよ。 私にも故郷に彼がいま

「おや、そうなんですか」

ミズホはいつもどおりに戻る。

一年ほど会っていませんが。 

方がありません」

「さみしい話ですね」

「務めですから」

「あの、それで結局.....」

一人の会話が終わるのを待っていたマサムネは再び質問する。

.....渡した方がいいと思ったからです」

「思った?」

「ええ、なんとなく」

·これは大事なものじゃないんですか?」

5つあるうちの一つです。 お爺様は1枚残るなら渡してもよいと

も言われています」

「大事なものだと思うんだけどなぁ\_

そう言いながらもマサムネはカバンにプレー トをしまう。

では、私はこれで.....」

そう言ってツララは洞窟へと戻って行った。

「 大事なものをなぜ.....」

「マサムネさん。ボートと動力準備できましたよ」

「ん、そうか。よし。グレンタウンに向かおう」「カメ.....」

はい

そしてマサムネ達はグレンタウンへ向かった.....

続く

### 第三九壊 おつきとはねと一年か(前書き)

感想っていうのは燃料みたいなものです。感想ないと小説が止まるかもしれません。

425

## 第三九壊(おつきとはねと一年か

「グレンタウン見えてきましたねぇ~」「見えてきたなぁ」

ボートがふたごじまから出発して約一日。 動力はとまることなくグレンタウンへ向かっていた。

「お、足が着けるところまで来ましたよ」

「よし。おりよう」

同時に動力の活動が停止した。そう言って二人はグレンタウンに足をつけた。

力 … 」

おつかれさまでした。もはや動く気配がない。

【ポケモンセンターに泊まった次の日】

明日の今日に訪ねてきてくれた君たちは運がいいよ。 書かれた時間にまた来てくれ」 「ええ。少しジョウトの方に用があると先月から。帰ってくるのが 「ジムリーダーが用事で出かけていて明日まで帰らない?」 明日のこれに

はぁ。 じゃ あ明日に..

そう言ってマサムネ達はジムから離れる。

かな」 明日か.....この島に今の時期に暇をつぶせるところなんてあるの

「パンフレットがここに.....化石研究所?」

「化石? そう言えばおつきみやまで手に入れた化石が一つあった

な

「ああ、 あの大金を手に入れたところですね」

「懐かしい話.....そういやハナダでなんか手に入れてたような..

マサムネは何か思い出そうとしているが思い出せない。

「あ、マサムネさん。 研究所はポケモンセンターからすぐ近くらし

いです。 行きましょう!」

ミズホに手をひかれマサムネは研究所へ向かう

(まぁ、 今思い出さなくてもいいかな.....)

そしてマサムネは考えるのをやめた。

#### 化石研究所】

これは珍しい化石をお持ちですねぇ!」

「め、珍しいすか.....」

「モ、モグ.....」

研究員に化石を見せるとすごいリアクションをされたので ちなみにシモンは化石の発見者としてボールから出した。 マサムネとシモンは少しひいてしまった。

「アール博士が喜ぶぞ、これは!」

「アール?」

「この研究所の所長だよ。こっちに来てくれ」

シモンとミズホはその後を追いかけた。 そう言って研究員はマサムネの手をとり無理やり引きずって行った。

ここ、この部屋の中だよ」

「は、はぁ.....」

ガチャ

「 博士えええええええぇ! パターン青です!」

「青。青と言ったでアールか!」

青ですよ博士え!」

研究員と博士でよくわからないがすごく盛り上がっている。

「なんなんですかねこの状況」

「知ってたら唖然とはしないよ」

モォォグリュ」

# マサムネ達ですらこの展開にはついていけない。

「では現品を見せてほしいのでア~ル」

「えぇと。これです」

そしてマサムネは化石を出す。

おおおおおおおお はねのカセキでアール! カントーで見

つけたであるか?」

「おつきみやまで.....」

「ほぉぉおお.....おっと。 叫んでばかりもいられないでアール。 こ

れを少しあずからせてもらえないでアールか」

「え?」

突然預けてくれと言われてただ驚く。

`この復元装置を試してみたいのでア~ル!」

復元……と言うと化石をポケモンに?」

「その通りでアール!」

「え〜と。シモン。どうする?」

「モグリュ」

紙をさしだしてきた。

そこには『いいよ、兄貴』と書いてある。

「発見者の許可も出たのでお願いします」

「うむ。明日にでも来るとヨロシ」

「明日に?」

予定通りなら明日の昼には復元できるでア~!

そう言ってアー セットする。 ル博士はマサムネの手から化石をとり装置に化石を

では。 明日に出来るのをご期待くださいなのでアール!」

そう言って部屋を出されてしまった。

明日の昼.....かぁ......ジム戦の受付っていつぐらい?」

「え~と.....10時くらいですね」

「昼ってどれくらいからが昼なんだか.....」

「とりあえずジム戦を先にすると言うのがいいんじゃないでしょう

り

「まぁ、そうだな。 10時は朝に分類されるかな」

そう言いながら二人はポケモンセンターへ向かった。

### 【ポケモンセンター】

おや? 君たちはあの時の」

「たしか.....え~と.....」

セキチク近くで対決をしたアサノブであった。

偶然だね。 俺はここの出身でね。 帰郷していたんだ」

ああ、そうなんだ。へぇ」

「なんかすごく興味なさそうだね」

ないね」

... あ、 そうそう。 俺さシンオウに行くことになっ たんだ」

「シンオウ?」

君も聞いているだろう。 ポケモンリー グの延期を」

マサムネとミズホの表情は固まる。

おや..... まさかカントーとジョウトのポケモンリーグが一年延期

になるということを知らなかったのかい?」

「し、知らんよ.....俺そんなの知らんよぉぉ おおおお

俺たちがセキチクであって二日後位に発表されたが.....」

そのときはふたごじまで遭難をしていたためそんなことは知らない。

と言うわけで開催の遅いシンオウに行くことにしたということさ」 シンオウとホウエンは変更なし。 そしてホウエンはもうすぐ開催。

「それって、イッシュとかは.....」

きみはポケモンリーグについては詳しくないようだね。 イッシュ

は開催の年が一年ずれてるのさ」

つまりは今回はカントー とジョウトとイッシュの大会が同じ年に

開かれるということか」

しかも同じ月にね」

つまりは

ている。 それから一カ月後にホウエン。 毎年同じ月にカントーとジョウトは同じ月に大会を開いており それから数カ月後にシンオウとなっ

イッシュはその一年後だ。

その他の地方は遠いので情報が入ってきていない。

る手はずになっている」 と言うわけで。 俺は明日にはシンオウへ行くのさ。 ここに船が来

「……俺のジム戦攻略の意味って」

損はない」 「いやパッチはちゃんと延期した分も有効だよ。明日バトルしても

「そ、そうか.....しかし長い期間が開いてしまうな」

いたいんからシンオウに行くんだがね」 「他の地方にでも修行に行けばいいんじゃないかな。 俺はすぐに戦

そう言って笑いながらアサノブはマサムネ達に別れを告げ自分の家 に帰って行った。

. |年....かぁ.....」

つまりはマサムネさんと旅できる期間が増えたということですよ。

いいことです」

「ははっ。そうかもね」

・モグリュ」

た。 そして明日のジム戦に備えマサムネ達は宿泊し睡眠をとることとし

# 第三九壊(おつきとはねと一年か (後書き)

アール博士とかいつぶりに小説で使ったかな..... 3年前くらいに凍結した小説以来かな。

と言うわけでそろそろ第一部が終わりに近づいてきた。

次回からは終盤でしょう。

序盤・中盤より話数は少ないと思いますがご了承ください。 終盤と言っても新キャラもそれほどでいでしょうし

### 第四十壊 はっきり言っちゃだめなこともあるんだよ

#### 【次の日】

「さぁ、ジム戦ですよジム戦!」

「そうだねぇ~ジム戦だね~」

マサムネはジムに向かって歩いている。

しかし二日あったことでど.....トガミが復活してよかったですね」

ああ、よかったね.....」

一瞬ミズホが「ど」と言いかけたがマサムネは聞かなかったことに

した

「さて、ジムに着いたか.....」

「入りましょう」

そして二人はジムの中に入る。

゙ む。よく来たな.....ダブルバトルの挑戦者か」

「あなたかジムリーダーの.....っ」

..... またその反応か。 まあいい。 バトルを開始しよう」

カツラは何か残念そうな顔をしてバトルの準備を始めた。

めた。 そしてミズホとマサムネはカツラに聞こえないように小声で話し始

言うなよ.....ふ、 カツラなのに普通にハゲですよマサムネさん」 ふふくつ.....」

そんなこんなで戦いの準備を始めた。

「行くですよトガミ!」「いでよ、ウインディ! ギャロップ!」

「やってこいシモン!」

そしてフィールドに4体のポケモンがそろう。

「圧倒的にこちら有利じゃないですか?」

タイプで戦いは決まらないさ」

「試合開始!」

二人の会話を遮るように審判の声が響く。

ウインディ! ギャロップ! パターンZYS!」

「ウイイイ!」

「ギャロオオオオ!」

突然として二匹の動きが変わる。

「モグ?」

「力メ?」

動きが変わっただけで攻撃が当たらないわけでもない。

モォォグ!」

カメェェェクス!」

トガミはハイドロポンプを放つ。シモンはトガミを土台にして飛ぶ。

「モグつ!?」「ギャロオオオ」

ギャロップがとびはねる。

「カメクッ!?」「ウィィィイ」

しんそくだ! ハイドロポンプを放とうとしたときウインディは後ろにいた。

「ディイー!」

二匹の攻撃がシモンとトガミを襲う。

「モオ!?」

· クゥス!?」

シモンは下に落ち、トガミは逆向きに倒れる。

「予想外の出来事が起きたな」

「そ、そんなに冷静にしてていいんですか!?」

.....

# (以前のような現象が起こると思ったが)

どうも起こるようには見えない。

負ける状況になれば起きるのではと静観していたが

このままではやばいであろう.....

(まぁ、 るはずはない.....) このままではやばいだろうが.....同じパターンが続いてけ

「モ、モグッ!? ためらうな!」 シモン。TKNだ!」 É モグ....

モ、モオオオグ」

シモンは転がってジタバタしているトガミを 小柄な体で持ち上げる。

「モオオオオオオグ!」 カ<sub>、</sub> カメェェエェエェェニ~

そして投げ飛ばした。

「ギャロォ!」 ウィィィ」

そんなもの軽くよけられる.. : が

カメカメカメー!」

突如としてトガミはこうそくスピンし始める。

「ディ!?」

ウインディは突然の事にトガミの攻撃をよけられない。 そしてその場に倒れる。

「ギャロ!」

トガミに向かいとっしんをするギャロップ。

ゴゴゴ

「モグゥ!」

あなどまる女譽ご。突如下からシモンが飛び出す。

あなをほる攻撃だ。

「ギヤロオ!?」

突如として現れたシモンにギャロップは対応できない。

「カメェクス」

「モグリュ!」

そしてウインディは体勢を崩している。

「力、メエエエエ!」

先ほどとは逆にトガミがシモンを投げる。

モオオオグリュ!」

シモンのきりさく攻撃!

ディイイイイイイイ!」

スチャッ

「モグッモグ……」

まる。 シモンの決め台詞とともにウインディとギャロップは倒れ動きが止

「ギャロップ、 ウインディ 戦闘不能! 挑戦者の勝ち!」

はいです」 クリムゾンパッチも手に入れたし。あとは研究所に行くだけか」

一人はジムを後にして研究所へと向かう。

「そうだな」 「どんなポケモンが復活してるんですかね。 楽しみですね」

そしてマサムネ達は研究所へと向かった。

### 第四十壊 はっきり言っちゃだめなこともあるんだよ (後書き)

そんなことはないですからね。カツラの扱いが悪いように見えるがこの小説では

感想と言うか今までの質問の答えも待ってます。

# 第四一壊(こいつ!)なんて使い勝手の!

遅いでアール! とっ くに復元はできているのでアール!」

成功したんですか」

御覧の通りでアール。 この君のボールに入っているでアール」

そう言ってアール博士が差し出すボールを受け取る。

でアールからな」 「おっと。ここでは出さないでほしいでアール。暴れられても困る

「まぁ、それもそうか.....」

そう言ってマサムネはボールをなおす。

「博士。そろそろ出発ですよ」

「む。そうでアールか」

「出発?」

「 シンオウに行くのでアール」

ょ 「少し用事がありましてね。 あなた達が来るまで待っていたのです

なお、 そう言って荷物を持つ助手とアール博士は研究所を後にした。 さんの人はいる。 助手の他にもお多くの研究者がいるので研究所にはまだたく

### 【ポケモンセンター】

゙さて、新入りを出してみると.....」

やあやぁ、 君 達。 確かヤマブキに行きたかったらしいね」

「アサノブか。いきなりなんだ.....」

ボールをあけようとしたら突然アサノブが話しかけてきた。

君たちも乗って行かないかい?」 いせ、 今日来てくれる船がねクチバの港にも一度寄ると言うんだ。

「おっ。 いいのか? どうやって行こうかと思っていたんだ」

アサノブの言葉にマサムネは喜ぶ。

戦闘で動力も疲れているし二日はここでとどまることになると思っ ていたからだ。

いんだ、 いいんだ。 俺の友達も別にいいと言ってくれているよ」

「そうか!で、出発は?」

「今すぐだよ」

「え?」

「さぁ、行こう」

そう言ってアサノブはポケモンセンター の出口へ向かう。

「荷物をとってこないと.....」

「荷物はここに全部ありますよ」

ん?

ミズホが既に部屋に置いてあった荷物をすべて持ってきていた。

私はこう言うのをすぐに済ませるタイプですよ」

手際がいいね.....」

# そしてマサムネ達は荷物を持ちポケモンセンターを後にした。

おや。準備に少しはかかると思っていたが。早かったね」

「マサムネさんには私がいますからね」

けど 「おやおや、 いい彼女がいるんだね。まぁ年齢的には早い気もする

そう言ってニヤニヤしながらアサノブはこちらを見ていた。

「さて、この船が俺の友達の船さ」

その船はでかい。

個人所有のものにしてはでかい。

「お前って金持なのか?」

ん ? 一応グレンで一番大きな旅館の息子かな」

そう言って船に乗り込むアサノブ。

゙.....ま、こう言う付き合いも必要よね」

そうですね」

そして二人も船に乗り込んだ。

### 第四一壊 こいつ! なんて使い勝手の! (後書き)

これらは第一部では登場はない予定です。 ヘラクロス・ラッキー ・そして化石より復元されたポケモン

446

## キャラクター紹介 (第一部版 終盤)

流れに乗る (事しか許されない) 冒険者

マサムネ (15) CV:緑川光 (仮) 出身:イッシュ

そしてミズホのマサムネ絶対上主義には何も言えない。 すこしSに目覚めているかもしれない。 いろいろと悩むことが多くなってしまっている。 中盤から突如シリアスシーンが追加され始めたため

相棒

シモン (モグリュー ) CV:柿原徹也

シモン以外に中盤で戦闘した手持ちがいない。マサムネの手持ちのエースと言うか未だにモグリューである。

突然変異

シャドウ (ギャラドス C V :遊佐浩二(友人の直感で)

名前はたびたび登場していた。中盤での出番はヘラクロス捕獲時のみ。

ヘラクロス・サユキ

たぶんもう第一部に出番はない。

マサムネ絶対主義

ミズホ (11) □∨:桑島 法子 出身:カントー

身長144cm B85 (H) W 4 8 H 8 0

親子愛と言うものをかなり毛嫌いしている。 マサムネに対しては もはや何も言うことはないマサムネ絶対主義 だがマサムネ以外にはSである。

相棒

トガミ (カメール ) CV:阿部 敦

使い勝手のいいポケモンである。

笑い上戸

リュボ (ゴースト ) CV:玄田哲章

勝手にボールから出で勝手にラッキーを捕獲した。 勢いで捕獲することにしたため出番が少ない。

#### 不思議な奴

カミコ (ピカチュウ ) CV:佐藤 利奈

序盤は活躍していたが中盤から極端に出番がなくなった。

実は金持ち?

アサノブ (13) CV:ヤスヒロ 出身:カントー

ちなみにその宿泊施設は火山で土地が沈没しようとも 実にいい奴であり。グレン一の宿泊施設の息子。 水中に浮き稼働可能らしい。

### 第四二壊(結論はそれでいいかな

「と言うわけでクチバに到着だよ」

「あっという間だったな.....」

クチバの港に足をつけたマサムネ達。

「いや、ありがとなアサノブ。助かったぜ」

「いやいや、ついでだったんだ。構わないよ」

全く真逆の好印象である。 初めての出会いは悪い印象だったが今となっては マサムネのお礼にはずがしがるアサノブ。

この恩はいつか返すぜ」

ははつ。いやいや俺は多々の仲介役さ」

ならこの船の持ち主さんに恩を返さなきゃか」

持ち主と言ってもこの船には乗ってないけどね」

゙そう言えば運転手さんだけだったな.....」

彼女はあまりシンオウから出てこようとしないから..

そう言って少し明後日の方向を見るアサノブ。

なんだ。アサノブの好きな女か」

それは違うよ! 実際の持ち主は彼女の母親.....あ」

「なるほど」

もう! ほら、 彼女が荷物を全部降ろして向こうで

待ってるよ!」

そしてマサムネも何も言わずミズホのいる方へ歩き出した。 そう言いながらアサノブはマサムネの背中を押す。

「やっぱり13歳でも子供は子供か」

た。 15歳と言う子供とも大人ともいえない年齢のマサムネはそう呟い

「マサムネさぁ~ん。早く行きましょう!」

「はいはい」

一人は後ろで出発する船を見ながらヤマブキへのゲートへ向かう。

「お、工事が終わってるなぁ」

「結構な期間工事してましたがヤマブキの人たちはどうやって生活

してたんでしょう?」」

「空輸じゃないかな。さて、早く行こうか」

そう言ってゲートに入る二人。

「このゲートは通るには申請カードが」

「はいこれ」

「あ、確認しました。どうぞ」

そう言って二人はゲートの中に入る。

#### 【ヤマブキシティ】

くんですか?」 「それで、どうするんですか? マサムネさんのお父さんの所に行

かわからんしなぁ~」 「家にも帰らずずっと泊まり込みで開発をしていると言うしあえる

「ならとりあえずジムにでも行きましょう」

「ジムか」

それもいいな、と思いとりあえずはポケモンセンターに向かった....

続く

# 第四二壊(結論はそれでいいかな(後書き)

あくまでほぼです。 なのでこの小説は名前ありのオリキャラはほぼ確実にカップルです。 主人公以外のキャラが幸せにならないのって大嫌いです。

感想はいつでもお待ち中です。

### 第四三壊・1 ジョウトうな話

「ジムリーダーがいない?」

ええ、だいぶ前にジョウトに行くと行って留守なんです」

不 在。 ヤマブキジムに来たマサムネ達だったが、 ジムリーダーのナツメは

ジョウトに出かけ帰ってこないという。

「となるとここは当分後回しか.....」

いね。 トキワも今はジムリーダーは不在だよ」 君そのバッチケースを見るところトキワジムも攻略していな

「え?」

理も後任もできないからね」 「どうやら代理の手続きもしていないようでね。 手続きがないと代

ちなみにキイガはすでに後任との交代の手続きはしてあった。 そのため少し早めることになったのである。

「そんな.....」

まぁ、 大会も一年延期になったわけだしそうも急ぐことはないよ」

そう言うとヤマブキジムの門下生はジムの中へと帰って行った。

なんかすることが突然無くなっちゃいましたね

. しかしジョウトか.....」

· どうしましたか?」

ん? いや.....」

その言葉だけがマサムネの心に残った。ジョウトに行った。

じゃあ、 行くかな。 ポケアイテム株式会社に」

シルフカンパニーに比べたら小さな会社ですよね」

も勝る」 しかし有名度は違う。 モンスターボー ル類の開発ではシルフより

各地方に支店もある。 と言うことと皆さんの胸の中で思っておくことにしてください。

そして開発部の一番偉いのが親父ってわけだ」

本社はここである。

「すごいですねぇ!」

とにかく行っては見るが会えるかは別だな.....」

そう言いながらマサムネ達はポケアイテム株式会社へと向かった。

え?すぐに来る?」

コウイチさんは有給をとらなさ過ぎて困るよ。 やることは終わる

まで辞めないんだ」

せることができる」 ちょうど息子さんも来てくれて助かるよ。 これで無理やり休まさ

ら呼び寄せた理由はそれとは.....) (あの親父は ......お袋と俺をほっておいて......俺たちをイッシュか

まぁ、 すぐに帰れるところに家があってほしかったからということ

である。

ちなみに、マサラタウンにはヘリポートがある。

「と言うわけで。もう少ししたらくるから」

「待っててくださいねぇ~」

そう言ってマサムネの父ことコウイチの部下たちはその場を去った。

しかし.....いよいよ.....か」

あ の。 ですよ? あの事を聞くんですよね.....」

「ん?」

・アサノブさんとの戦いとそして.....過去の....

ああ、あれな.....」

本題は謎の力の事だ。

(しかし、 あの事も聞くのか? 確実になったら.....)

そう思うとマサムネの心は少し悩み始めていた。

円編に続く

### 第四三壊・2 答えなんか知らなきゃよかったんだ.....

おうおう。マサムネ.....なんかしらねぇが俺に会いに来たのか」

マサムネの父親のコウイチがマサムネ達の前に現れた。

へつ。 とりあえず俺用の個室がある。そこで話そう」

そう言ってコウイチはマサムネ達を個室に連れていく。

・それで? なんだ話ってのは」

「それは、これの事さ」

そう言ってマサムネはキー ホルダーを見せる。

なんだ。 俺はてっきりミズホちゃんとの交際発表かと思ったがな」

「交際はしてますですよ!?」

ミズホちゃん静かに。今、それは重要な事じゃない」

「重要で.....いえ、すいません」

#### ミズホは黙る。

紐を通しただけだ」 そのキーホルダーは昔から一族に伝わるものだ。 穴があったから

. 一 族 ?」

「そう、俺たちは螺旋族と言う一族だ....

「 螺旋族 ..... それは一体 ..... 」

ねえしな」 をひくものもいねぇって話だ。 んなもん詳しくはしらねぇよ。 ま、その話をしてくれた俺の親もい もう廃れちまって俺たち以外は血

これだと結局力の事はよくわからない。それを聞いて少し考えるマサムネ。

「ま、お前が旅に出るからそれを送ったってわけだ」

「そう……所で親父も旅に出てたんだよな」

「 あ? あたりまえじゃねぇか。子供の頃は旅しまくりでなぁ。 لح

いうか30代の頃も旅をしていてだな」

「それでこのキーホルダーも持って行って?」

ああ、親父に持たされたからな」

その時に……何か不思議な事が起こらなかったか?」

そう聞くマサムネの顔は真剣だ。

'いや、別に何もなかったぜ」

「そうか....」

なぜ自分だけ.....なぜ自分だけ....

いや、一つだけ考えがある。

しかしそれはいや.....

「親父さ。お袋とは結構年はなれてるよね」

「ん、ああ。今時そう言うのもよくあるだろ」

「今時じゃない時に結婚してるよな親父」

「なんだぁ。何がききてぇってんだ?」

じゃあさ、親父さ」

#### そして聞く一言

「カナって名前のお袋にそっくりな女の人知らない?」 「!? お、おめぇ.....それをどこで.....」

その反応は答えだ。

「つまりは親父.....お袋は.....」

それから出る答えは。

「親父の娘なんだろ?」

次回に続く.....

### 第四三壊・2 答えなんか知らなきゃよかったんだ.....(後書き)

こう言うことなんです。 過去のシオンタウンの話ですでにわかっていた方もいると思いますが

### 愛は絶対 信じた道を突き進む

だがあいつは知らねぇ なんでそこまで知っ てるのかはしらねぇがよ.....その通りだ

過去の話となる。

マサムネの父であるコウイチはイッシュに住むただの少年だった。

そして旅に出た。

そんな時自分についてきたのがカナだ。

幼馴染であり仲の良かった二人はずっと一緒だった。

そして旅を終え二人は故郷に帰った。

そして結ばれたのだが.....カナの親が突然カントー に行くことにな

っ た。

旅をしていたのだから別にカナはここに残ってもい いだろうと言っ

たが

カナの親はそれを無視しカントーに連れて行った。

無論コウイチも追おうとしたが親に止められてしまった。

そもそもカントーに行くにもお金がない。

旅をしていた時はトレーナー のためポケモン教会からお金が出てい

た。

だから旅をできていたのだ。

しかしこの時すでにマサムネ20歳。

協会からお金が出ない年齢となっていた。

それから十数年がたったのち。

コウイチは発明によりお金がたまった。

コウイチの発想はかなりの人に認められた。

そしてその金を元にカントーへと旅たった。

そしてカントーを旅するもカナはいなかった.....だか

そこで出会ったのがヨー コである。

カナに似ていたこともありコウイチは ひかれ始めた。

そして一緒に旅をすることになった。

どうやらヨーコの親は病気で死んだらしい。

写真などは実家に置いてきてしまっていた。

ドジだなと笑い一緒に旅をする二人はそのうち恋仲へと発展した。

年が離れていることを始めは気にしていたがそれも知らぬ間に流れ

その後とある事件が起こった。

ヨー コの実家の祖父が危篤状態だという一報が入った。

そして二人はシオンタウンへ向かう。

そしてそこで見たものはカナの父親であった。

そこで自分はヨーコはカナの娘なのかと思った。

つまりは自分以外の男と.....しかし.....

コウイチは自分の年齢とヨーコの年齢を考える。

そこで一つの結論が出た.....

そしてそれから数日後にカナの祖父は死んだ。

そしてヨーコはカナの娘だった。

そしてヨーコは父親を知らないらしい。

カナはヨーコに父親は行方不明と伝えたらしい。

これは自分も答えがわかる。

そう。これは.....

しかしその時......コウイチに悪魔のささやきが聞こえる

そう。認知していないことだ。

認知していなければヨーコは娘として登録されていない。

そう。 結婚しても法律上問題ないし、 それを駄目だというものはも

うこの世にはいない。

そして....

今に至るってことか.....」

「そうだ……しかしお前は……

いや、いいんだよ親父。二人の愛に間違いはなかった」

「マサムネさん.....」

俺は俺だ。 親父も悪魔のささやきだろうと何だろうと決め手は愛

なんだ!」

マサムネは叫ぶ。

「親父は違っちゃいねぇ! 結論はそれだ!」

そう言ってマサムネは荷物を持ち部屋を後にしようとする。

一俺はオーレ地方に行く!」

一つの疑問は解決した。

地方へ。 そしてもう一つの疑問である力の秘密を知る人がいると言うオーレ

「行くぞミズホ!」

「よ、呼び捨て.....うれしいです!」

そう言ってミズホもその後をつける。

゙゙マサムネ」

そう言ってコウイチがマサムネにあるものを投げる。

パシッ

「これは?」

オーレに行ったら開け。 お前はお前の信じる道を進め」

そう言われたマサムネは笑顔になった。

そしてマサムネはポケアイテム会社を後にした。

「ミズホ。 もちろんですとも! かなり遠いところに行くことになるけどい マサムネさんの行く所に私ありです!」 いんだな」

新たなる旅へ向かうために.....そう言って二人はクチバへと向かう。

### 第四四壊 愛は絶対! 信じた道を突き進む!(後書き)

と言うわけでで第一部終わりました。

長かったです。

と言うわけで次回から第二部がスタートです。

お楽しみください。

### 第1策 ただ目的のために

とある少年が幼稚園に通っていたころ。

彼は周りからは避けられていた。

『普通ではない』と言われた。

子供の親たちは彼から自分の子供を引き離した。

彼は兄弟もいない。

彼を助けるはずの親は父が死んで働き詰めのため助けることができ

なかった。

彼は孤独だった.....そして彼はみんなに愛される英雄になりたいと

思った。

誰もが憧れる英雄へと....

#### 【ミシロタウン】

夜空の下。

空を見ながら決意表明する少年がいた。

私は英雄になるのだ! そして人々の頼られるものへとなる」

少年の名前はトウガ。

年齢は11歳。

しかし、昨年旅に出られなかったのは痛い」

彼は昨年『謎の事故』 により旅に出ることができなかったのだ。

今のまま行くと私は1 0歳で旅に出れなかった臆病者と言うこと

になってしまう.....」

彼が目指す英雄のためにはそういう風評を持たれるのも嫌だった。

ああ、 使えるたびの中のでもいればいいのだが」

そんな時流れ星が見えた。

みもいいだろう」 「流れ星か ..... 非科学的だが今は猫の手も借りたいところだ。 神頼

そして彼は流れ星に願う。

下僕がほしい、 下僕がほしい、下僕がほしい!」

そんな時流れ星がこちらに落ちてくるように感じた。

む ? 星がこちらに....と、 危険ではないか!」

トウガは逃げようとするだが避けられない。

「う、うぉおぉぉぉぉぉ!?」

う、ううむ.....なんだ?」

トウガは起き上がる。

これはどういうことだ.....」

トウガの体の上には小さな女の子が二人いたのだ。

「……なるほど。下僕か」

そう言ってトウガは女の子二人を担ぎ家に帰ることにした。

「願ってみるもんだな」

トウガはそう呟いた。

親が見つかるまで家で暮らしてもらうということになった。 そしてその女の子たちが目覚めた。 その後トウガは母親に倒れていた女の子を拾ったと言い トウガはそのうちに下僕として育てようと思った。

「う……ここは?」

「い、いてて、どこだここ?」

「ここは私の家だ」

母親は内職をしているため対応はトウガー人だ。

あなたの家なのですか」

そうだ。 そんないっぺんに聞かれてもなぁ」 ところでお前たちの名前は、 出身地は、 年齢は?」

そう言って女の子たちは言葉を止めると黙る。

私の名前.....思い出せません.....」あれ? あたしたちの名前って.....」

なに?」

二人は自分たちの名前を思い出せないという。

「「出身地……も」」

「覚えていないか.....」

゙あ、でも年齢は覚えています。 6歳ですよ」

「あたしも6歳」

こう言う子供は進んでいるものだ。

出でいないか調べてくれるらしい」 「どうも6歳には見えんのだが..... まぁいい。 母さんが捜索願いが

そう言ってトウガは二人に用意された寝床を教えて自分の部屋に帰

まった。 その後二人はトウガにより名前を付けられた。 そしてトウガは二人が自分のために授けられた下僕だと確信してし それから数日がたったが二人の捜索願いは一切なかった。

見券)ごが隠れ、 り豆ひと EzaY。 泣き虫でおとなしい方の子をナギサ。

男勝りだが隠れの方の子をヤヨイ。

## 【四年後 ミシロタウン出口】

いよいよ私の英雄へとなるべき旅立ちの日が来たのだ!」

「さすがですお兄様」

兄貴は本気で英雄目指す気なのな.....」

二人は養子としてトウガの家族になったため妹となっていた。

「そうだ。私は英雄となり人々の象徴となる!」

「流石の高い目標です!」

兄貴にならなれるかもな」

教育の成果も出ているようだ。

「ふふふ.....では行くぞ!」

ベイ!」

トウガの後ろを歩くのはタツベイのレジ。

「待ってくださいよお兄様~」

チャモ~」

ナギサの後ろに続くのはアチャモのレン。

たっ キャモ」 .. 待てよ兄貴~」

かくして三人と三匹の旅が始まる。

T o B e

Continued

# 第1策 ただ目的のために (後書き)

いぜんとった質問の結果です。なぜホウエン地方か。

# キャラクター紹介 (第二部版 序盤)

#### 主人公

トウガ(15)妄想CV:福山 潤 出身:ホウエン

英雄になるということに固執している。

それは過去に人から避けられたということが原因であり

人から頼られる象徴となるために英雄を目指している。

過去の出来事から正義や悪と言う言葉が嫌いである。

義妹達には下僕として扱うと言ってはいるが自分を

慕ってくれているため、 この世で一番大事な存在となっている。

見た目は黒髪の短髪でサングラスをしている。

身長は平均より少し上程度。

顔を見たら10人中8人は振り返る男前。

サングラスはそれを隠すためにしている。

#### 相棒

レジ ( タツベイ ) 妄想 C V : 中村 悠 I

凶暴性は全くなく冷静沈着な性格。

トウガの言うことを確実にする。

なお達成できない場合は自分自身に罰を与える。

#### 相方

#### ミコト (ラルトス )妄想CV:半場 友恵

体に精神がひかれているらしい。 結構なレベルではあるが進化をすることなく今に至っている。 純粋な心の持ち主であるトウガにひかれ仲間になった。

義理の妹?

ナギサ(10)妄想CV:中原 麻衣 出身:不明

身長145cm B 7 0 (C) W 4 5 H 8

礼儀正しい性格で少し泣きやすい性格。 トウガが願った時空から落ちてきた女の子の一人。

トウガの事を大好きな兄として見ており

トウガの教育により少しはましになっている。

トウガの夢である英雄になることの手助けならば

なんでもする。

見た目は黒髪ロングでメガネをしている。

相棒

レン (アチャモ )妄想CV:三瓶 由布子

元気いっぱいだが別に猪突猛進であるわけではない。

義理の妹?

ヤヨイ(10)妄想CV:小清水 亜美 出身:不明

身長145cm B72 (C) W49 H 7 0

少し男勝りなところがあるがトウガの怒っている時の命令には逆ら トウガが願った時空から落ちてきた女の子の一人。

えない。

Mの素質はトウガの教育の影響により生まれたものである。

ヤヨイもナギサと同じくトウガの事を大事な兄として見ており

同じようにトウガを英雄にするためなら何でもする。

見た目は黒髪でサイドポニー

相棒

クロウ ( キモリ ) 妄想CV:うえだゆうじ

冷静沈着を装ってはいるが実は熱血漢。

## 第2策 思いの思うままに

ミシロタウンを出発しコトキタウンを目指す御一行。

「.....弱いな」

レジが近寄ってくるケムッソにジグザグマをことごとく倒している。

「お兄様の指示か完璧ですから」

「まぁ、 それもあんだろうけど。レジも強いってもあるんじゃない

·

「ふ、私の頼れる相棒が弱いわけなかろう」

『ふっ』と笑いながらトウガはコトキタウンに向けて歩く。

゙あっ、待てよ兄貴~」

「待ってくださいお兄様~」

【コトキタウン】

「おや? トウガ君じゃないか」

「オダマキ博士か」

オダマキ博士がいた。 ルドワークに出かけていてミシロタウンに帰ろうとしていた

「こんにちは」

· どうも」

がいる。 後ろにはオダマキ博士の助手になりにカントー から来たという二人

少し遠出をしてしまったよ」 「いゃあ。この二人がいてくれるおかげでいろいろ楽になってね。 以前よりまして酷くなってしまったか」

やれやれといった顔でオダマキ博士を見るトウガ。

「しかし女子の人たちは仲がいいですね」

「私たちは夫婦なのよ」

ナギサの言葉に助手の一人が答える。

「へえ~」

そう言いながらトウガの方をナギサは見ている。 トウガはその視線の意味をわかってはいるが何も言わない。

「それで、お二人お子さんはいないんですか?」

すると助手二人は顔が悪くなり黙る。

「いや、ちょっといいかな」「なぜ黙っているのだ彼らは」

オダマキ博士がトウガを連れて少し離れたところでこそこそと話す。

と仲良くする方法がわからないらしくてね」 彼らね、 子供さんと仲が良くないらしいんだよ。 どうも子供さん

なに?」

子供がいると研究がはかどらないからと言って預けたらしい」 「そう思うんだけどね.....彼らが彼らで解決するのを待っているん 「それは確実に親子間の歪みができるのではないのですか?」 「そもそも彼らの子供さんは彼の実家に預けられて いてね、

てほしいと思っているらしい。 オダマキ博士も一人娘がいるので助手二人には子どもと仲良くなっ

が 「まぁ。 そのためには研究と言うものを捨てねばならぬのでしょう

んとはうまくいっているようだし」 「そうでもな いけど思うけどねぇ。 彼の父親のあの人は二人の娘さ

「ふむ?」

(それはつまり父親が研究者と言うことか。 しかしこの親.

トウガは自分の母親と比べた。

どうもこの夫婦は自分の子供の事などどうでもい 自分たちの研究が優先と言ったところのようだ。 いらしい。

(まったくの屑だな。 母さんと比べるのも失礼なレベルだ)

トウガはあの助手夫婦の事を屑と認定したようだ。

(まったく.....くだらない.....)

(お兄様.....どうもあのご夫婦が気に入らない様子)

(兄貴はああいうの大嫌いだからな~)

. では、博士。私は失礼する」

む、そうか。 君にはあの関係は気持ちよく思えなかったか」

. 私の過去は知っているでしょう」

「あの時は私も忙しく助けられずに.....」

いいんですよ。博士は博士なりに助けてくれましたから」

そう言っ てトウガはコトキタウンのポケモンセンター へ向かった。

· · · · · · · ·

· · · · · · ·

· ...... J

トウガはまさに不機嫌ですと言う顔をしながらポケモンセンター の

個室にいる。

「あのお兄様?」

なんだ」

「お兄様には私がいますよ」

「そうそう。あたしもいるよ」

そう言ってトウガの両脇に座る二人。

それも、 そうだな. 私も敏感すぎるのか知れんな.

# 第2策 思いの思うままに(後書き)

結果なんて見えていたようなものです。あの夫婦は子供付き合いが悪いです。もはや何も言うことはないですが

## 第3策 考えの考えるままに

トウカシティへと向かうトウガー行。

. 少し離れてはくれないか?」

離れたら寂しくなりませんか?」

寂しくなる時もないとは言わないが常時これでは困る」

ナギサはトウガにべったりである。

ヤヨイはそれをうらやましそうに見ている。

「とにかく離れてくれないか。歩きにくい」

そう言ってひっつくナギサを無理やりはがす。

「そうですか。 寂しくなくてよかったです.....」

どうもナギサがさみしいようだ。

(やれやれ、やはり10歳は10歳だ.....)

トウガはこれからの旅が少し不安になった。

#### トウカシティ】

私に聞かれても困るがな。 シティとタウンの境界って何なんでしょうね」 そんなもの目的のためには必要のない

#### 知識だ」

そう言ってトウガはポケモンセンター へと向かった。

## 【ポケモンセンター:個室C】

しかしまぁよくこんな部屋に泊まれるお金がありますね」

まぁ、 すべてはあいつの資金提供のおかげだがな」

「ああ、確かジョウトの」

た.....それからというもの意気投合しかれこれ通信でしか話をして (そう。 いないが5年の付き合いだ......しかし少し前旅に出てから連絡はな い……奴なら大丈夫だとは思うが……) 奴とは事故の後に病院で会ってから何か感じるものがあっ

トウガは悩んだが悩むだけ無駄と判断した。

になり目的への資金もたまった」 しかし奴の発明品は役にたった。 母さんの仕事の負担が3分の1

「ふふふ。 そうですね」

### 三人は少し笑顔になる。

などいないのだからな.....事故として見られるだけだ」 「ふふふ......そんなものばれなければいい。 でもさ、された相手の命の事を考えないのってどうなんだ?」 そんなことをする人間

そう言ってトウガは荷物の中にあるものを見る。

やつですね」 「下らんがな」 「ふふふ。悪と見られているものを倒せば倒したものは正義と言う まぁ、 使うことのないのが一番いいのかもしれぬがな」

するためだけの言葉だ) (正義だの悪だの。 そんなものはそれぞれがすることの理由に納得

それはそうだ。正義の反対は正義。

そして悪の反対は悪。

それも正しいということになる。

そして英雄はそれとは違うものだ

英雄とは象徴だ、人々の視線をすべて一つに集める。

英雄は悪でも正義でもない。

「まぁ、それはそれとしてよ、兄貴」「つまりはどちらでもあると言うこと.....」

話の腰を折ってヤヨイが話しかけてきた。

「ここのジムの事なんだけどよ」「今からがいいところだったのだが.....なんだ」

そう言いながらヤヨイはパンフレットをトウガに見せる。

そろそろ引退するっていう爺さんなんだけどよ」

「ご老人か。で、それがどうした」

ダブルバトルしか受けてくれねぇらしいんだわ」

そうか。しかしルールは知っているだろう?」

トウガがそう言うとナギサがルールブックを取り出した。

ュの5地域のチャンピョンを決める大会」 今回の大会はカントー・ジョウト・ホウエン・シンオウ・ イッシ

ならない。 でしたね」 そして参加はシングルバトルでダブルバトルは4人一組でないと

「まぁそうだ。 4人目はのちに来てもらえる話になっている」

そう言ってトウガは立ち上がる。

メンバー登録さえしていれば二人で戦い勝っても三人目もバッチ

がもらえる」

「あ、そうだったっけ? あたしそこらの事はすっ かり忘れてたよ」

ヤヨイは抜けてるところは抜けてますねぇ~」

ナギサがヤヨイを見ながらくすくすと笑う。

はいはい。あたしは頭がよくないですよ.....」

そう言って個室にあるペットに潜るヤヨイ。

不貞寝ですか。 なら私はお兄様と寝ちゃ いますよ」

「私はまだ眠くないのだが」

「いいじゃないですかぁ~」

しかしな、 お前だけと寝ると次の日はヤヨイが不機嫌なのだが...

:

「それはそれで気持ちいいっていいますかね。 なんともいえません

<u>!</u>

「そうか……」

そして結局ナギサと寝ることになった。

続 く

# 第3策 考えの考えるままに(後書き)

後半が少しおかしくなってしまった.....

するが..... なんかもっと物語の後半で書こうとしたことを書いてしまった気が いろいろあったためですごめんなさい。

らない。 実はカントーの方にはジムリーダーにしか伝わっていない。 聞かないでそのまま進んでいるのでカントー メンバーはこの話を知 キイガが一度マサムネ達に説明しようとしていたが あと、このルールですがもちろんオリジナル設定。

### 第4策・1 戦いの戦い

「ええ、明日には帰ってくると思うんですけど.....」 ジムリーダーが不在?」

トウカジムを訪ねたがジムリーダーは不在のようだ。

「残念な話ですねぇ」

・また一日滞在しなきゃだなぁ~」

そう言ってヤヨイはトウガの肩に顔を近づけながらそう言う。

゙ で、どうやって時間をつぶしますか?」

ふむ......ここはそれほど人がいる町でもない.....

トウガが悩んでいる。

そんな時。

「てめえなめてんのかぁ!」

「む? なんだ?」

トウガ達の前方で何か騒ぎ事が起こっていた。

お前こんな弱さでジムリーダーに挑戦する気かぁ?」

「うう.....別にいいじゃないか!」

「よくねえんだよぉ!」

いじめている少年の周りには取り巻きがいる。一人の少年を一人の少年がいじめている。

「なんだ、弱い者いじめか」

「大した騒ぎでもなさそうですね」

「つまらんな。解決しても何の得にもならん」

やれやれという顔でポケモンセンター に戻ろうとした その時である。

「あぁん? 聞こえたぞてめぇ」

|面倒な話だ.....

トウガは顔をしかめる。

「てめえ、 よそのポケモントレーナーだなぁ?」

「だとすればどうする」

トウガはやれやれといった感じた。

「ジムリーダーに挑戦する気だなぁ?」

「だとすればどうする」

トウガは少し笑った。

くぞ」 ر کړ 同じことばっかり言いやがってよぉ! わかっていることを言う必要はないな。 なめてんのかぁ?」 ナギサ、 ヤヨイ。 行

そう言ってトウガはその場を後にしようとした。

まてよぉ! 俺たちと戦いやがれ!」

「ほう。3対3の変則バトルと言うことか?」

「そのとぉりだぁ!」

「ふむ。ナギサ、ヤヨイ。やるぞ」

そう言ってトウガはいじめていた奴らと戦うことにした。

「ちょっと兄貴。なんでこんな奴らと.....」

「いい練習台だ。私たちのな」

「なるほど。流石はお兄様」

「ふふ。井の中の蛙大海を知らずというものだ」

そして戦いが始まる.....

後半に続く

「いくぜェ!」

3人組は全員がジグザグマを出してきた。

全員同じか。 チームワークが優れているのかいないのか...

でもこの街でいいところがこれだとジムも知れてますよ」

「引退寸前の爺さんだもんな」

お前達。そういうことを言うとこの街のものから嫌われるぞ..

どうやらもう一度始動しなおさなければいけないなと やれやれといった表情をトウガはしている。

では、行って来い、レジ!」

「遊んであげなさい、レン!」

「やってこいよ! クロウ!」

ポシュウンー

「ベイ」

「チャモ!」

゙キャモ」

そして3対3のバトルの準備が整う。

へつ。 同じポケモンでもチームワークがいいかはわからんがな.....」 珍しいポケモンでもつぇえとは限らねぇンだよォ!」

そして戦いが始まる。

「囲んで一匹ずつつぶしてやれェ!」

ジグザグマはレジを囲む。

「そうかもしれんな。レジ!」「ふふ。レンとクロウの出番はありませんね」「馬鹿だね。レジを囲むなんて」

そして叫ぶトウガ。不敵に笑う二人。

「ジグッ!?」「ジグザー!」

りゅうのはどうにより跳ね跳び倒れる。レジから発せられるレジに突撃していった三匹が

まだ終わってねェ!」 私の相棒は凶暴だ。 なんだとオ!?」 ただの集まりには勝てぬよ」

グザアー!」

倒れていたうちの一匹のジグザグマがレジに襲いかかる。

グザッ!?」

· キャアモ」

突然現れたクロウのおいうちによりそのジグザグマも倒れる。

「グザグザー!」

「ジグザグー!」

他に倒れていた二匹が起き上がりたいあたりをしかける。

「ほう。体力だけはあったようだ」

「でもあんまり意味ないですよね」

その言葉通りだった。

「キャアモ」

「グ、グサッ!」

「タツベッ!」

「ジグッ!?」

レンのつじぎりと、レジのずつきにより

残りのジグザグマも戦闘不能となった。

「弱い者をいじめるのは屑のやることですよ」

ろう

「これで弱い者いじめなどやめるのだな。

身をもって思い知っただ

ってことさ」 そゆこと。 そしてそう言うかわいそうな子は兄貴が助けてくれる

三人はニコニコしながらその場を去って行った。

弱い者いじめを見逃せないなんてすごい!」かっこいいなあの人!」

ざわざわとやじ馬達が騒ぎ出す。 それはまるで漫画やアニメのヒーローを見たような感じだ。

「まぐれだァ?」んなわけあるかよォ!」「ま、まぐれですよ.....」「お、親分.....」

初めての敗北を思い知った。彼は負けたのは初めてだ。

「俺は強くなくちゃいけねぇンだよォ!」「お、親分?」「ちくしょォ!」俺は.....俺は、俺はァー!.

彼を自分たちの目的の道具として使っただけであった... そしてやじ馬がヒーロー とあがめるトウガ達は 彼の叫びは子分たち以外はだれも聞い ていなかった。

#### 第5策 強いのきもち

しかし、 つまらぬものだったな.....」

へっへへ。あたしたちに勝てると踏んだあいつらがおかしいのさ」

その通りですね」

三人組は近くの草むらに来ていた。

いいポケモンがいたら捕獲するためだ。

やっぱりそうそういないんだよ」

しかしこの近くに珍しいポケモンはいないようだな」

ですね」

目的にあったポケモンはいないようだ。

もう少し良く.....「「お前ら!!」 」 む?」

よくも親分をあんな目にあわせてくれたな!」

何も話さなくなっちまったのはお前らのせいだ!」

先程の三人組の子分二人がやってきた。

頭が落ち込んでそれへのお礼……と言うことか」

くだらないです~」

くだらないねぇ~」

んだとてめえええ!」

三人が子分たちを馬鹿にすると子分の一人が殴りかかってきた。

パシッ

ポケモンバトルで勝てないとわかると力ずくか。 弱いな」

「んだとぉ!」

ドガッ

「んがっ!」

「女のあたしたちは弱いとでも思った?」

ヤヨイが子分の一人を回し蹴りで倒す。

ビリッ シュ

かよわくても強いんですよ~」

腕装着型スタンガンでトウガが手をつかんでいた奴を気絶させる。

「違いのわからない奴らだ.....」

《面白い人達.....》

む?

どこからか声がするが誰もいない。

「お前たちではないな.....」

「え、何がですか?」

「なんかあったのか?」

聞こえていなかったということはテレパシーの一種か」

《そう言うことになるかもね.....》

再び頭に声が聞こえる。

「上? む?!」 《ここよ》 『とこだ。どこに」

頭の上には一匹のポケモンがいた。

《ふふ。私が声の正体。ラルトスよ》

そこにいたのはきもちポケモンのラルトスだった。

# 第5策 強いのきもち (後書き)

自分の小説を書く時間が短くなってきた。この頃他の人が書いた小説を読む時間が増え

やばいな、昔のようになってしまう.....

## 第6策 思いの名前

# 【ポケモンセンター個室:乙】

「で、何なんだお前は」

《何なんだとは失礼な。私はラルトスよ》

「それは種族名ではないのか?」

《だって名前はないもの》

トウガの頭の上には未だにラルトスが乗っている。

兄貴~会話してる感じだけどあたしらには何も聞こえないよ~」 お兄様だけが会話できる.....素晴らしいじゃありませんか!」

どうもほか二人にはラルトスの声が聞こえていない。

「なぜ私にだけお前の声が.....」

《ふふ。あなたは純粋よ》

「純粋?」

《そう.....だからこそ面白い.....》

面白い? 私の考えていることは面白いとは思えんがな」

純粋よ。きっとあなたといれば私は進化できる》

一緒にいたいというと私に何か利点はあるのか?」

《私これでも強いわよ》

ラルトスは腕をあげながらトウガの頭の上でジタバタしている。

ならこのボールに入るがいい」

《ええ、よろしくねご主人》

# そう言ってモンスターボールの中にラルトスは入って行った。

「と言うわけで新たな手駒だ」

「どういう流れかはわかりませんが新入りさんですね」

「使いもんになるといいねぇ~」

そう言ってボールからラルトスを出す。

「と言うわけでお前に名前を付けてやる」

《いい名前を頼むわよご主人》

「いい名前か……ふむ……」

トウガは少し悩む。

(いい名前はすぐに思いつかぬものだ..... いい名前、 いい名前

「よし。お前の仲間が決まったぞ」

《決まったの? じゃあ私の名前は?》

「お前の名前はミコトだ」

《ふうん。ミコトね。ミコトかぁ~》

するとミコトは再びトウガの頭の上に上った。

《私の名前はミコトよぉー!》

「……やはり見た目通りだ」

ミコトは大人になりたい子供のようだった。

「頭が痛い」

《あら? 大丈夫?》

゙ お前のせいだが.....」

朝起きると頭の上にはミコトが乗っていた。

兄貴、おはよ~」

「おはようございます。

お兄様」

ナギサとヤヨイも起きる。

「とりあえずは今日こそジムに挑戦するぞ」

《私の初陣よ》

「そうだな。そうしよう」

なんだか二人しか分からない会話なんてしてずるいです」

「そうだな~」

《あら、嫉妬かしらね。怖いわご主人》

....

(計画に支障が出なければいいが.....)

トウガには不安しか残らなかった。

【トウカジム】

私がこのジムのジムリーダーのノマルだ」

あなたが.....」

昨日はうちの孫が世話をかけたようじゃの」

昨日? ああ、 あの勘違いをしていた奴か」

昨日の集団の親分の事であろう。

奴は私のために強くならなきゃいけないといって何もきかんでの

なるほど」

(祖父がためのあの行動か。 欲に忠実だ)

トウガはあの少年に共感を覚えた。

「ダブルバトルだが......どちらが相棒だ?」「まぁいい。では戦っていたただこう」

今回は私です!」

そう言うとナギサがトウガの横に歩いてきた。

私とこのナギサの二人でだ」

そうか。 では戦おう」

後半に続く

感想お待ちしております。

514

# 第7策・2 本当の本当

《私の初陣は華やかな勝利で終わらせてあげるわ》 では、初陣と行こうか」

·レンもやってやりなさい!」

・チャモ!」

フィー ルドの中央にミコトとレンがたつ。

「行くがいい。ゴニョニョ、エネコ」

------------------

「||m||m-!」

ノマルはエネコと繰り出した。

「試合開始!」

そして戦いは始まった。

「 丌二|ヨオオオオオ!」

ゴニョニョがさわぎ出した。

《るっさいわねえ.....》

「チャモチャモ~」

《あんた、それ本気で言ってるの?》

「チャモ」

《まぁいいわ、乗ってあげる》

チャモ!」

テレパシーで会話しているためさわぎの意味はない。 しかし頭に響く大声によりダメージは受ける。

「ネー!」

エネコはエネコも叫びだした。

「ネコのてか。 意味があるようには見ないが.....」

あるのか?) (そもそもポケモンのレベルが低い……用事というのが何か関係が

いくだろう 「ミコトはレンの案道理に動くということだが。あの案ならうまく

\_ | ■~ <sup>¬</sup>

「ネ~

少しずつ叫びが小さくなってきた。

ネ?」

「||国?|

ダメージは食らっていたはずだが。 戦っていた二匹の姿がない。 とまりかけた時にエネコとゴニョニョは周りを見る。

《はい落下》

「ネ?」

「||国、||ヨ!?」

上から眠っているレンが落ちてくる。

「ネエ!?」

気づくことができなかったエネコはレンにのしかかれてしまう。

「チャ.....チャモ!」

《ちゃんと起きたわね……起きなかったら失敗だったわよ》

「チャモォ!」

《まぁ、短い付き合いだしね》

少し二人は言い争いをしている。

「||ヨ||ヨオオ.....||ヨ?」

隙を突こうとしたゴニョニョは空に舞う。

《まぁ、騒がなくちゃ別に何ともないわね》

さらには締め付けられ苦しめられる。 サイコキネシスによりゴニョニョの動きは封じられ

《そんじょそこらのサイコキネシスと一緒にしないでね。 私は結構

強いのよ?》

「||ヨ.....||ヨオオオ」

も 《この縛りから逃げようとしている? 根性だけはあるのね..... で

タッタッタッ

「チヤアアアアモオ!」

「||ヨオオオオ!」

《これはタッグバトルなのよね》

レンのつじぎりにより戦いは終わった。

私の負けだな.....」

何があったのかは知らないがあなたは本当の力の少しも出せ

ていないようだ」

そうかな.....しかし負けは負けだバッチを持っていくがいい」

そう言って渡されたパッチをトウガは受け取る。

度戦おう.....」 「まぁい ſΪ 私の勝ちは勝ちだ……あなたが本気を出した時もう一

そう言ってトウガは出口へと向かった。

「兄貴はかっけぇなぁ~」「流石はお兄様です」

そう言って二人も付いていく。

《私は強いのよ~》

「頭の上で動くな……」

ミコトはやはりトウガの頭の上で踊っていた。

「本気か.....私ももう長くはない.....」

三人の後姿を見てノマルはそう呟いた。

続く

# 裏第7策(少年は性根は正直)

「俺はぁ.....俺はぁ.....」

あの三人組のリーダー。

ジムリーダーの孫は悩んでいた。

「強くならねぇと……強くならねぇと……」

少年は唸る。

彼は強くなりたかった。

「俺はジムリーダーの息子なんだぁ ..... あの!」

彼は今のジムリーダーの孫だ。

息子などではない。

「強くなきゃならねぇンだぁ……強くよォ……」

彼は唸る。

うなり続ける。

「親父のよすに俺はア強くなる」

彼は唸りながら荷物の整理をしている。

「 ジグ」 「 相棒よぉ 」

そう言って彼は家を後にして旅に出ようとする。

「旅に.....でるのか?」

ノマルが家を出ようとする少年に話しかけてきた。

「とめんなよォ、ジジイぃ」

とめぬさ.....奴とお前はそう言う所で似ておる」

ノマルは何かを懐かしむような顔をしている。

俺が返ってくるまでにジジイは死んでるかもしれんなァ」

「そしたらお主の帰ってくる場所はないぞ」

場所.....か。いずれは帰ってくるさ。このジムにな」

私の保険金はちゃんとお前を受取人にしとるでの」

へつ。 俺が家を持つのはこのジムのジムリーダーになった時。 そ

そう言って少年はその場を去る。

たかったわ.....」 「親に子は似るものだな。 私も奴がジムリーダー になるのを見てみ

ノマルは少年を見ながらそう呟く。

あのトウガと言う少年がすべての始まりとなった」

ノマルはそう言ってポケモンセンターを見る。

あの少年があやつを動かし、 今を進めようとしておる」

「欲に忠実は【人間のさが】と言うものじゃ」

歩いて行く少年を見る。

「頑張るのだぞ。レイタよ」

ノマルは旅ゆく少年レイタをただ見つめ続けるだけであった。

続く

# 第8策・1 思いの森の

目的は達成されたようには思えぬが次の町へ行くことになる」

· カナズミシティか~」

「都会って感じの所らしいですね」

三人は荷物の整理をしながらそう言っている。

「そう。そこに行くには森を通る必要がある」

《いやね、虫が多そうで》

「虫が多かろうと何かろうと突き進むのみだ」

別にそんなの気にしねえし」

「そもそもポケモンは虫とかでてきませんから」

演出上出さないといわれていたがこの頃は元から存在しないと言わ

れ始めた

だとすればアニメなどでみんなが食べている海の幸とは.....

ケモンはあまり生息していないようだ」 まぁそんなことはどうでもい い。あそこはケムッソ以外のむしポ

「森なのにですかァ~」

別にどうでもいいけどな。 レンがいれば楽勝じゃ

「火に弱い奴らばかりでしょうし」

「ナマケロもいるのだがな」

そんなこんなで一行はトウカのもりに向かった。

「なんかむついな」

「ああ、むつい」

「むついです~」

だ。 むついとは何だと思うだろうが以前マガジンで見た記憶のある単語

なんとか町内会という作品だったはず。

「助けてくれぇぇえ!」

助けを呼ぶ声が前から聞こえてくる。

面倒な声が聞こえますよ」

たしかにな。 こう言う所で人を助けるのは正義馬鹿だけだ」

そうそう。ただの偽善者です」

そう言って声が聞こえる方から離れて先に進むトウガ達。

トウカのもり:カナズミ側出口付近】

「出口です~」

「面倒事に巻き込まれなくてよかったな」

その通りだ。 目的通りに進まぬなどいいことはない」

そう言って一行はカナズミへと向かった。

忙しくて...... 短くてごめんなさい!

### 【カナズミシティ】

「ここがカナズミか」

「確かにミシロタウンに比べれば都会ですね~」

ナギサは周りをきょろきょろと見る。

やめろよそんなに周り見るの。田舎もんだと思われるだろ」

「そうだ。私の目的の妨げとなるかもしれん」

なせ すみません。昔見た所より田舎に見えて.....あれ?」

その言葉を聞くとトウガは疑問の表情になる。

お前たちは4年間はミシロとコトキ以外には行っていない

はずだが」

「え? あ、そうですね.....あれ?」

「そう言えばあたしたちって記憶喪失だっけ」

「そうでしたね。なぜ忘れて.....」

そもそも二人はなぜ空から降ってきて記憶喪失だったのか。

それはいまだ謎。

- .....

(記憶か....)

そんなことはどうでもいい。 早くポケモンセンター に部屋を取り

#### に行くぞ」

そう言ってトウガは一人ポケモンセンターへ向かった。

あ、お兄様~」

、ま、待ってくれよ兄貴~!」

そして二人も後についていくように走った。

## 【ポケモンセンター】

なに? 部屋がないだと?」

はい。 今日に限って泊まりに来るトレー が多く..

「くっ。他に泊まれるところはないのか」

トウガは受付の机を叩きジョーイに問い詰める。

あ、そうですね.....あ、そうそう。 あそこなら貸してくれるかも」

· あそこ? それはどこだ」

少しカナズミから離れますけど。 サン・ トウカという花屋のすぐ

横にある宿屋です」

「宿屋?」

そんなものがあっただろうか。

トウガは少し思い出そうとする。

あんまり目立たないんですけど。 三姉妹が経営しているんです」

三姉妹?」

女の子たちですよ」 「ええ、親に先立たれた三姉妹なんですけどね。 あなたと近い年の

「ほう....」

(親を亡くして働く姉妹か.....面白い)

「ならば行くぞ。そのペンションに」

「え、森の近くにもどんの?」

「そんなこと言ってないで。戻るらしいですから戻りましょう」

そう言って一行はトウカのもりの方向へ戻ることとなった。

続く

#### 第8策-2 設置の不備(後書き)

その人たちって自分の小説は読んでくれてないのかな。 感想を待ってる小説には感想を書いているが

け。

ところでホウエンのサン・トウカの三姉妹の名前ってなんでしたっ

裏第8策 双方は通行 (前書き)

## 裏第8策 双方は通行

#### 【トウカのもり】

あの野郎はもう先に行きやがった見てえだなぁ~」

トウカのもりをうろつくレイタ。

- コチェンフコン・シーに関うに対しているの野郎ことトウガを超える男になるために。

一日ほどトウカのもりを寝ずに散策していた。

あいつより強くなる前にあいつに会うっつうのもなぁ~」

もう一日散策するかとトウカ方面近くに戻ろうとしたその時。

「助けてくれぇぇえ!」

「な、なんだぁ?」

前から突然男が走ってきた。

「助けてくれぇ!」

「スバメの群れだぁ!?」

突如スバメの群れに襲われている男がレイタめがけて走ってくる。

「なんでこっちにきやがんだぁ!」

「助けてくださいぃぃぃ!」

イタの言葉も聞かずに男はレイタめがけて走ってくる。

マッス!」 アクセラ!」

彼らは別に弱いわけではなくもうすぐ出進化するレベルだったのだ。 レイタが呼ぶアクセラとはあのジグザグマが進化したものだ。

「マッアアアアス!」「やつちまえぇ!」

.

突然あたりに波が現れスバメたちは波にのまれ行く。

へつ。 なみのりにのまれて死にな雑魚がぁ!」

ちなみに祖父の友人にもらった秘伝マシンで覚えたのだ。

「たっく。 閉じこもりきりもいいがそろそろポケセンにいかねぇと

そう言って仕方なくカナズミの方へと向かう。

ガシッ

「んぁ? そう言えばそうだったなぁ~」「助けてくれてありがとうね」

レイタはそのことをすっかり忘れていた。助けを求めていた男がお礼を言ってきたが

「そうか、じゃあな」「いやぁ、私の名前はシツというんだ」

話を無視してカナズミに向かおうとするレイタ。

なせ、 いや、 俺は急いでるからぁ~」 ちょっと話を聞いてくれよ」

そして無視して先に進もうとする。

ガシッ

んだけどさ」 「私はね、ポケモン解放会という会の副会長でね。会員は10人な

「あーはいはい。 わかったわかったぁ~」

ブゥンー

「行くぞアクセラ!」

シツを振り払いレイタはカナズミ方面へとアクセラとともに駆けて

「まだお礼もしてないのに.....あ、カイナへの定期船に乗らないと

行った。

そう言ってシツはトウカ方面へかけた。

# 第9策 殺意の揺れ (前書き)

スラマッパギーあ、みなさん。

始めてみてくれる方待っていてくれた読者の皆様お久しぶりです。

第一部から見てください。

お疲れ様です。 今日はじめてみて第一部の一壊この話まで見続けた人

第一部とは毛色が違いますよ。この話を見て一から見るか考えた人

かみ合わない感じですのでごめんなさい!そしてこの挨拶は後付けなのでこれ以下と

ん? スラマンラマムだっけ?ではみなさんスラマンマラム。

バックアップしていなかったのでもはや言うことはなかった。 初期化してデータが全部消えていた。 修理に出したパソコンが返ってきた。

ていた 修理に出している間は仕方なく昔使っていたノートパソコンを使っ

た。 4月の28日に出た宇宙が舞台のシミュレーションゲームをしてい

気が付いたら二週目は50ターン削減でクリアした。 というわけで次は北から攻め西に攻めてクリアした。 とある国を攻めていたらグロいことになった。

だがノーマルEDしか見てない。 なんか通常とは違う 編とか出てきた。

吐き気を催し夜寝れなくなった。

酒も飲める歳になろうというに....

ということで気晴らしにスパロボをやってたらもう六週目か..

)れ、これ前書きだったっけ.....

## 第9策 殺意の揺れ

「ここがペンションですか」

言う。 見上げるほどでもない大きさのペンションを見ながらナギサはそう

「何か小さいなぁ」

ヤヨイは正直な感想を言う。

隣の花屋のついでという感じの建物だせ?」

ヤヨイとナギサがペンションについて話している。

「そんなことはどうでもいい。とにかく入るぞ」

トウガは二人の言い争いを抑えペンションに向かった。

うろし

なぁ、兄貴。あれ.....」

受付の所で小さい女の子がよだれを倒しながら寝ている。

· みょうたべられにゃいにょ~ 」

. しかも典型的ですよお兄様」

ナギサはトウガの腕を掴んで少し揺らしながらそう言う。

私たち位の少女たちが運営していると言っていたからな」

゙親にも先立たれてたんでしたね.....」

\_ .....\_

その言葉を聞くとトウガは少し顔をしかめた。

「まぁいい。とにかくあの受付を起こすぞ」

そう言ってトウガ達は受付の近くによる。

'おい。起きろ」

トウガは受付の女の子の肩をつかみ揺らす。

どうやら現実を見たようですね」

んにゅ~にゃんですか、お姉ちゃ

.....なっ

夢を見てたのに現実を見せられるって厳しいねぇ」

現実は夢を壊すのだろうか。

おっ、 お客さんですか! ぉੑ お姉えええちやああ ああ

どたどたと受付の女の子はカウンター の向こうにあっ 向かっていった。 た扉から奥へ

どうやら隣の花屋とつながっているようだな」

というかあまりお客さんが来ないみたいですよ」

いろいろ大丈夫なのか?」

「も、もうしわけありませんでした」

「いや、気にせんよ」

きた。 トウガと同じ年ぐらいの女の子を引き連れて受付の女の子は帰って

私がこのペンションのオーナーをしていますノリコです」

「う、受付のナオコです!」

「ペンションのほうにお客さんが来ることはめったになかったので

.....

女の子たちはあたふたとしている。

「ん<sub>></sub>……」

む? どうしたお前たち」

「いや、ねえ.....」

「なんでもないです.....」

ナギサとヤヨイは不機嫌だ。

「揺れてますよ、あの尼」

「死ねばいいんだよ.....」

「お前たち.....」

リコに殺意を向ける二人を見ながらトウガはやれやれという表情

#### 第9策 殺意の揺れ (後書き)

感想はお待ちしております。

編が出るようですね。 そういや前書きのゲー ムの発売会社からいよいよあのシリーズの続

どれだけ戦国を周回プレイして待ったことか

しかし公式のキャラ紹介.....

これは.....ちゃんと娘なんだよな?

いやだよ他の人のとか.....

あと付いてくるのとほかに勝手に来る人もいるようで.....

しかし確実に来るであろう再世編....

来る可能性の高いOG3.....

そして再び落ちるバイトの面接....

そして来週の日曜のバイト面接.....

とにかく頑張るっきゃないのか!

そういやこの頃ポケモンはアニメのCM以外見てねぇや!

## 第10策(もはやの相部屋(前書き)

後40分早く書き始めればよかった.....

なんかいろいろあって書くのに一週間かかった.....

もう何もすることないかな.....

この分類である。これではそういや友人が真剣恋貸してくれるってさ。

また当分更新しねないかな.....

#### 第10策(もはやの相部屋)

こちらが今日お泊りになっていただく部屋になります」

ノリコの案内により止まる部屋に案内された。

「って二人部屋じゃないか!」

「二人しか寝られない部屋ってことですよね!」

ヤヨイとナギサは突然叫ぶ。

「もはや何も言うことはないが.....」

そう言ってトウガは部屋を後にしようとする。

「ちょっとまってください!」

「ここは私とナギサのどちらかと.....」

もはや何も言うことは.....ない」

そう言ってトウガは普通の人には見えない速さで首を軽くたたく。

「ふにつ!」

「くなっ!」

そう言って二人は倒れた。

「もはや定番すぎる流れなのだが.....

《定番も何も確実に.....》

「もはや何も言うな.....」

もはや何も書くことはない。

「お姉ちゃーん!」

ドタドタとナオコが走ってきた。

もう一人泊まりたいという人が来ちゃったよ~!」

もう一人?」

'もう止まれるようにしてあるお部屋ないよ?」

「二人部屋が二つだしね」

「もはや言うこともないだろうが……私と相部屋でいいのではない

その言葉を聞くとナオコが笑顔になる。

「よろしいんですか?」

ノリコがトウガに少し笑顔を聞く。

もはや何も言わないが......笑顔で聞くものではないと思うが」

あっ。す、すいません!」

ノリコはあわてた顔をして頭を下げる。

いい……とにかく相部屋の件はOKだ」

はい。 では相部屋になることをおつたいしてきます」

· きます~ 」

そう言って二人はドタバタと受付に向かって走って行った。

ようだな」 「このペンションは親の遺志を継ぐために経営しているにすぎない

《維持費や生活費の稼ぎは花屋って所のようね》

もの》 《私だって覚えてないわよ。 知らないうちにいなくなっちゃ たんだ 「親か.....そう言えば私は死んだ父親の顔も覚えていないな.....」

「ふむ」

《だって捕まえられちゃったもの》

「そうか」

かは分からないけどね》 《幸せかどうかはわからないけど。 私みたいにあう人と出会えたの

そう言うとトウガとミコトは黙った。

· おまたせしました~」

「そのようだ……む?」

《どうやら相部屋の人が来たようよ》

ああ?」

ノリコとナオコが連れてきた相部屋の相手は見覚えのある人物だっ

## 第10策 もはやの相部屋(後書き)

感想とか募集中。もはや何も言うことはないけどさ。

追記

そのため40分早く書き終わってればなど言いってるわけすね。 予約掲載したためこの小説が完成したのは0:38分

### 第11策 それの答え(前書き)

バトルなんて起きないけどさ。

彼らには欲がある。

それを今戦っても埋められることはないから。

#### 第11策 それの答え

ろだろうよぉ んでお前がここにいんだぁ? もうカナズミについててもいいこ

「それには理由がある。 やはりだぁ?」 しかし貴様もやはり旅に出ていたのだな」

トウガのやはりという言葉にレイタは疑問を感じた。

「弱者だからな……私もお前もだ」

「弱者だぁ?」

そうだ。 私もお前も弱者にすぎない。 だから欲がある」

「 欲ねえ.....」

レイタにも思い当たる節はある。

トウガに負けた時に強くならなくてはならないという欲に駆られた。

「弱者は弱者だからこそ欲につられる。【人間のさが】と言うもの

だ

「なんか文学的なこと言われても俺には分からないねぇ~」

「ふ、人類すべてが弱者なのかもしれぬがな」

「だからわかんねぇよ.....たくよぉ」

レイタは呆れる。

自分を倒した男はこんな男だったのかと。

文学的で意味不明なことを言う奴なのかと。

意味不明な奴だぜぇ」

# ただレイタの頭がよくないだけかもしれない。

「あの~そろそろお部屋にご案内しても?」

ノリコが恐る恐ると二人に尋ねる。

「む、私は構わないぞ」

「別に俺もいいぜぇ~」

·で、では」

そう言ってノリコは二人部屋に二人を連れていった。

二段ベットかよぉ.....」

別に私はどちらでも構わんのだが」

、なら上に行かさせてもらうぜぇ」

そう言ってレイタは上のベットに乗る。

「ふむ。なるほどな」

「何がなるほどなんだぁ?」

させ、 なんでもない。とくに話すことももうないだろう。 時間も

遅い、今日は眠ることとしよう」

そう言ってトウガもペットにはすり眠りに就いた。

俺ぁこの男に勝つために強くなりてぇんだよなぁ

レイタは小さくそう呟いた。

お兄様と眠ることができない夜は寂しすぎました」 兄貴がいないと寝た気がしないんだよなぁ」

次の日の朝のナギサとヤヨイの会話である。

「お前たちというものは.....」

5

もはや何も言うことはないだろう。レイタが舌打ちをしている。

・朝食をいただいてカナズミへ向かうぞ」

「はい」

「おう」

トウガの言葉にうなずく二人。

「 ……」

そして何事もないように黙りながらテーブルに座るレイタ。

「お前も向かうのだろう?」

「あぁ?」

「一緒に行かないか?」

トウガは少し笑ったような顔でレイタに答えを問う。

んでてめえと行かなきゃなんねえんだよぉ」

「行き先が同じだからだ」

「別にいい。俺はぁトウカの森に戻るからよぉ」

「そうか....」

そう言って二人の会話は終わる。

《恥ずかしいのかしらね彼》

優しさを知らないのかも知れんがな.....だからこその求めか」

た。

トウガはただそう呟きナギサとヤヨイとともにペンションを後にし

続く

### 第11策 それの答え (後書き)

てな訳で感想募集中ですよ。

という人がいるでしょうがまぁまだペンション出ただけだから。 「三姉妹の次女が出てこうへんやんけ!」

てな訳で待て、次回!

出会って数カ月ではこんなものか..... 素で持ってくるのを忘れたようだ。 ちなみに貸してもらえるのは今日の午後に延長となった。

### 裏第11策・1(俺は俺(前書き)

あ、感想もらえると嬉しいのでよろしくです。活動報告にも書いてるけどさ。もうこの頃いろいろ大変でね。

#### 裏第11策・1 俺は俺

「あん野郎はカナズミに帰りやがったかぁ」

ようとした。 レイタはトウガ達が見えなくなったので自分もペンションを後にし

戻るかねぇ」 「なら、 あいつらとはちあいたくもねぇし.....トウカのもりにでも

そう言って荷物を持ちトウカのもりへ向かう支度をした。

「んあ?」

ペンションを出た途端隣の建物が少し騒がしかった。

「なんかもめ事かよ。めんどくせぇ」

レイタは気にせずにその場を後にしようとした。

あぁ?」 ſί お前の店で買った花すぐに枯れたじゃねぇかよ!」 言いがかりです! あなたの管理が悪いからですよ!」

花屋で店番をしていたレイコはクレーマーに文句を言われていた。 リピーターなどではなくこの間一度来ただけの客だ。

たぜ」 「まっ たくよ。 これならカナズミの高級花屋で買ったほうがよかっ

「っ! まさかあなたは!」

「 あ ? 何なんですか? お前の店よりいい店紹介してるだけだぜ

?

「っ! あなたはっ!」

ここで反抗してもレイコはまだ子供だ。

大人のそしてさらに男である相手を殴ってもあまり意味はないだろ

『ガヤガヤ....』

周りの客もどうしていいのか分からないような状況だ。

常連の客というのも少し歳の行った人たちばかりだ。

どうするということもできない。

おら、 買った金返せ! 後俺の心を痛めた分の慰謝料もなぁ

「く.....うう.....」

そう言って男はレイコの服の首元を持ち上に持ち上げる。

「この.....くっ.....」

でこのままかなぁ~」 まぁ店の責任者はまぁてめぇじゃないようだな。 責任者が来るま

ノリコとナオコはペンションにて後片付けをしているためにここに

はいない。

そのため今のこの状況を知らない。

にダメになっちまうぜぇ?」 なんでえ周りのやつらはよぉ! こんな店で買った花なんですぐ

ている。 偶然花を買いに来た若者などはこの男が行動に出てからすぐに逃げ

もはや助けようとする者はだれもいはしない。常連客もただ見ているだけしかできない。

「んなこたぁねぇ」

「 あ?」

「駄目になっちまうのはおめぇだぁ!

レイタは男がしていた光景を見ていた。

(クレーマーってやつか。かかわりたくねぇなぁ...

男とレイコのとある会話がレイタの耳に入った。 そう言ってレイタはその場を去ろうとしたが

「まったくよ。これならカナズミの高級花屋で買ったほうがよかっ

たぜ」

「っ! まさかあなたは!」

「 あ ? 何なんですか? お前の店よりいい店紹介してるだけだぜ

?

「っ! あなたはっ!

その会話を聞いた時レイタの心に何かが響いた。

(弱い奴をつぶすってやつかぁ.....)

そんなとき少し前の自分を思い出す。

最強であるトウカに雑魚が挑むなど許せなかったからだ。 トウカジムの挑戦者である弱い奴らをつぶしていた。

でもそれはただ弱いものをつぶして楽しんでいるだけだった。

(他人の視点から見てやっとわかるってことかよぉ.....)

自分はあの男と同じだ。

弱いものを潰し、最強を守るということに固執していた。

(..... そしてこの店のやつも)

その時レイタの心に何かが生まれたようだ。

(しかたねえ。やってやろうじゃねぇか!)

そう思っ でいた。 た時にはすでにレイタの体は男のほうへ向かい腕をつかん

「んなこたぁねぇ」

. あ?

駄目になっちまうのはおめえだぁ!

俊半へ続く

### 裏第11策・1(俺は俺(後書き)

まぁ、別にそれでいいならいいかなって......とりあえず報告があるまで無視している。 この小説を何度か見返すと誤字が見つかることがあるが

## 裏第11策・2(無知はお前(前書き)

そこまでが書けないとは..... すでに第三部の構想が思い付き始めたというのに。 少し時間が空いても手が動かないんですよねぇ。 この頃諸事情で忙しいんですがね。

#### 長第11策・2の無知はお前

「誰だお前?」

「隣のペンションのお客ってやつだぁ」

゙その客がなんだぁ?ヒーローのつもりかよ」

その言葉を聞いてレイタはにやりと笑う。

「違うなぁ~ ペンションで朝食とるにも隣がうるさくて仕方ねぇン

だよぉ!」

「ぷっ。 はぁっはっはは~ 隣の貧乏宿に泊まるほど落ちぶれた

やつがいるとはなぁ」

「う、うちのペンションはそんなっ!」

てめえは黙ってろや!」

『ドカッ』

「がはっ」

「.....落ちぶれてんなぁてめぇはよぉ」

「んだとぉ?」

「屑は屑だって言ってんだよぉ!」

「てめぇ! 舐めやがって!」

そして男は腰のボールに手を当てる。

「ポケモンバトルだ!」

いぜえ のしてやるよ! この俺がよぉ

「行きやがれポチエナぁ!」

「チナァ!」

男はポチエナを繰り出した。

「へっ」

「何を笑っていやがる!」

即潰しだ!(行きやがれアクセラ!」

レイタはボールを投げる。

「マッースグ!」

なんだ、弱そうなポケモンじゃねぇかよ」

男はマッスグマを見てそう言う。

「無知ってやつは恐ろしいもんだぁ」

「どういうことだてめぇ!」

「へ、教える必要すらねぇよぉ」

なんだと!とりあえずバトルだ!」

男はそう言うとポチエナに命令をし始めた。

「ポチエナ! たいあたりだ!」

「エナア!」

「よけろアクセラぁ!」

「マァス」

アクセラはよける。

「ちょこまかと! かみつくだ!」

「エナア!」

「よけろアクセラぁ!」

マァス」

再びアクセラはよける。

ちょこまかちょこまかとぉ! とにかくやってしまえ!」

「エナア!」

戦法も何にもあったもんじゃねぇな.....とにかくよけておちょく

っとけぇ~」

「マァス!」

そしてアクセラはポチエナ攻撃をことごとくよけまくる。

「きいい 逃げまくるだけしか能がないのかよその雑魚ポケモ

ンは!」

「......はぁ。無知ってのはおっそろしいねぇ」

「雑魚がいきりやがって」

「はっ.....終わらしてやれ。アクセラ」

レイタが鼻で笑い、 アクセラにそう命令したとき。

「エナア!?」

っ た。 そこには倒れたポチエナと勝ち誇った顔をしたアクセラしかいなか

そ、そんなバカなぁ!?」

く、く、こんなの認めねぇ!」俺の勝ちだ。さっさと土下座して帰れ」

そう言って男はレイタに殴りかかった。

が。

『パシッ』

無知は無知なんですかぁ~? 格下くんよぉ~」

ひっ! ひいいいいいい!

そして男は倒れていたポチエナを抱えてその場から逃げだした。

はっ.....めんどくせぇ戦いだったぜ」

「あ、あの」

「あん?」

「助けてくれて.....」

はっ ! 朝食とるにも隣がうるさくて仕方なかっただけだぁ」

そう言ってレイタはその場を去ろうとする。

お礼を!何かお礼を!」

をする。 ふつ。 だから飯の値段を少しまけるぉ」 ならよ。 当分あのペンションを拠点としてポケモンの修行

「あ、少しって.....」

「10円位安くすればいいだけだぁ

え?」

さて飯にすっかぁ」

そう言ってレイタはペンションに戻って行った。

「はぁぁあ....」

レイコはただじっとレイタを見ているだけだった。

「あれ? 「あら? レイコどうしたの? ぼーっとして.....お~い?」なんか騒いでたみたいだけど何があったのかな?」

今来た二人は何が何だか分からなかった。

続く

## **裹第11策・2(無知はお前(後書き)**

感想お待ちしております。

そしてこの頃自分の小説を読むということをして

昔のと比べると書き方がだいぶ変わりすぎていた

名前「」

って書き方だったんだよなぁ昔。

そんなの小説じゃねぇとかさんざん言われて変えたんだよなぁ。

懐かしいなぁ.....

成長できてるのかなぁ.....

### 第12策 何かの事件 (前書き)

サブタイトルそのまんまやないか!

後感想大募集.....

この頃忙しいぜ.....

#### 第12策 何かの事件

#### 【カナズミシィ】

「お兄様。いよいよジムに挑戦ですね」

間かかっちまったぜ?」 「いよいよって言うけどさ。結局のところここに戻ってくるのに時

ろう 「まだ午後3時だ。誰かが挑戦していようとそろそろ終わるころだ

ペンションからカナズミへと戻ってきた三人。

「とりあえずジムに行きましょうか」

「ジムはあっちに.....」

『ガゴッ!』

む ? 今爆発音のようなものが聞こえたようだが.....」

「何かあったんですかね?」

『ワア〜 オア〜』

逃げまどう住民たちですね。 これはチャンス」

ر کر もらおう」 何があったかは知らないが私が英雄になるために利用させて

そう言ってトウガ達は騒ぎのほうへと向かって行った。

お父様っ!お父様っ!」

女の子が倒れている男性のそばに座りこみ泣いている。

「さて、騒ぎの現場はここか.....」

「何があったんですかね」

ウガ達は近寄る。 何があったのかは知らないが倒れている男のそばにいる女の子にト

他のヤジ馬は女の子にも近づこうともしていないので容易に話すこ とができた。

「何があったのかな?」

「お……お父様が……お父様が……」

「お父様がどうしたんだよ」

「何者かに何かをされてそれで!

「何者かにか.....」

「それでその男は?」

あっちに行って......追いたいけど......お父様がっ

そう言って女の子は街の上方向を指さした。

「あっちか.....よし、行くぞ」

「あいあいさー」

一 了 解

そう言ってトウガ達は指の差されたほうへと向かった。

『ざわ・・ざわ・・』

「おい、さっきのやつら.....」

「犯人を追って行ったんじゃね……?」

『ざわ・・ざわ・・』

「危険じゃないか.....?」

この街交番ないから.....」

『ざわ・・ざわ・・』

「そもそも、なんで交番ないんだ.....」

デボンも頼るほどの大警備会社がいるからだろ.....」

『ざわ・・ざわ・・』

「ならその警備会社は何をしているんだ.....」

そういや、なぜ.....」

『ざわ・・ざわ・・』

『ザッ』

「ここで何が起こったんだろうか.....」

### 第12策 何かの事件 (後書き)

そのはずっ! アニメで確認したんだ。・・はちゃんと2つが正解っ! アニメの二期しか見てないけど確実にっ!

## 第13年・1 無口の男 (前書き)

詳しくは活動報告で。なんかコラボに参加することになりました。

【カナズミシティ 北】

.....

男が一人段差の上に立っていた。

· ......

その男は何もしゃべらずその場に立っているだけだった。

- .....

『タッタッタッ』

ふむ。 すでにりゅうせいのたきにまで付いていると思っていたが

:::

トウガはサングラスに手を当てながら男を見る。

「どうやら私が速かっただけのようだな」

トウガの後ろにはナギサ達の姿はない。

の糧となるがいい」 「さて、ここまで来たからには逃げられんぞ... ... 観念して私の名声

-

男は腰のモンスターボールに手を当てる。

・逃げられぬとわかったらバトルか.....」

そう言いながらトウガも腰にボールを当てる。

「タァツ」 「いいだろう、受けてやろう。行くがいいレジ!」

そして男もボールを投げる。

「コイールコイール」

男が繰り出したのはコイルだ。

「ふ、コイルか……」

.....

「何もしゃべらぬか.....」

何も言わず男は手を挙げる。

「コイール!」

そしてコイルが動く。

「戦いの開始か!」

そして戦いの幕が開ける。

# 第13策・1 無口の男 (後書き)

運動能力の高いナギサ達ですらかなり時間のかかる距離です。 男がいたところとカナズミは結構離れています。 トウガ君のすさまじい運動能力の一部が出ました。

#### 第13策-2 無言の男 (前書き)

他の小説更新してましたね~ポケモンはお久しぶりです~ あとポケモントレーナーの名前募集中です~

後コラボとかしてくれる人も募集中です

「コイール!」

男は何も言わないのにコイルはたいあたりを仕掛けてくる。

「無言で命令指示? あの男.....」

「ベイツ!」

そしてレジはたいあたりをよける。

「……レジ。ひのこだ」

「ツゥーベィ!」

そしてコイルの背後からひのこをはく。

「コイール!」

そしてコイルもよける。

「またしても無言で指示を.....」

男が何も言わないでもコイルは的確に攻撃を仕掛けてくる。

「これでは雑魚ならすぐにやられているだろう.....」

トウガは頭に手を当てそう言う。

そしてコイルはソニックブームを飛ばしてくる。

「その程度ならば.....」

レジはソニックブー ムを食らうがそれほどのダメージは受けていな

つめとぎだ!」

「ベイツ!」

そう言いながらレジはつめとぎをする。

コイール!」

その時コイルはレジをロックオンする。

「これは.....レジっ!」 ベイツ!」

その瞬間。

「コイール!」

コイルからでんじほうが発射される!

《ガギゴォー グゥスギィ!》

その攻撃はレジに命中した。

.....

「コイールコイール……コイール?」

勝利を確信して飛びまわっているコイルは何かに気がついた。

..... 馬鹿め。 もとよりドラゴンにでんきは聞きにくい。そして」

まもるをしていたレジにはダメージは皆無だ.....そして.....」

「ベエエエエイ!」

《きゅうしょにあたった こうかはばつぐんだ》

おろおろとしているコイルにレジはかわらわりをくらわせる!

「コ、コイール……」

そしてコイルは戦闘不能となった.....

· ......

- 無言で去ろうとしてもだめだ」

男が逃げようとしていたが既にトウガは背後にいた。

どうやって言葉も発さずに命令を出していたかは知らないが.....

- どうやら始末には失敗したようだな」

.....

《ブンッ》

男は無言で殴りかかってくる。

《ガシッ》

「 最後は自分でか.....む? この感触.....」

......

《ガキャッ》

音がした途端にトウガが掴んでいた男の腕は外れた。

「義手か!」

そのまま男は走り去っていくが.....

「追いつけないとでも思っていたか!」

しかし英雄からは逃げられない。

「貴様は私の糧に.....」

《 カチャ カチャ カチッ !》

. む?

《ブシウゥゥゥゥ!》

「ぬおっ!」

そしてその場には男の体だけが残った。その時男の首は空に向かって飛んで行った.....

「サイ.....ボーグか.....」

「お兄様~」

兄貴~」

「む、今来たか.....」

男が飛んで行ったあとに二人が走ってやってきた。

事件はこのように解決したぞ.....このようにな.....」

うわっ! 首なし!」

こんなの持って帰ったら英雄どころじゃないですよ.....」

いや.....これは.....」

慌てて混乱する二人を見て何も言えなくなるトウガだった.....

# 第13年・2 無言の男 (後書き)

彼だってまだ10代ですよ..... キャラが少し違うような気もしますねトウガ君。

さて.....

#### 第14策 ジョウトの男

と言うわけで、これが今回の犯人……の残骸だ」

た。 いろいろあったがトウガは犯人の体を持って事件の現場に戻ってき

「こいつは人間ではないようだ.....」「く、く、首が!」

首の方を向け人間ではないことを見せる。

「き、機械の人間.....」

き、機械人間とかすごいテクノロジーだ.....」

《ざわ・・ざわ・・》

(あいつに連絡が取れればこいつのことがよくわかるかも知れんが

....)

トウガはとある一人の男を思い浮かべる。

お兄様。 ホトラヤさんに連絡は取れないんですか?」

旅に出た時から定期的に連絡はしているのだが.....」

覚は頭をかく。

ホトラヤってあれだよな? あのいけすかないジョウト訛りの...

:

ホトラヤさんは私達の資金提供者ですよ...

ヤヨイの言葉にナギサは少し怒ったように言う。

か.... なせ そこまで怒ることは.....でもさあたし的にはあいつはなん

話のわかる男ではある」 「いけすかない奴だと言うのはわかりきったことだ。だがあいつは

そう言ってトウガはボケナビを取り出す。

ボケギアにもポケナビで電話がつながるなんて不思議だなぁ~」 ヤヨイ..... あなたって人は.....」

ナギサはヤヨイの頭の悪さに頭を抱えた。

《ピピピピピピ.....ピピッ》

つながるとはな

繋がるとはなやないで、トウチャン]

私はお前の父親ではない.....それにお前の方が年上だ」

相変わらずノリ悪いのぉ~トウガ~]

まぁ、 いい.....なぜ今まで連絡がつながらなかった」

いろいろあってん。 機械との戦いとかな]

その言葉に少し顔をしかめる。

機械との戦いだと?」

その言いよう。そっちにも出たん?〕

その通りだ。 いったい何なんだ.....」

[ まぁ、ようわからんって所やな。 いからまた連絡取られへんようになると思うわ] こっちもこっちでいろいろ忙し

「そうか.....」

[ まったく。わいとわいの大切なことの二人旅の邪魔でなぁ~]

「二人旅……そうか、例の娘だな?」

[ ひっどい言いようや.....まぁ、大事な娘やよ]

ري ا ロリコンと言うほど年は離れているがそれ以上だからな貴様

ば

[ へっへっへ......まぁそれもそや......おっとそろそろきるで......

「ああ、またな」

《ピッ》

「どうでしたか?」

いや、調べるのは無理だな.....

無理? なんでよ。あいつなら.....

いせ、 無理だ。あちらにも同じものが出ていたらしい」

· 「あっちにも?」」

二人は驚く。

まぁ、 でてきたら今度は捕まえるさ.....出てくればな.

トウガはそう言ってポケモンセンターへと向かった。

# 第14策 ジョウトの男 (後書き)

いや、あの名前の記事に来てくれた人の名前を見ながらホトラヤという名前には無理があったか.....

考えて組み合わせた結果なんですけどね。

# 第15策 これからのこれから (前書き)

実は待っている人なんていなかったんじゃないだろうか......待たせたのだろうか......

### 第15策 これからのこれから

#### 【ポケモンセンター】

「ええ、結構なお歳のようでした。 そろそろ娘さんとリーダー 今日襲われた男性はこの街のジムリーダーだっただと?」

「娘.....あの女か.....」

わると言う話が」

た少女を思い出す。 人だかりの中で男性を抱きかかえお父様と言いながら泣き叫んでい

「実力があれば年齢は関係ないということか.....しかしそれだとジ

ムには挑戦できんな」

「ええ、 リーダー交代の手続きも少しかかるとのことです」

けつ。迷惑だなぁ今回の犯人も」

ナギサの言葉を聞きヤヨイが少し怒ったように言う。

うだ」 犯人を捕まえてきたということで少しは知名度が上がったよ

「いい意味でですけど.....でも謎も増えましたね

ホトラヤも使えねえっ つうんだから謎は謎のままだな」

ヤヨイは地団駄を踏む。

今日のヤヨイは少し不機嫌だな.....」

私もですけど朝はお兄様と一緒に起きられませんでしたし。 それ

にこの事件です」

いやなこと続きで気が滅入っていると言うことか」

トウガは頭に手を当てる。

でも今日は部屋が取れてよかったですね」

今日の事件のせいでこの街から離れていったものも多いようだ...

主にジムに挑戦に来たトレーナーや観光客などだ。

昨日まで満員が普通だったポケモンセンター にも簡単に空き部屋が

できた。

それで.....どうしましょうか」

次の目的地か.....」

次のジムへ向かうにはカナシダトンネルを超えてキンセツに向かう

のが一番い

しかしトンネルは落盤事故により通れない」

となると.....」

りゅうせいのたきをこえ回り道になるがキンセツに行くの?」

ちょっと待ってください。 フエンに先に行った方がい のでは?」

姉妹が別々の目的地を言いだした。

フエンにはロープウェイを使えば簡単に行けますよ」

キンセツの方がいいじゃねぇか! 都会なんだぞ!」

ぎゃ hぎゃ *h*!

「お前達....」

目の前の惨状にトウガは頭を抱える。

「……とにかくハジツゲタウンに向かう。話はそれからだ……」

そして時は過ぎていく.....

続く

# 第15策(これからのこれから (後書き)

短すぎる.....

この文書くのにどれだけかかったか.....

私ってやつは.....

ディスガイア2 (PSP版) 面白いよぉぉぉぉぉぉぉ!

積みゲー たまりすぎやぁ あぁあぁ!

小説書く気力が出えへんのはこのせいやぁあぁあぁ!

神の風終わったしトゥのアナザー も終わってもまだ積があるなんて

:

## 第16策 上りの下り (前書き)

かなりの面白さがあるなぁ~そんなことよりラインバレルの漫画版はアニメ版にはない 9月.....いや、休みなかったし別に何もないか.....

#### 第16策 上りの下り

#### 【りゅうせいのたき】

「 はぁ〜 疲れるよなぁ〜 段差を登るってのはさ」

ヤヨイは体力バカなのにうるさいことを言いますね」

あぁにぃ~?」

「馬鹿をやっているな。 先に進むぞ」

姉妹喧嘩を素通りして先に進むトウガ。

「ちょ、兄貴~」

お兄様。くっ。この愚妹のせいで」

なっ。ナギサが愚妹だよ!」

二人はどちらが愚妹か言い争う。

二人は記憶喪失でありどちらが姉で妹かは覚えてはいない。

どちらが妹かは分からない.....

\_ ....\_

トウガは無言で先に進む。

「兄貴黙っちゃった」

「なんか寂しいですね」

二人はまだ10歳だ。静かなのが嫌い。

#### 誰かにぶつかってしまった。

はわわ.....こんなところに他に人がいるなんて.....」

「く、前方不注意だったか」

「無言だからだよ」

ですね」

通行人とぶつかり倒れてしまった。 他に誰かがいると言うことを考えずに進んでいたため

「あう。痛い.....あなた達は大丈夫ですか?」

「問題ない。そちらは?」

あ、僕は大丈夫です」

立ち上がったトウガは倒れていた相手に手を差し出す。

おっとっと.....ありがとうございます」

かあんた女一人でこんなところで何してんの?」

ヤヨイは指をさしながらそう言う。

「お、女っ!? 僕は男です!」

その言葉に少年は怒鳴りつける!

「あ、あう.....ごめんなさい.....」

「ふ、軽率な発言をするから」

「ぬ、ぬう~」

#### ヤヨイはむくれてしまった。 ナギサの言葉に何も言い返せなく

て言います」 「僕はですね。 ぁ まずは名前を言いましょう。 僕の名前はユウっ

「私はトウガ。 この二人はナギサとヤヨイだ」

「どうもよろしく」

よろしくね~」

全員の紹介が終わりユウが目的を話し始める。

「僕はですね、 ポケモンと人間との間に生まれたという子供を探し

ているのです!」

「ポケモンと」

「人間の間に!?」

トウガはそれほど反応なく。

ナギサとヤヨイは驚く。

まぁ、伝説みたいな感じの噂ですけどね

てももそれで子供ができてるってことは誰かが獣..

『ボカァーン

ヤヨイ」

ごめんなさい.

しかし、お前はなぜそんな噂を....

いえ、 双子の兄を探していましてですね。 その兄がこういう噂に

すぐ流されるたちで.....」

「このう噂をたどれば兄が見つかると?」

好きですから」 「ええ、兄はこう言うの大好きで、こう言うありもしないのが一番

ユウは頭をかきながら苦笑いをする。

こにも来たと言うわけで」 「まぁとにかく。 神秘的なところにいるかもと言うことで、 一応こ

びもし

「と、ただぶつかっただけなのに話が長くなってしまいましたね」

「気にしなくていい」

`いえいえ。旅の邪魔をしてしまって」

そう言うとユウはカナズミ方面へと歩き出した。

では、僕は兄探しの旅に戻りますので」

見つかるといいな。お前の兄が」

ありがとうございます。では.....」

そう言ってユウはその場を去って行った。

「なんかよくわからない人でしたね」

なんかあたしが殴られたり叩かれたりしただけだったような..

「そうですね。楽しかったです」

「楽しんでたのか!?」

ユウがいなくなると再び姉妹の争いが始まった。

ふ う 。 こいつらにも互いを心配すると言う心があるのか..

「お、置いてかないでくれ!」「あ、待ってください!」

そして後ろから二人はそれを追うのであった。

続く

## 第16策 上りの下り (後書き)

感想があると加速しますよ。 さて、まぁとにもかくにもいろいろありましたが と言うわけでこんな話を思いついたと言うわけです。 なんかこう言う話を聞いたことがあったので。

小説更新。

# 第17策 ボックスの姉 (前書き)

ここまで書けたって感じです。 いろいろ時間がかかりましたが活動報告の方のいろんな人の言葉で

これからも頑張ります。

#### 第17策 ボックスの姉

【114ばんどうろ】

あれ? こんなところに研究所的な建物が.....」

ヤヨイが建物を見つけて指をさす。

ポケモンボックス研究所..... 転送システムのことですね」

しかし私たちの目的には関係がない。次へむか.....」

《ドギャーン!》

「あ、あの.....爆音が」

どう見てもあの研究所から煙が....

研究所からは煙が出ている。

ここであの研究所のものと接点を作れると言うのは..... ふむ...

. 行きますか?」

. すでにヤヨイが先行しているがな」

二人が話しているうちにヤヨイは研究所に走っていっていた。

「またですか.....」

しかしこけて倒れているな......」

研究所近くで倒れているヤヨイを指さしトウガは言う。

「いてて……靴ひもが……」

「 まったく..... 手入れを怠るからですよ」

.. と笑いながらこけているヤヨイを見るナギサ。

「ナギサァ!」

ふふつ。 何を怒ってるの? とにかく研究所に行きますよ」

お前.....ふんっ!」

そう言って二人は研究所へ向かう。

「やれやれだな.....」

そう言いながらトウガも研究所に向かって行った。

いてて......あ~任されてたのにこんな惨状で....

人の女性が崩れた機材の中で呟いていた。

すいませーん。 なにがあった.....おうえぇぇぇぇ!?」

゙すごい煙ですね.....」

、え、なに、お客さん?」

《ガラカッ》

煙を噴く機材から女性は身を乗り出した。

お客ではない.....ただこの研究所から煙が出ていたのでな」

いやあ .. 面目ない。 妹からまかせられたって言うのに.....」

頭をかきながら女性は笑う。

私の名前はアズサ。本当は別のところの管理人なんだけどさ」

「他のところの?」

いや、当分妹が帰ってこないから代わりに管理よろしくってさ」

ケラケラと笑いながらアズサは話す。

「しかしこの惨状は大丈夫なんですか?」

「え、えへっへっへ.....」

「なんだその変な笑い声は.....」

笑いながらもアズサを山の方へ向かい機材を調べる。

·..... あり?」

「どうしたの?」

いや、その.....パーツが壊れちゃってるんだよねぇ~」

ニャハハと笑いながら頭をかくアズサ。

「それはまずいのではないか?」

「あ、あはは.....どうしよう?」

「いや、どうしようて.....」

そう言いながら壊れたパーツを置いてこちらを見るアズサ。

これも何かの縁 : パ ー ツ買ってきてくれないかなぁ~」

なんであたしらが!」

゙お兄様。どうしますか?」

叫ぶヤヨイを横目にナギサはトウガに問う。

「..... いいだろう。買ってきてやろう」

「なんと! ありがとう! パーツはフエンの漢方薬屋の隣で売っ

てるから!」

「あ、目的地決定ですね」

「 困難で敗北したぁ~!」

倒れながら床を叩くヤヨイ。

それを見ながら勝ち誇るナギサ。

「お前達.....」

そしていつものように呆れるトウガであった.....

「てな訳でこのパーツだからね。よろしく」

「ああ.....」

トウガはアズサから手紙を受け取る。

じゃあよろしくね。 私いろいろやらなきゃだから、 戻るね」

《ギィ、バナン!》

アズサは急いで研究所に帰って行った。

「……行くか!」

そう言ってトウガはは知って研究所を後にした。

「ちょ、お兄様!」

....

ナギサは追いかけるがヤヨイは動いてなかった。

「......ほへ? あ、まままま、まってー!」

そしてかなり離れた後に気がついたヤヨイは急いで追いかけた。

続く

# 第17策 ボックスの姉 (後書き)

この頃いろいろゲームやってんですけどね。

ニコニコに実況あげたり。

専門学校で単位落としそうだったり.....

人生厳しいな.....

誰か1から見たとか途中まで見たでもいいから感想くれると嬉しい

です。

生きる糧になります。

書くためのエネルギーじゃなくて、生きる糧に。

## PDF小説ネット発足にあたって

ビ対応 行し、 公開できるように 小説家になろうの子サイ ています。 部を除きインター 最近では横書きの F小説ネッ の縦書き小説 の縦書き小説 そん をイ を思う存分、 たのがこ な中、 ネッ 書籍も誕生しており、 タテ書き小説ネッ ト関連= 誰もが簡単にPDF形式 ネッ て誕生しました。 ト上で配布す 小説ネッ 横書きという考えが定着しよ てください。 トです。 既 は 2 0 存書籍 タイ いう目的の基 07年、 の電子出版 小説を作成 小説が流 ンター

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。 http://ncode.syosetu.com/n6271q/

ポケットモンスター ブレイカ

2011年10月10日10時21分発行